Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-09-06

節の右方周縁部における線形順序と階層構造

森山，倭成

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2022-03-25
(Date of Publication)
2023-03-01
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第8216号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1008216

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博　士　論　文

令和 3 年 12 月 2 日

節の右方周縁部における線形順序と階層構造

神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程社会動態専攻

森　山　倭　成

目　次

目　次 …… i

謝　辞 …… iii

略語一覧 …… iv

第 1 章　CP 研究の諸問題 …… 1

1.　目的と枠組み …… 1
2.　CP 研究の変遷 …… 4
2.1.　CP 仮説 …… 4
2.2.　分離 CP 仮説とカートグラフィー研究 …… 7
3.　日本語における CP 研究と課題 …… 11
3.1.　丁寧語 …… 12
3.2.　モダリティ要素 …… 14
3.3.　終助詞 …… 16
3.4.　コピュラ …… 17
3.5.　問題提起 …… 17
4.　問いと提案 …… 19
5.　構成と概要 …… 22

第 2 章　分離 CP 仮説と主要部移動 …… 24

1.　はじめに …… 24
2.　主要部移動に関する想定と提案 …… 24
2.1.　主要部移動 …… 24
2.2.　CP 領域の階層構造 …… 25
3.　AddrP …… 28
3.1.　AddrP に基底生成される丁寧語 …… 32
3.2.　丁寧語の主要部移動 …… 34
3.3.　丁重語 …… 43
3.4.　長崎方言の「です」 …… 45
3.5.　「っす」 …… 46
4.　MP と ForceP …… 48
5.　EP と SRP …… 60
6.　終助詞の「もん（もの）」と「こと（感嘆）」 …… 70
7.　まとめ …… 78

第 3 章　MP と補部選択 …… 80

1. はじめに 80
2. 推量辞の補部選択と主要部移動 84
2.1. 推量辞「だろう・でしょう」の構造位置と補部選択 85
2.2. 推量辞の確認要求用法 90
2.3. 意志・勧誘の「（よ）う」 94
3. （非）命題確認要求表現 97
4. 「まい」の統語と形態 104
5. 補文標識の「こと」と「ように」 107
6. まとめ 108

第 4 章　分裂文の統語構造 110

1. はじめに 110
2. 空演算子移動分析と直接移動分析 111
3. コピュラの構造位置 115
4. 焦点要素の構造位置 120
5. 前提節の統語構造 129
6. まとめ 134

第 5 章　結　語 136

参考文献 140

謝　辞

指導教員の岸本秀樹先生に深く御礼申し上げます。岸本先生には博士前期課程から五年間に渡ってご指導ご鞭撻を賜りました。授業はもちろんのこと、昼食時や研究室での会話を通して、研究や生きていく上で必要な数多くのヒントを先生から頂きました。私は発表会のたびに研究トピックを変えるような学生でしたが、本論文のトピックに辿り着くことができたのは、自由に研究を行う環境を先生が与えてくださったからです。博士論文執筆中はコロナ禍と重なりましたが、そのような状況下でも対面でご指導を受ける機会を設けてくださいました。ご研究やご校務でご多忙のところ、本論文の原稿に何度も目を通してくださり、議論の根幹に関わる問題点を数多くご指摘くださいました。先生のご指導および先生の長年に渡るご研究なくしては、本論文は決して存在しませんでした。

言語学研究室の田中真一先生と澤田治先生にも感謝申し上げます。博士論文の執筆や修了後の進路に関して、常に親身になって様々なご指摘やご助言をくださりました。そして、副指導教員の石山裕慈先生と鈴木義和先生にも御礼申し上げます。

外部審査員の斎藤衛先生にも心より御礼申し上げます。ご多忙にもかかわらず、短期間でのご審査、誠にありがとうございました。

学部時代にご指導を賜った田中秀和先生と金子真先生にも厚く御礼を申し上げます。

研究や進路のことでご助言をくださった木戸康人先生、中嶌浩貴先生、臼杵岳先生、また、山口真史先生を初めとする阪大神大研究会の皆様、神戸大学言語研究室の大学院生の皆様にも大変お世話になりました。その他、学会等の研究発表において有益かつ貴重なコメントをくださった方にも感謝申し上げます。特に、関西言語学会第 46 回大会と日本言語学会第 163 回大会の研究発表では、司会進行の佐野まさき先生に大変お世話になりました。

最後に、地元の家族と Pitsinee Puernngooluerm 氏に謝意を表します。

本稿に残っている不備や誤りは、全て筆者の責任です。本研究は JSPS 科研費 JP19J20008 の助成を受けています。

略語一覧

ABL	Ablative
ADDR	Addressee
AddrP	Addressee phrase
A	Adjective
ALLOC	Allocutive
AN	Adjectival noun
ASP	Aspect
Aux	Auxiliary verb
CopP	Copula phrase
CP	Complementizer phrase
D-structure	Deep structure
EP	Emphasis phrase
EPP	Extended Projection Principle
F	Feminine
FinP	Finite phrase
FocP	Focus phrase
ForceP	Force phrase
HA	high honorific addressee
HHA	high honorific addressee
IntP	Interrogative phrase
M	Modal, Mood; Masculine
ModP	Modifier phrase; Mood phrase
MP	Modal phrase
N	Noun
NegP	Negative phrase
NHA	nonhonorific addressee
NHS	nonhonorific subject
P	Preposition; postposition
PL	Plural
PolP	Polarity phrase
PRF	Perfect
Prt	Particle
PST	Past
Q	Question (particle)

QembP	Qembedded phrase
S	Sentence
SAP	Speech act phrase; Speaker-addressee phrase
SRP	Soliciting response phrase
S-structure	Surface structure
SUBJ	Subject
TP	Tense phrase
TopP	Topic phrase
V	Verb
vP	Little verb phrase
VP	Verb phrase

第 1 章　CP 研究の諸問題

1.　目的と枠組み

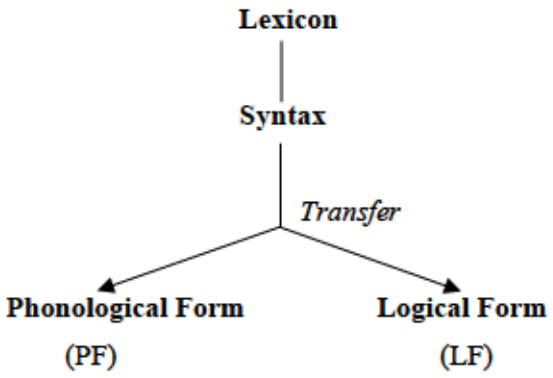
本論の主たる目的は日本語における分離 CP 構造の追究である。本論で言うところの CP 領域とは、時制要素が投射する TP よりも上位の構造位置に存在し、多重の投射からなる領域である。通常の分析では、TP の上位には CP という単一の句が投射すると仮定される。これに対して、本論は、これまで CP と呼ばれてきたものは、単一の句ではなく複数の投射からなる集合体であるという立場を取る。CP 領域に複数の投射を仮定する仮説は、分離 CP 仮説（split CP hypothesis）と呼ばれる。Culicover (1991) の PolP 分析や Rizzi (1997) のカートグラフィー研究が分離 CP 仮説の代表例である。本論では、日本語の言語事実に基づいて日本語における分離 CP 構造を追究する。日本語には、終助詞に代表されるように多種多様な文末要素が存在する。例えば、(1)a では、時制要素の右隣に「っけ・か・な」、(1)b では、「わ・よ・ね」が表出している。時制要素の「た」の右隣に複数の語が生起しているので、単一の CP を仮定する分析では、(1)における文末要素の複数生起の事実を捉えることはできない。通常、一つの句は一つの主要部から投射すると仮定されているため、単一の CP を仮定すると、CP の主要部として現れるのは一語までに限られることになる。「っけ・か・な」や「わ・よ・ね」は、それぞれ独立した別個の要素なので、複数の句が投射していることがこれらの例から示唆される。単純な例ではあるが、(1)の言語事実は、単一 CP 仮説と比較して分離 CP 仮説の方が説明力が高いことを端的に表している。

(1)　a. 何だった-っけ-か-な。
　　b. そうだった-わ-よ-ね。

日本語には数多の文末要素が存在するが、これまでの生成文法研究では、管見の限り、統一的な説明はそれほど多く試みられてこなかった。日本語の記述的な文法研究では、終助詞やモダリティ要素などの文末要素は主要な研究トピックの一つである。多彩な文末要素の意味的な相違や形態的な特性が繰り返し記述されてきた（森山・仁田・工藤 (2000); 宮崎・安達・野田・高梨 (2002) など）。一方、生成文法の理論研究においては、語の多様性はかえって研究の障壁となりうる。生成文法の基本姿勢は、最大限に制限された仮説からより多くの言語現象を捉えることである。文末要素におけるバラエティの豊かさを捉えようとすると、仮説が過度に複雑化し、理論としての意味をなさなくなる恐れがある。このため、先行研究では、一部の文末要素に限定して議論が展開されてきた。終助詞、モダリティ要素、丁寧語などが個別的に研究されており、それぞれに詳細な分析が提案されている。そうすると、CP 領域の研究において課題となるのはそれらの研究成果をどのように統合するかである。理論をできる限り簡素にしながら、同時に日本語における CP 領域の語彙の豊富さを説明しなければならない。理論と記述の緊張関係を緩和することが日本語の CP 領域の研究では重要となる。

本論では、生成文法で一般的に仮定されている Y モデルを採用する。(2)に図示するように、Y モデルでは、レキシコンを元にして統語部門で組み上げられた文の構造が音韻形式および論理形式に転送される（Chomsky (1981, 1986a) など）。(2)を上下逆さまにするとアルファベットの Y の形に見えることから、Y モデルと呼ばれる[1]。ミニマリストプログラム以前の Y モデルでは、統語部門において深層構造（D 構造; D(eep)-structure）と表層構造（S 構造; S(urface)-structure）が想定されていていたが、ミニマリストプログラムの文法モデルでは、この二つの区別は棄却されている（Chomsky (1995, 2000, 2001); Bošković (1994)など）。

(2)



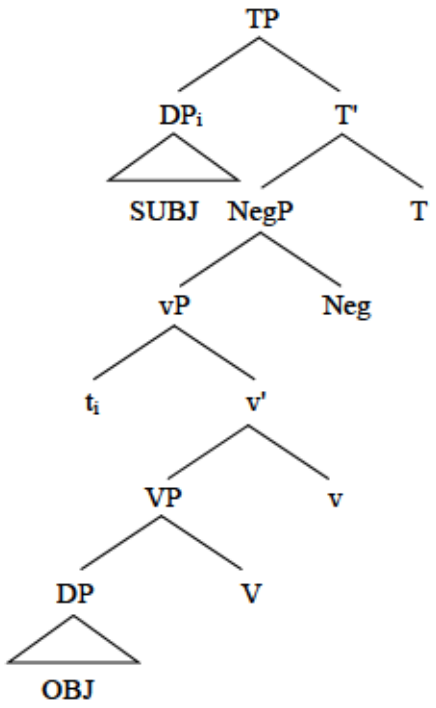
本論で仮定する TP 以下の日本語の階層構造は、(3)の樹形図に示す通りである。動詞述語文は、[TP [(NegP) [vP [VP …]]]] の階層構造を持つ。TP は時制要素が投射する句である。その下の NegP は否定辞が投射する句である。否定辞が生起しない文には NegP は投射しないと仮定する（cf. Laka (1990)）。動詞句については、分離動詞句仮説（Chomsky (1995)）を採用し、軽動詞からなる vP と動詞からなる VP の二層構造を持つと仮定する（Kratzer (1996) や岸本・菊池 (2008), Kishimoto (2006b), 岸本 (2015, 2016) も参照）。また、本論では動詞は、V から T への主要部移動は起こさず動詞句内にとどまると仮定する（岸本 (2005); Kishimoto (2007, 2008a/b, 2013c, 2017)）[2]。

他動詞文の目的語は V と姉妹関係にある構造位置に配置される。主語については、動詞句内主語仮説（VP-internal subject hypothesis）を採用し、主語となる名詞句は vP の指定部に基底生成されると仮定する（Fukui (1986); Kuroda (1988); Sportiche (1988); Koopman and Sportiche (1991); Burton and Grimshaw (1992); McNally (1992); Huang (1993) など）。さらに、T は主格素性と EPP 素性を担うと想定し[3]、主格標示される名詞句は、主格の認可を受けた後に、EPP 素性の照合のために TP の指定部に A-移動すると仮定する（Takezawa (1987); Hiraiwa (2005); Kishimoto (2001, 2010, 2012, 2020); Miyagawa (2001)[4]）。また、日本語の名詞句の構造について

[1] Y モデルを想定した場合、語用論とのインターフェースの問題が生じるが、本論ではこの問題については論じない。この点は、今後の研究の大きな課題の一つである。
[2] 日本語の統語論研究では、動詞の T への主要部移動が仮定されることもある（Otani and Whitman (1991); Koizumi (1995, 2000); Funakoshi (2016)）。
[3] ただし、EPP は不要であるとする立場もある（Martin (1999); Bošković (2002)）。
[4] 日本語の主語は、動詞句（vP）にとどまる（あるいは、とどまることもある）と仮定する立場もある（Fukui (1986); Kuroda (1988); Aoyagi and Ishii (1994); 渡辺 (2009)）。

は諸説あるが、Abney (1987) や岸本 (2005) に従い DP 仮説を採用する（cf. Watanabe (2006); Simpson (2021)）。

(3)



本章の議論は以下のように進める。2 節では、CP 研究の変遷について概観する。補文標識は Rosenbaum (1967) によって提案され、当初は変形規則によって派生に導入されていた。その後、Bresnan (1970) が句構造規則に基づく分析を提案する。X'理論の時代に突入してからは、CP という投射が仮定されることが一般的になる。さらに、1990 年代以降、CP を単一の投射とみなさず、多重の投射からなるとする分離 CP 仮説が提案される。3 節では、日本語に関する CP 研究の現状を整理し、二つの問題を提起する。第一に、日本語の CP 研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞・コピュラなどの文末要素が個別的に研究されている。しかしながら、日本語の分離 CP 構造を明らかにするためには、それぞれの文末要素の関係を調べる必要がある。第二に、先行研究では Rizzi (1997) の [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP ….]]]]] の階層構造を前提として議論が展開されることがある。ところが、日本語の分離 CP 構造がイタリア語のそれと同一であるという保証はないので、日本語の言語事実に基づいて分離 CP 構造を追究することが求められる。4 節では、博士論文全体の問いと提案を提示する。3 節で提起した問題点を踏まえて、(i)「CP 領域の要素にはどのようなものがあるか。」と(ii)「日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか。」という二つの問いを立てる。(i)に関しては、丁寧語・一部のモダリティ要素・終助詞は CP 領域の主要部であるとみなせるが、一部のモダリティ要素とコピュラは CP 領域の主要部ではないと主張する。(ii)に関しては、本論では、日本語の分離 CP 構造として [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP …]]]]] の五階建ての階層構造を提案する。5 節では本論の構成と概要を示す。

2. CP 研究の変遷

本節では、CP 研究の変遷を概観する。2.1 節では、CP という投射が提案されるまでに至る議論の流れを追う。Rosenbaum (1967) による補文標識（complementizer）の導入、Bresnan (1970) による補文標識に関わる句構造規則の提案、X'理論の導入に伴う CP 仮説の提案について概説する。続く 2.2 節では、CP 領域が複数の投射からなっていることを示した Culicover (1991) の研究と Rizzi (1997) のカートグラフィー研究について論じる。

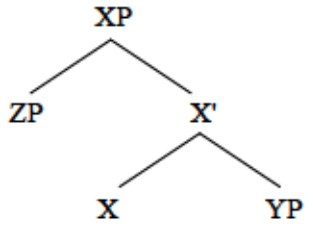
2.1. CP 仮説

CP という用語は Complementizer Phrase の頭文字をとった略称である。Complementizer（補文標識）は、1960 年代に Rosenbaum (1967) によって提案された範疇である。(4)における *that* や *if* は補文（complement clause）を導入する働きを持つので補文標識と呼ばれる。Rosenbaum (1967) は、補文標識は句構造規則（Phrase Structure Rules）によって導入されるのではなく、変形規則（Transformational Rules）によって文に導入されるとしている。この分析では、深層構造には補文標識は存在せず、表層構造において初めて導入されることになる。これに対して、Bresnan (1970) は S' → Comp S という句構造規則を提案している。Comp は Complementizer の略称であり、Comp には *that* や *if* が置かれる。この分析では、深層構造の段階で補文標識が導入されることになる。Bresnan (1970) の分析の方が理論的に簡潔であることから、句構造規則に基づく分析が広く採用されることとなる。

(4) a. John said that Mary ate pizza.
　　b. John wondered if Mary ate pizza.

時代を下ると、1970-80 年代には、句構造規則に変わる理論として、X'理論（X'-theory）が提案される（Chomsky (1970)）。それまでに仮定されていた句構造規則は、(5)に示されるような一つの鋳型に集約できることが明らかとなった。(5)は任意の投射の句構造を示したものである。X は XP を投射する主要部（head）である。X と姉妹関係にある YP は X の補部（complement）と呼ばれる。XP に直接支配され、X'と姉妹関係にある ZP は XP の指定部（specifier）と呼ばれる。英語では X は補部の左側に現れるが、日本語では補部の右側に現れる。主要部が補部の左側に現れる言語は主要部先行型言語（head-initial language）、右側に現れる言語は主要部後行型言語（head-final language）と呼ばれる。

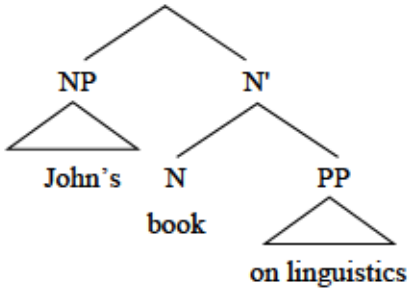
(5)



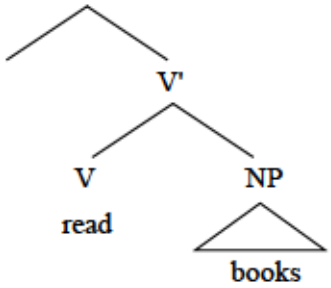
(6)に例示するように、X の位置には N（noun）・V（verb）・A（adjective）・P（preposition）

のような主要部が生じ、それぞれ NP・VP・AP・PP を投射する。

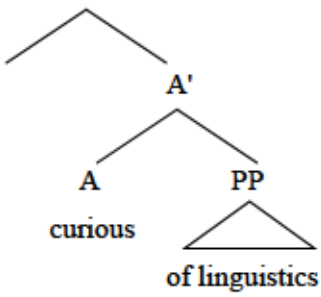
(6) a.



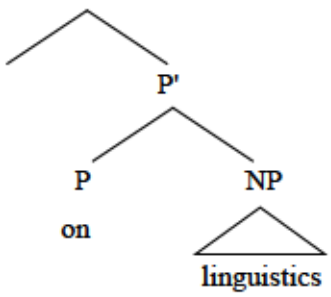
b.



c.

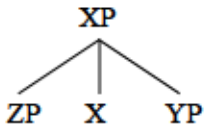


d.

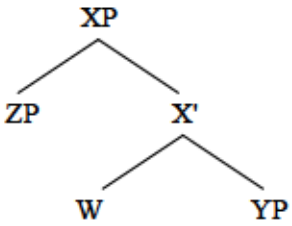


X'理論によれば、全ての句構造は、二項枝分かれの原理（Binarity Principle）と主要部の原理（Headedness Principle）を満たしていなければならない。二項枝分かれの原理とは、枝分かれは二項に限られ、三項以上の枝分かれは許されないという原理である（Kayne (1984)）。したがって、(7)a のような三項枝分かれの構造は許されない。主要部の原理とは、一つの投射にはそれを投射する主要部が含まれていなければならないという原理である。(7)b には XP を投射する主要部 X が含まれていない。かわりに W が生じているが、この要素は XP を投射しないので、XP の主要部とはみなされない。このため、(7)b は主要部原理に違反している。一方、(6)に示した NP・VP・AP・PP はいずれもこの原理を満たしている。

(7) a. *



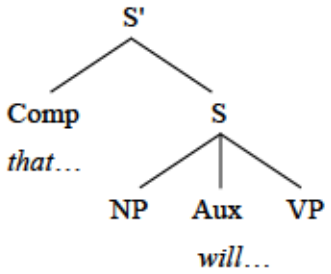
b. *



X'理論が提案された初期は、X に現れるのは実質的な語彙的意味を持つ N・V・A・P のような語彙範疇（lexical cateogory）に限定されていた。これに対して、意味が抽象化して実質的な意味を持たない語も中には存在する。例えば、*will* のような助動詞（auxiliary verb）や *that* のような補文標識が挙げられる。このような語は機能範疇（functional category）に含まれる。X'理論以前の句構造規則に基づく分析では、文は S → NP Aux VP という句構造規則によって生成されると考えられていた。NP には主語にあたる名詞句、Aux には *will* や *can*、時制要素

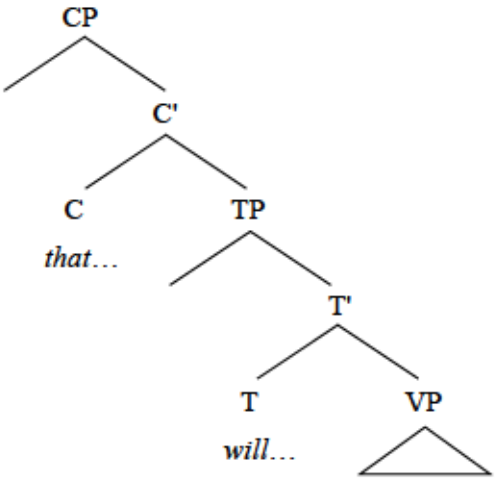
などの助動詞、VP には動詞句の要素が表出する。しかしながら、この句構造規則を X'理論に互換しようとしたときに問題が生じる。(8)の構造を見ると明らかなように、S によって支配される領域が三項に枝分かれしている。これは二項枝分かれの原理に違反しているので、X'の鋳型に収まらない構造になっていることが分かる。さらに、主要部原理によると、全ての句にはそれを投射する主要部が含まれているはずであるが、(8)の構造を見る限り、S に対応する主要部は存在していない。S のみならず、S'についても、主要部原理に違反している。S'を投射する主要部が含まれていないからである。そうすると、Aux や Comp のような機能範疇は X'理論では扱えないということになる。

(8)



こうした背景で、当初、X'理論は語彙範疇にのみ当てはまる理論であると考えられていたが、その後、修正が加えられて機能範疇も句を投射すると仮定されるようになる。まず、*will* や *can* のような助動詞は *would* や *could* のように過去形を持つので、時制（tense）と関係している。S と呼ばれていた投射は、時制要素が投射する句という意味で TP（時制句; Tense Phrase）と呼ばれるようになる[5]。そして、補文標識については、CP を投射する主要部とみなされるようになる（Chomsky (1986b)）。(9)に示すように、S と S'がそれぞれ TP と CP に置き換わったことで、二項枝分かれの原理と主要部の原理に関する問題が解消されている。

(9)

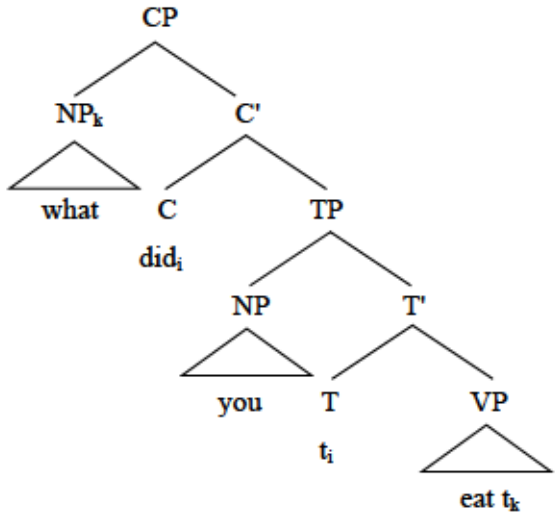


[5] TP と呼ばれる以前に IP（屈折辞句; Inflectional Phrase）と呼ばれていた時期もあるが、CP 仮説の提案とはあまり関係がないので、ここでは説明を割愛している。この点に関しては、Pollock (1989) や Chomsky (1995) を参照されたい。

CP は補文だけでなく、主文においても認められる。(10)では、*wh* 句の *what* と *did* が主語の *you* の左隣に現れている。英語では主語の名詞句は TP の指定部に位置すると仮定されているので、線形順序に基づくと、*what* と *did* は TP より上位に位置付けられることになる。(11)のように、主節においても CP の投射を仮定することで、*what* と *did* はそれぞれ CP の指定部と主要部であるという説明が成り立つ。（*what* は WH 移動によって目的語の位置から CP の指定部に移動し、*did* は主要部移動によって T から C に移動する。）

(10) What did you eat?

(11)



このように、CP は補文のみならず主節においても投射する。（CP は Complementizer Phrase の略称であるが、(主節は補文ではないので、) 文字通りに解釈すると、主節に Complementizer Phrase は存在し得ないはずである。しかし、今日の統語論では、補文だけでなく主節でも CP が仮定されることが一般的である。）

2.2. 分離 CP 仮説とカートグラフィー研究

CP 仮説の確立後も、CP に関する重要な観察がなされ、新たな仮説が提案されている。Culicover (1991) は、(12)のようなデータを提示している。補文標識の *that* 以下では、否定倒置（negative inversion）が生じている。

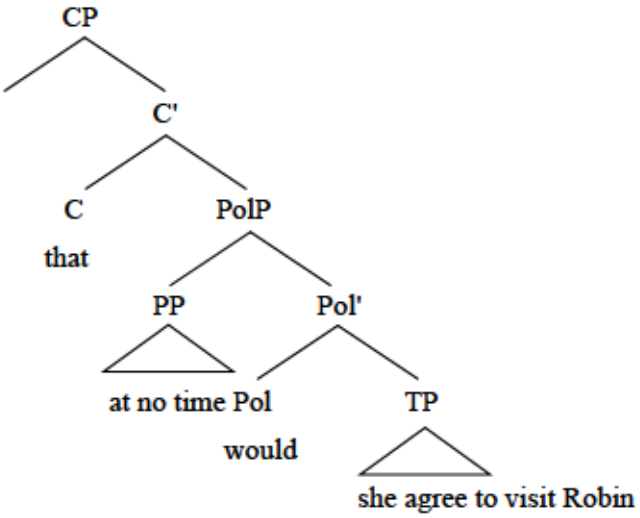
(12) Lee said that at no time would she agree to visit Robin.

先にも述べたように、英語において、主語の名詞句は TP の指定部にあると仮定されているので、主語の名詞句よりも左側で発音される *that at no time would* は TP の上位の投射に位置していることが分かる。ここで問題となるのは、*that* と *would* のような主要部要素が複数共起している点である。一般的な分析では、否定倒置によって節の初頭に移動する *at no time* や *would* はそれぞれ CP の指定部と主要部に移動すると仮定されている。加えて、*that* も CP

の主要部であるとされている。しかし、そのような分析では、(12)において、*that* と *would* が共起可能であるという事実を捉えることができない。主要部の競合によって非文法的になることが予測されてしまうからである。

Culicover (1991) は、(12)のデータを説明するために、(13)に示すような構造を提案している。この分析では、従来 CP とされてきた投射は二分割され、CP と PolP（Polarity Pharase）に分けられる。CP の主要部には *that*、PolP の指定部には *at no time*、主要部には *would* が割り当てられる。CP を二つに分離することによって、主要部の競合の問題を回避でき、共起関係を捉えることが可能になる。

(13)



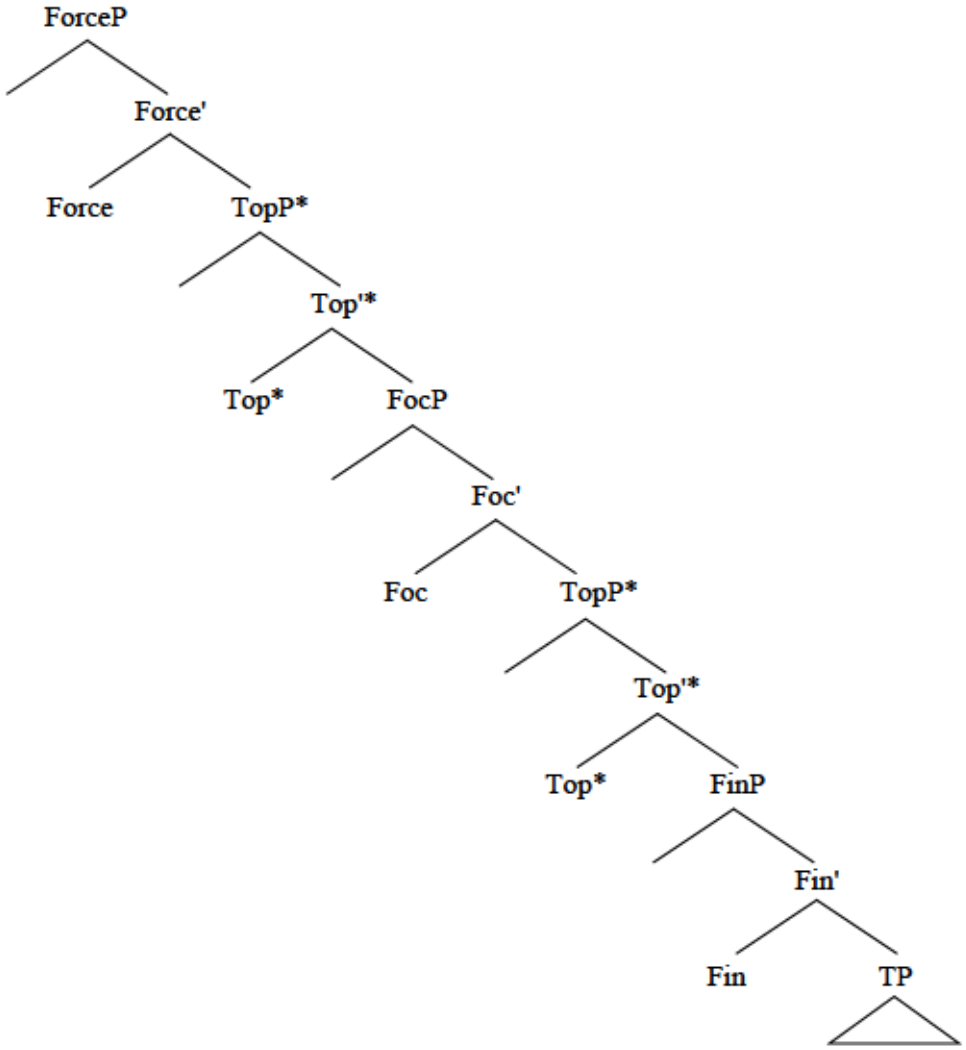
CP を分離するアイディアは、同時代に様々な文献で提案されている（Authier (1992); Hoekstra (1993); Nakajima (1996); Rizzi (1997) など）。このような仮説は分離 CP 仮説（split CP hypothesis）と呼ばれる。

1990 年代中頃以降、ミニマリストプログラムの枠組みに基づく理論研究が本格化するとともに、CP 領域の研究においても新たな研究プロジェクトが始動する。統語構造を地図のように詳細に記述しようとするカートグラフィー研究（the cartography of syntactic structures）の登場である。これは、CP・TP・VP などの句をさらに細かく分解することで統語構造を精緻化することを目指す研究プロジェクトである（Rizzi (1997); Cinque (1999); Shlonsky (2010); Rizzi and Cinque (2016)）。CP のカートグラフィー研究では、CP の分離構造を示唆するデータが少数でも見つかれば、それに基づいて新たな投射が設定される。このため、Culicover (1991)などの分離 CP 仮説と比較してみても、設定される投射の数が非常に多くなる傾向にある。カートグラフィーの立場は分離 CP 仮説の中でも急進的な立場にあるといってもよいであろう。CP 領域の階層構造の精緻化を試みた Rizzi (1997) は、イタリア語において左方周縁部（left periphery）に現れる構成素を詳細に分析し、CP 領域は [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP…]]]]] の階層構造を持つと主張している[6]。ForceP は平叙文・疑問文・命令文・感嘆文などの節のタ

[6] カートグラフィー研究の手法は、CP 領域だけでなく、TP 領域や VP 領域などにも応用されている（この点は遠藤・前田 (2020) に詳しい）。広く知られたところでは、Cinque (1999)

イプの指定に関わる投射、TopP は題目化（topicalization）に関わる投射（Chomsky (1977) も参照[7]）、FocP は焦点化（focalization）に関わる投射、FinP は節の定性（finiteness）に関わる投射である。CP 領域の最上位の投射は ForceP であり、最下位の投射は FinP である。TopP は FocP の上位にも下位にも投射することが可能である。TopP の右肩のアスタリスクは、TopP が多重に投射できることを示している。

(14)



イタリア語には *che* 'that' と *di* 'of' という補文標識がある。(15)の対比が示しているように、*che* は定形節を導入するのに対し、動詞の不定形 *apprezzare* 'appreciate' が後続していることから分かるように、*di* は非定形節を導く。Rizzi (1997) は、*che* を ForceP の主要部、*di* は FinP の主要部と仮定している。CP 領域において、ForceP は最上位、FinP は最下位に起こる投射である。

が様々な副詞の線形順序を精査し、TP 領域周辺に極めて複雑な階層が存在することを提案している。

[7] 話題化を CP への移動とみなさず、TP への付加（adjunction）とみなす立場もある（Lasnik and Saito (1992)）。

(15) a. Credo **che** loro apprezzerebbero molto il tuo libro.
'I believe that they would appreciate your book very much.'
b. Credo **di** apprezzare molto il tuo libro.
'I belive 'of' to appreciate your book very much.'
(Rizzi (1997: 288), 太字は筆者)

che が CP 領域の最上位に位置付けられることは、話題化によって前置される構成素との線形順序から確認できる。(16)は、話題化を受けた *il tuo libro* 'your book'の左隣に *che* が現れるときのみ文法的になることを示している。主要部先行型の言語では、左側に現れる構成素が右側に現れる構成素より構造的に高い位置に生じるので、*che* は *il tuo libro* より構造的に上位にあるとみなすことができる。

(16) a. Credo **che** il tuo libro, loro lo apprezzerebbero molto.
'I believe that your book, they would appreciate it a lot.'
b. *Credo, il tuo libro, **che** loro lo apprezzerebbero molto.
'I believe that your book, they would appreciate it a lot.'
(Rizzi (1997: 288), 太字と下線は筆者)

これに対して、*di* は話題化を受ける構成素よりも構造的に下位に起こる。(17)の対比から分かるように、*di* は話題化を受けた *il tuo libro* の右側に現れなければならず、反対の語順では許容されない。このことから、*di* は話題化に関わる投射よりも下位の構造位置に存在することが示唆される。さらに付け加えると、話題化を受ける構成素は *che* の右側に現れるので、*di* は *che* よりも下位にあるということができる。Rizzi (1997) は、*che* を ForceP の主要部、話題化を受ける構成素を TopP の指定部、*di* を FinP の主要部であると仮定しているので、[ForceP [TopP [FinP…]]] の階層関係が成り立っていることが分かる。

(17) a. *Credo **di** il tuo libro, apprezzarlo molto.
'I believe 'of' your book to appreciate it a lot.'
b. Credo, il tuo libro, **di** apprezzarlo molto.
'I believe 'of' your book to appreciate it a lot.'
(Rizzi (1997: 288), 太字と下線は筆者)

イタリア語には話題化以外に焦点移動という移動操作も存在する。(18)の大文字で表記されている QUESTO 'this' は動詞の補部位置から焦点移動を受けて文頭に移動した構成素である。QUESTO はこの文の焦点(focus)として解釈され、それ以外の構成素は前提(presupposition)として解釈される。焦点移動を受ける構成素は、話題化を受ける構成素との共起も可能であ

る。(18)では、QUESTO の左側に *domani* 'tomorrow'、右側に間接目的語の *a Ginnai* 'to Gianni' が生起している。

(18) (Domani,) QUESTO (a Gianni,) gli dovreste dire
'(Tomorrow,) THIS (to Gianni,) we should say.'
(Rizzi (1997: 298))

話題化と焦点移動は移動操作が適用可能な回数に違いがある。(19)では、*il libro* と *a Gianni* が話題化を受けて文頭に現れている。一方、(20)では A GIANNI と IL LIBRO が焦点移動の適用を受けて文頭に移動しているが、非文と判断される。要するに、話題化は複数回の適用を受けることができるが、焦点移動の適用は一度までに限られる。このため、TopP は、多重生起可能な投射であることを示す * を伴って、TopP*と表記される。

(19) Il libro, a Gianni, domani, glielo darò senz'altro.
'The book, to Gianni, tomorrow, I'll give it to him for sure.'
(Rizzi (1997: 290))

(20) *A GIANNI IL LIBRO darò (non a Piero,) l'articolo.
'TO JOHN THE BOOK I'll give, not to Piero, the article.'
(Rizzi (1997: 290))

Rizzi (1997) では、焦点化を受ける要素は FocP の指定部に移動すると仮定されている。焦点化を受ける構成素は、話題化を受ける複数の構成素の中間に現れるので、[TopP* [Foc [TopP*…]]] の階層関係が認められる。これを [ForceP [TopP* [FinP…]]] の階層構造と組み合わせることで、[ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP…]]]]] の階層構造が得られる[8]。Rizzi はその後もカートグラフィーの枠組みで研究を推進し、より詳細な階層関係を提案している。例えば、間接疑問文を導入する *se* 'if' は IntP（Interrogative Phrase）の主要部、前置された副詞は ModP（Modifier Phrase）の指定部、埋め込み節の *Wh* 句は QembP（Qembedded Phrase）の指定部に生じると論じられている（Rizzi (2001); Rizzi and Bocci (2017) など）。このように、カートグラフィー研究では、CP 領域に対して極めて精緻な統語構造が設定されている。

3. 日本語における CP 研究と課題

分離 CP 仮説が提案されるまでに至る経緯をまとめたところで、次に日本語の CP 研究の現状を整理し、問題点を指摘する。日本語の CP 研究では、「です・ます」のような丁寧語、「だろう」のようなモダリティ要素、終助詞、「だ」のようなコピュラが中心的に分析され

[8] ただし、TopP と FocP は、topic 素性と focus 素性を持つ要素が現れたときのみ投射される（Rizzi (1997: 288)）。

ている。3.1-3.4 節では、先行研究の提案の要点をまとめる。3.5 節では、現在の CP 研究の全体的な課題を指摘する。

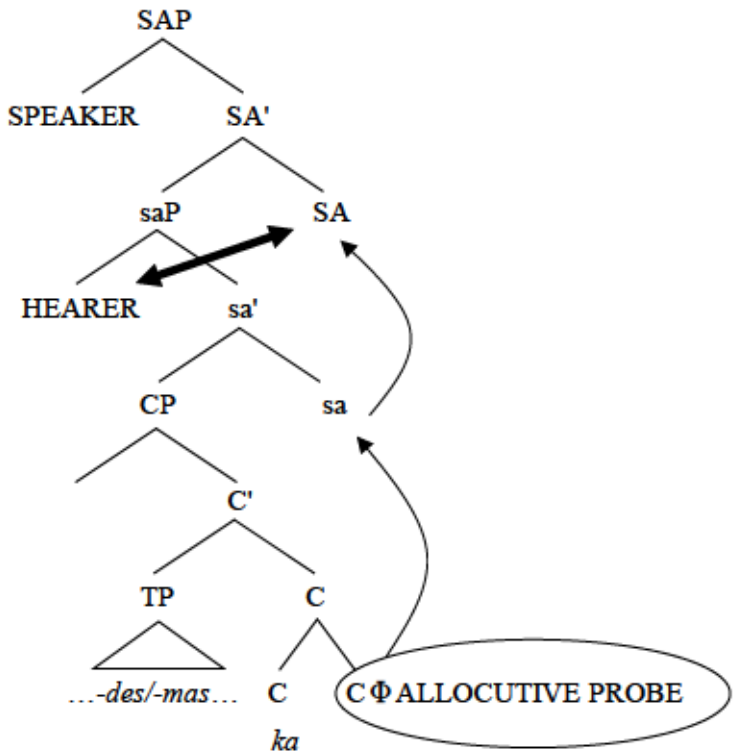
3.1. 丁寧語

日本語の丁寧語には「ます」と「です」がある（Harada (1976)）。(21)に例示するように、「ます」は動詞型の活用語の連用形に接続し、「です」は名詞に接続する。「ます」と「です」の後部には、時制要素の「た」が接続することも可能である。

(21) a. 太郎は本を読みました。
　　 b. 今日は雨でした。

丁寧語研究で最も影響力のある文献は Miyagawa (2012, 2017) である。Miyagawa は、(22)に示すように、CP の上位に SA（Speech Act Phrase）と saP を設け、丁寧語との関係を持つアロキュティブ探査子（allocutive probe）がこの投射の主要部に移動するとしている。SPA および saP は発話行為に関わる投射である（Speas and Tenny (2003)）。SAP 指定部には話し手を表す SPEAKER、saP 指定部には聞き手を表す HEARER が置かれる。C に存在するアロキュティブ探査子が SAP への主要部移動を起こし、その後、アロキュティブ探査子が HEARER と一致を起こすと仮定されている。

(22)



このような分析は、(23) に示すデータから支持されるという。(23) の容認性の対比は、疑問を表す終助詞の「か」が丁寧語と共起するときは容認されるが、丁寧語が表出しないときは

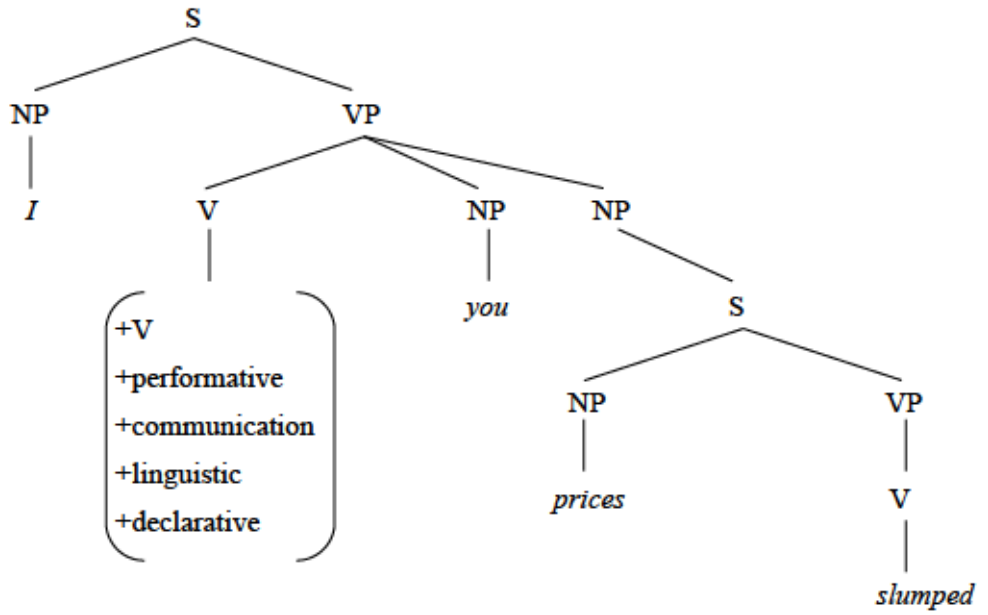
容認されないことを示している。この観察は Miyagawa (1987) に基づく。Miyagawa (1987) は、疑問の終助詞の「か」はなんらかの要素による統率（govern）を受けなければならないと仮定した上で、丁寧語は「か」を統率する構造位置まで LF 移動するため、(23)a は容認されるとしている。一方で、(23)b は、「か」を統率する位置に現れる要素が含まれないので不適格となる。

(23) a. 太郎はどこにいますか？
b. *太郎はどこにいるか？

Miyagawa (2012, 2017) は、Miyagawa (1987) の分析を発展させ、アロキュティブ探査子が Speech Act Phrase の主要部に移動すると提案している。疑問の助詞の「か」は、(22)の樹形図において、CP の主要部に現れる。丁寧語そのものは動かないが、アロキュティブ探査子と呼ばれるものが SA に主要部移動することで「か」が起こる C を統率する位置に現れることになるので、文法的な文になる。

なお、Speech Act Phrase 仮説が提案されるに至った背景には、Ross (1970) の遂行分析（performative hypothesis）がある。Ross (1970) は、平叙文には、非明示的な遂行動詞が含まれると主張している。例えば、*Prices slumped.* のような文は、(24)に示されるような深層構造を持つ。*Prices slumped.* の上位に現れる階層には、「私は（I）あなたに（you）以下のことを宣言する（+V, +performative, +communication, +linguistic, +declarative）」という発話行為に関わる情報が表示される。この分析は、語用論的な情報が統語論に組み込まれていることを論じた研究として広く知られる。

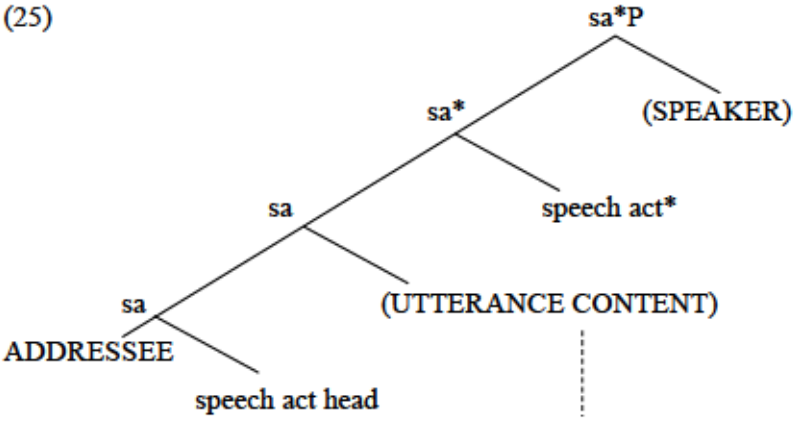
(24)



（Ross (1970: 224)）

ミニマリストプログラム以降の枠組みでは、Speas and Tenny (2003) や Tenny (2006) が Ross (1970) の後継にあたる分析を提案している。これが Speech Act Phrase 仮説である。(25)は Tenny (2006) が提案している SAP の構造である。この投射には三つの項が現れる。最上位には発話行為の動作主（agent）にあたる SPEAKER が表示される。さらに、目標（goal）として ADDRESSEE、主題（theme）として UTTERANCE CONTENT が表示される。

(25)



このように、Miyagawa (2012, 2017) は、Ross (1970) の遂行分析の流れを組む研究として位置付けられる。

丁寧語が TP より上位の領域と関係付けられる点は、他の先行研究でも広く受け入れられている。Kishimoto (2013b) は Speech Act Phrase への LF 移動を提案している。Miyagawa (2012, 2017)では、丁寧語ではなくアロキュティブ探査子が SAP に移動すると仮定されているのに対し、Kishimoto (2013b) では、丁寧語そのものが SAP に移動すると仮定されている。また、Yamada (2019) は、丁寧語は TP の上位に投射する AddrP の指定部との一致（Agree）によって認可されると仮定している（cf. 内堀 (2007)）。

3.2. モダリティ要素

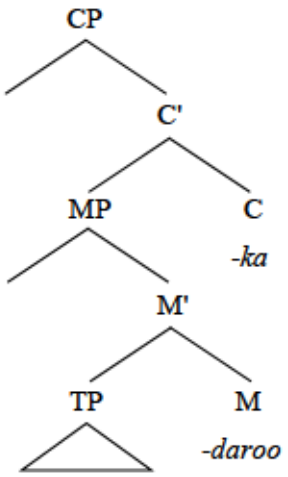
「だろう」のような話し手の認識や判断を表すモダリティ要素も CP 領域に起こると仮定されている。(26)に見られるように、「だろう」は時制要素の右隣に生起する。さらに、疑問を表す助詞の「か」とも共起できる。「か」も CP 領域の主要部である。

(26) 太郎は帰っただろうか。

CP は単一の投射であるとする従来の分析では、「だろうか」の連鎖が可能であることを説明できない。Koizumi (1993) は、モダリティに関わる MP（Modal Phrase）という投射を立て、「だろう」を MP の主要部であると仮定している。文献によって MoodP や ModP、ModalP など様々な表記があるが、基本的には同じ投射である（Koizumi (1993); Ono (2006); 上田 (2007); Ueda (2011); Kishimoto (2011); 岸本 (2011)）。（本論で言うところの「モダリティ」という概

念は形式意味論的な「モダリティ」とは必ずしも一致しない。この点については、本章の 4 節で言及している。）

(27)



ただし、モダリティを表す全ての表現が MP の主要部に起こるわけではない。「かもしれない」や「にちがいない」は話し手の認識的なモダリティを表すが、CP 領域に現れる要素ではない。

(28) a. 太郎が来るかもしれない。
b. 太郎が来るにちがいない。

(29)では、過去を表す時制要素の「た」が「かもしれない」と「にちがいない」に接続している（仁田 (1991)）。時制要素の「た」は TP の主要部であると仮定されるので、「かもしれない」は TP の下位に生じていることが分かる。これらの表現は「だろう」とは異なり、(30)に示されるような複文構造を持つ[9]（井上 (2009, 2011); 岸本 (2005); Kishimoto (2013a: 201, footnote 6) などを参照）。

(29) a. 太郎が来るかもしれなかった。
b. 太郎が来るにちがいなかった。

(30) [$_{TP}$ [$_{TP}$ 太郎が来る] かもしれない／にちがいない]

仁田 (1991) は、日本語のモダリティ要素を二分類している。一つは、真正モダリティと呼ばれ、「だろう」や「まい」が含まれる。もう一つは、疑似モダリティと呼ばれ、「かもし

[9] 「太郎が犯人かもしれない」のように、「かもしれない」は名詞に付くことができる。このケースでも、[$_{TP}$ [$_{TP}$ 太郎が犯人だ] かもしれない／にちがいない]のような複文構造を持つと仮定する。奥津 (1978) に従い、「だ」が義務的に脱落することで「太郎が犯人かもしれない／にちがいない」のような文が得られると想定する。

れない」や「にちがいない」が含まれる。構造的には、真正モダリティは MP の主要部であるのに対し、疑似モダリティは複文構造を持つ表現である（類似の提案に関しては、澤田 (1993) を参照）。

3.3. 終助詞

終助詞も CP 領域に生成される（Endo (2007); 遠藤 (2010)）。終助詞に関する統語論研究で最も重要な観察を提示している文献は、Saito and Haraguchi (2012) と Saito (2015) である[10]。この二つの論文は、終助詞の「わ」・「よ」・「ね」の線形順序とそれぞれの終助詞の補部選択に関する事実から、(31)に示されるような階層関係を提示している（(31)は、Saito and Haraguchi (2012: 121) に基づく。一部修正。）。「わ」や「よ」はいずれも話し手の言明を表すことから、Assertion と表記されている。「ね」は聞き手への応答を要求する意味を持つので、Soliciting Response と表記されている。「わ」・「よ」・「ね」の順にそれぞれの句が投射する。

(31) [[[[$_{TP}$ …] Assertion (*-wa*)] Assertion (*-yo*)] Soliciting Response (*-ne*)]

(32)に示されるように、終助詞の「わ・よ・ね」の共起は「わよね」の語順でのみ容認され、それ以外の語順では容認されない。広く認識されているように、線形順序は統語構造を反映する。主要部後行型の日本語では、右側に生じる主要部の方が左側に生じる主要部より構造的に上位に位置付けられる。したがって、「わ」は構造的に低い位置、「よ」は中間の位置、「ね」は構造的に高い位置に生じているということになる。

(32) 太郎は学生だわよね。

また、終助詞の「わ」には選択制限が課される。(33)a に示しているように、「わ」は CP 領域の主要部である「だろう」と共起できない（遠藤 (2010)）。(33)b のように、「よ」と「ね」は「だろう」に後続することができる。

(33) a. *太郎は学生だろうわ。
b. 太郎は学生だろう｛よ／ね｝。

Saito and Haraguchi (2012) および Saito (2015) は、この観察から、「わ」は CP を補部に取ることができず TP を補部に取ると主張している。

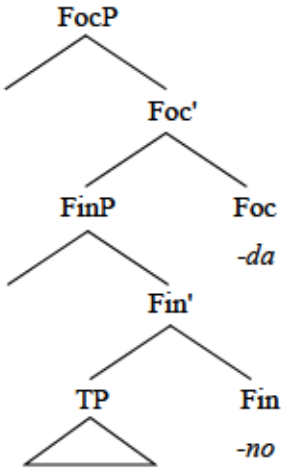
---

[10] 日本語の記述的な文法研究においても、渡辺 (1971) や佐治 (1991) などで終助詞同士の語順に関する記述が数多く残されている。このため、本論で提示しているデータは必ずしも未発見のデータとは限らず、先行研究で既に発見済みのデータと重複しているものも含まれる。本論の主眼は、そうした言語事実を生成文法の枠組みでどのように取り扱うかという点にある。

3.4. コピュラ

コピュラに関しても、CP の主要部と見る説がある。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) は、「のだ」文に含まれるコピュラの「だ」は FocP の主要部として生起すると主張している。「太郎はピザを食べたのだ」のような文に表出する「のだ」は、CP 領域に現れるという。(34) に図示されるように、「の」は FinP の主要部、「だ」は FocP の主要部として生起する。

(34)



通言語的にコピュラが焦点化助詞（focus particle）になる傾向がある（Hiraiwa and Ishihara (2012: 151, footnote 10)）ことから、「だ」の Foc 主要部仮説が提案されている。この仮説は様々な文献で採用されているので、影響力のある仮説であると言って差し支えない（Hiraiwa and Kobayashi (2019); Ono (2006); Kuwabara (2013); Maeda (2014); 西垣内 (2016); Takahashi (2006, 2020); 遠藤・前田 (2020)）。

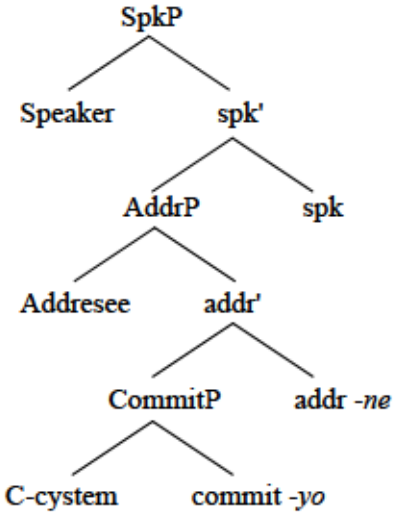
3.5. 問題提起

日本語の CP 研究には二つの課題がある。まず、CP 研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞・コピュラが個別的に研究されてきた。一方で、これらの要素間の階層関係についてはあまり議論されていない。丁寧語と終助詞の「か」の階層関係（Miyagawa (1987)）など、異なるタイプの要素の関係が部分的に論じられることはあるが、CP 領域の要素の包括的研究はこれまでそれほど多く試みられてこなかった。このため、丁寧語・モダリティ要素・終助詞などの文末要素を統一的に扱う階層構造を追究する必要がある。

ごく最近の研究では、Miyagawa (In press) が本論と同じように、丁寧語や終助詞の統一的な分析を試みている。Miyagawa (In press) は、Rizzi (1997) によって提案された CP システムの上位に Speaker-Addresee Phrase と CommitP という投射を仮定している。Speaker-Addresee Phrase は話し手と聞き手に関わる投射であり、(35)のように、話し手に関わる SpkP と聞き手に関わる AddrP からなる。AddrP の主要部には、終助詞の「ね」が現れる。CommitP は、命題内容の信憑性に関して話し手が聞き手に対して持つ責任（commitment）に関わる投射である。主要部には、命題の正しさを聞き手に訴える機能を持つ終助詞の「よ」が現れる。この分析では、丁寧語は SpkP の主要部に移動すると仮定されている。また、モダリティ要素の

「だろう」の構造位置に関しては、C-system の下位に ModP という投射が仮定されている（Koizumi (1993)）。Miyagawa (In press) の分析と本論の分析との関係に関しては、第 2 章で論ずる。

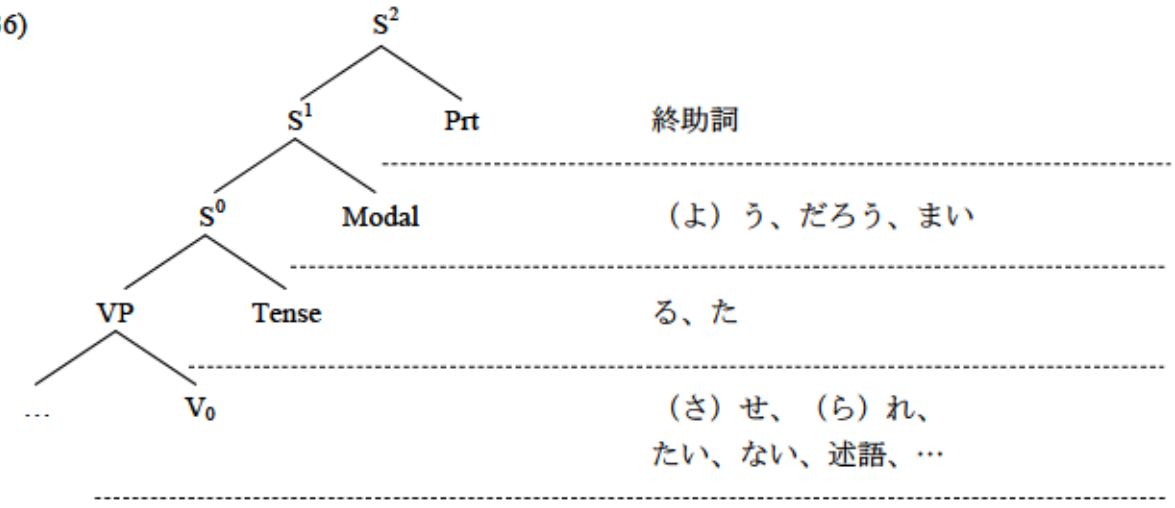
(35)



次に、日本語における CP 研究は Rizzi (1997) や Cinque (1999) のカートグラフィー研究の影響を強く受けている。実際、イタリア語の [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP…]]]]] の階層構造をベースにした議論が展開される傾向にある。例えば、Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) は、「の」を FinP の主要部、「だ」を FocP の主要部と仮定しているが、この仮説は Rizzi (1997) の階層構造を前提としたものである。ところが、日本語に FinP と FocP が存在することを示す経験的な証拠が提示されているわけではない。また、遠藤 (2010) は、Cinque (1999) のカートグラフィーを採用して、日本語の終助詞の特性を説明することを試みているが、Cinque (1999) の階層構造が日本語にも当てはまるという積極的な根拠は提示されていない。日本語の CP 領域の全体像を把握するためには、他言語で提案された構造からの類推ではなく、日本語の言語事実に基づいて動機付けられた階層構造を追究する必要がある。

ただし、日本語のデータに基づく階層構造の提案が全くの皆無であるわけではない。澤田 (1993) は、日本語には、(36)に示されるような階層構造が認められるとしている。「重層モデル」と呼ばれるこの階層構造は、VP-S^0-S^1-S^2 の四層からなる。VP は動詞句、S^0 は時制要素が現れる層、S^1 はモダリティ要素が現れる層、S^2 は終助詞が現れる層である。

(36)



（澤田（1993: 167））

このモデルは、生成文法の枠組みで分離 CP 構造の研究が活発化し始めた頃とほぼ同時期に確立されたものであり、モダリティ要素と終助詞の階層関係を捉えることができる。しかしながら、丁寧語がこれらの投射とどのように関係付けられるかについては議論の余地が残されている。加えて、終助詞を単一の投射に位置付けてよいのかという点に関しても議論する必要がある。

4. 問いと提案

本論では、CP 領域の階層構造を明らかにするために、(37)に示す二つの問いを設定して論を展開する。

(37) a. CP 領域の要素にはどのようなものがあるか。
　　 b. 日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか。

まず、(37)a の問題に取り組むために、先行研究で CP 領域の主要部要素であると考えられている文末要素が実際に CP 領域の要素であるかどうかを検証する。次に、(37)b の問題については、日本語の言語事実に基づいて日本語の分離 CP 構造を追究する。

以下では、それぞれの問いに対する本論の提案を示す。まず、(37)a の問題に関する本論の提案を示す。先行研究では、丁寧語・モダリティ要素・終助詞・コピュラなどの文末要素は CP 領域の主要部であると考えられている。しかしながら、中には証拠が提示されないまま、CP 領域の要素であるという前提で議論が展開されるケースもある。本論では、各章において様々な文末要素の統語特性を観察し、CP 領域の主要部にあたるものとそうでないものを峻別する。具体的には第 2 章以降で見ていくことになるが、(38)と(39)に CP 領域の主要部とそれ以外のものを列挙している。

(38) CP 領域の主要部

丁寧：です、ます、っす（第 2 章）

推量：う、だろう、でしょう、だろ、でしょ、まい…（第 2・3 章）

意志：（よ）う、ましょう（第 3 章）

命題確認要求：じゃん、やん（関西方言）（第 3 章）

疑問：か（第 2 章）

命令：-*e*、ろ、な（禁止）（第 2 章）

終助詞：の、っけ、わ、よ、ね、な、もん、こと（感嘆）、ばい（長崎方言）

(39) CP 領域の主要部ではない

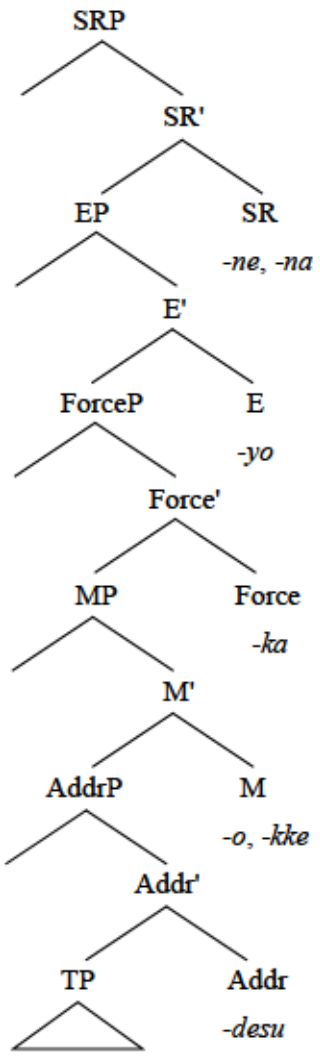
疑似モダリティ：かもしれない、にちがいない…（第 3 章）

（非）命題確認要求：じゃない、じゃね、じゃなか（長崎方言）（第 3 章）

コピュラ：だ、である（第 4 章）

次に、(37)b の問題に対する本論の提案を示す。先行研究では、Rizzi (1997) の [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP …]]]]] をベースとした日本語の分離 CP 構造が仮定されることがある。ところが、日本語の言語事実を観察すると、Rizzi (1997) の階層構造では捉えきれない特徴を持つ文末要素が数多く存在していることに気がつく。本論では、日本語の言語事実に則して、(40)に示されるような分離 CP 仮説を提案する。AddrP は聞き手の属性や聞き手との関係（親疎や上下関係など）の指定に関与する投射である。丁寧語は、話し手よりも年齢的に上または親しくない相手に対して使用されるので、聞き手との関係に関与する。このため、丁寧語は AddrP との関係を持つ。MP はモダリティを表す推量辞の「う」や終助詞の「っけ」などが現れる投射である。なお、ここで言う「モダリティ」という用語は、形式意味論における「モダリティ」よりも広義の意味を持つ。形式意味論においては、「モダリティ」は可能性（possibility）や必然性（necessity）に関わる概念である。他方、本論で言うところの「モダリティ」は、可能性や必然性に関わらず、広く、話し手の認識や判断に関係する言語表現を指す。例えば、「っけ」は、想起や確認を表し、可能性や必然性に関与する語ではない。（つまり、形式意味論的な分析では、モダリティに分類されないことが考えられる。）しかし、話し手の認識や判断に関わるため、本論ではモダリティの一種とみなす。このように、本論の「モダリティ」という概念が形式意味論的な「モダリティ」と必ずしも一致しない場合があるため、注意されたい。（日本語の記述的な文法研究では、さらに広い意味で「モダリティ」という用語が用いられることがある（例えば、日本語記述文法研究会（編）(2003)）。）

(40)



ForceP は節のタイプ（平叙文・疑問文・命令文など）の指定に関わる投射であり、疑問を表す終助詞の「か」などが主要部に生起する[11]。EP（Emphasis Phrase）は節全体の意味の強化に関わる投射であり、主要部には終助詞の「よ」が生起する。SRP（Soliticing Response Phrase）には聞き手に返答を要求する機能を持つ「ね」や「な」のような終助詞が主要部に置かれる。(40)に示した階層構造の妥当性は特に第 2 章で詳しく検証する。イタリア語のデータからの類推（analogy）ではなく、日本語の文末要素間の関係をいくつかの統語テストに基づいて明らかにする。

詳しくは第 2 章以降で論じることになるが、本提案と先行研究との違いについて述べておきたい。まず、(40)の階層構造は日本語の言語事実に動機付けられたものであるという点で、先行研究で提案されている構造とは異なる。例えば、Hiraiwa and Ishihara (2012) は、日本語の CP 領域に、$[_{TopP}\ [_{ForceP}\ [_{FocP}\ [_{FinP}\ [_{TP}\ \ldots]]]]]$ の階層構造を仮定しているが、これは、Rizzi (1997) の階層構造を下地としたものである。また、遠藤 (2010) は、Cinque (1999) のカートグラフ

[11] ここでの Force は、語用論的な発語内行為（illocutionary force）の概念とは一致しない。発語内行為は、断定、約束、要求など様々な行為を指すが、本論における Force は、節のタイプ（clausal type）の指定に関与するものである（Rizzi (1997: 283) も参照）。

ィーを前提として、日本語の終助詞の階層関係について論じているが、Cinque (1999) の階層構造が日本語で成り立つかどうかについては検討がなされていない。次に、本提案は、丁寧語・モダリティ要素・終助詞の階層関係を統一的に扱う点で、先行研究とは異なる。既に指摘したように、これまでの先行研究では、文末要素が個別的に扱われてきた。最後に、本提案は、丁寧語の構造位置に関して、先行研究とは異なる分析を与えている。Miyagawa (2012, 2017, In press) では、丁寧語は、最上位の Speech Act Phrase において認可されると仮定されている。これに対して、本論では、丁寧語は CP 領域の最下位に位置付けられる。Miyagawa (In press) は本提案に類似した構造を提案しているが、丁寧語の扱い方に大きな違いがある。

本節の最後に強調しておきたいことがある。本論ではカートグラフィー研究の枠組みを採用していない。近年のカートグラフィー研究では、データの蓄積とともに、理論が複雑化している。遠藤・前田 (2020: 14–22) が詳しく整理しているように、カートグラフィー研究では様々な制約群（例えば、付加構造の禁止・基準凍結（criterial freezing）（Rizzi (2006)）・素性に基づく相対的最小性（featural relativized minimality）（Rizzi (2004)））が仮定されている。本論では、そうした制約群を特に仮定していない。日本語の文末要素に関してはこれまで統一的な記述や統一的な説明がほとんど与えられてこなかったわけであるが、そのような現状で、カートグラフィーの最新の理論を前提に議論することは性急であると判断したためである。もちろん、カートグラフィー研究に対しても意義のある言語事実を提供することを一つの狙いにはしているが、本論はカートグラフィーの枠組みを前提としていないため、カートグラフィーで当然のこととされている仮定に必ずしも従っていない場合があることを予め断っておきたい。本論では、CP 領域を多重の投射からなるとする考え方を指すものとして、分離 CP 仮説ないしは分離 CP 構造という用語を用いている。カートグラフィー研究は分離 CP 仮説を追究する一つの立場であると見る。分離CP仮説にはカートグラフィー研究以外にも、Culicover (1991), Authier (1992), Hoekstra (1993), Nakajima (1996) などの研究が存在するが、これらの文献ではカートグラフィーの枠組みは採用されていない[12]。本論の議論は、CP を分離させる立場の一つの考え方であると理解していただきたい。

5. 構成と概要

本論は五章構成である。以下では各章の概要を示す。

第 2 章では、日本語の CP 領域の階層構造を明らかにするために、丁寧語・モダリティ要素・終助詞に関わるデータを取り上げ、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP…]]]]] の階層構造を提案する。まず、形容詞型の活用語が現れる文に表出する丁寧語（丁寧語 B）を AddrP の主要部であると仮定し、終助詞の「っけ・わ」との共起関係に基づいて、AddrP は CP 領域の最下位に投射する句であることを示す。次に、Koizumi (1993) に従い、MP を仮定した後に、終助詞の「っけ」と疑問を表す助詞の「か」の線形順序から [ForceP [MP [AddrP…]]] の階層関係が成立していることを見る。続いて、Saito and Haraguchi (2012) や Saito (2015) の観察に基づき、ForceP の上位には、節全体の意味の強化に関わる EP と応答要求に関わる SRP が投射す

[12] 近年では CP を分離する仮説はカートグラフィー研究の一種として捉えられる傾向にあるが、カートグラフィーの枠組みを前提としない分離 CP 仮説が存在していても問題はない。

ることを論じる。それらの言語事実を組み合わせると、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP…]]]]] の階層構造が得られる。この階層構造を仮定することで、先行研究ではほとんど分析が与えられていない終助詞の「もん（もの）」や感嘆を表す「こと」の文法特性を捉えることが可能になる。さらに、第 2 章で示されるデータには、Rizzi (1997) の階層構造では説明できないものが多く含まれる。このため、第 2 章で提供される言語事実はカートグラフィー研究に対して新たな問題を提起する。

第 3 章では、MP の投射に生起する主要部要素を整理する。推量辞（「う」・「だろう」）や意志・勧誘を表す接辞（「（よ）う」）、非命題確認要求表現（「じゃん」・「やん（関西方言）」）・否定推量の「まい」・補文標識の「ように・こと」が MP の主要部であることを示す。さらに、それぞれの主要部の補部選択に違いがあることを示す。例えば、「じゃん」と「やん」は非常に近い意味を持つが、「やん」は TP または AddrP を補部に取り、「じゃん」は TP のみを補部に取るという選択制限に関する対比が見られる。第 3 章では、丁寧語との共起関係からこのことを示す。さらに、MP の主要部の中には、M に生起した後に主要部移動によって SR に移動するものがあることを指摘する。確認要求を表す「だろう」は SR への主要部移動の適用を受ける。加えて、（非）命題確認要求を表す「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」のような表現は、CP 領域ではなく TP の下位に生成されることを論じる。

第 4 章では、日本語の分裂文の統語構造について、コピュラの構造位置・焦点要素の構造位置・前提節の統語構造の観点から考察を加える。まず、コピュラの「だ」・「である」の構造位置については、時制要素の接続と伝聞を表す「そうだ」の補部への埋め込みから、TP の下位にとどまることを示す。さらに、「まい」の接続の可否に関する事実から、「である」は Cop-V-v に対応する主要部であるのに対し、「だ」は CopP の主要部であると論じる。次に、焦点要素の構造位置に関しては、未確定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語の順序関係に関わるデータに基づいて、焦点要素は CopP の補部にとどまると主張する。最後に、前提節の統語構造については、丁寧語が前提節に現れることから、前提節を導入する「の」は MP の主要部であり、AddrP または TP を補部に選択すると論じる。日本語の分裂文研究では、空演算子分析と直接移動分析という二つの分析が提案されている。コピュラの構造位置・焦点要素の構造位置・前提節の統語構造に関わるデータは、いずれも直接移動分析の問題点を提供する。

第 5 章は結語である。

第 2 章　分離 CP 仮説と主要部移動

1.　はじめに

日本語の CP 領域には、終助詞やモダリティ要素、丁寧語などの多彩な語彙が表出する。語彙のバリエーションが多い分様々なデータを作例できるという利点がある反面、それぞれの語彙が独特な統語的特性を有しているので、バラエティが豊富であることにはかえって分離 CP 構造の解明をいっそう困難にするという側面もある。このような CP 領域の雑多な側面が影響してか、管見したところ、先行研究では、一部の CP の要素のみに焦点が当てられるケースがほとんどである。CP 領域に関わる研究では、丁寧語（Miyagawa (1987, 2012, 2017, in press); Kishimoto (2013a, b); Yamada (2019)）、モダリティ要素（Koizumi (1993); Ono (2006); 上田 (2007); Ueda (2011); Kishimoto (2011); 岸本 (2011)）、終助詞（Saito and Haraguchi (2012); Saito (2015)）の三タイプが個別的に研究されている。これら三種類の CP 要素を網羅した研究は数少なく、これからの CP 研究における重要な課題となる。

本章の目的は、これら三タイプの文末要素を分離 CP 仮説のもとで統一的に捉えることである。本章では、CP 領域は [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP …]]]]] の五階建ての階層を有すると提案する。Addr(essee)P は、聞き手の属性や聞き手との関係（親疎や上下関係など）の指定に関わる投射であり、CP 領域の最下位に位置する。MP（Modal Phrase）は、話し手のモダリティに関わる投射であり、AddrP の上に投射する。さらに MP の上位には、節のタイプの指定に関与する ForceP が投射する。ForceP の上には、節全体の意味の強化に関わる EP（Emphasis Phrase）、聞き手への応答要求（soliciting response）の機能を持つ SRP が投射する。日本語の分離 CP 仮説に関連した研究では、Rizzi (1997) の [ForceP [TopP* [FocP [Top* [FinP…]]]]] の階層を前提として議論が行われることが一般的になりつつあるが、本章で示されるデータはそのような階層構造では全てを説明できないことを指摘する。

本章の議論は以下の通りに進める。2 節では、主要部移動に関する本論での想定を提示し、本章で扱う言語現象と分離 CP 仮説に関する提案の概略を示す。3 節では、日本語の丁寧語の統語特性について記述し、丁寧語を認可する投射として AddrP を導入する。4 節では、話し手のモダリティに関わる MP と節のタイプの指定に関わる ForceP を導入し、AddrP・MP・ForceP の順に投射すると主張する。5 節では、ForceP よりも高い構造位置に投射する句として EP と SRP を立てる。6 節では、AddrP・MP・ForceP・EP・SRP の五つの階層を立てることで、終助詞の「もん（もの）」や感嘆文を形成する「こと」の統語的特性を捉えることが可能になることを示す。7 節はまとめである。

2.　主要部移動に関する想定と提案

2.1.　主要部移動

本論では主要部移動（head movement）に基づく説明を展開するので、ここでは主要部移動に関するいくつかの想定について論じておく。Travis (1984) や Baker (1988) が論じているよ

うに、主要部移動には主要部移動制約（Head Movement Constraint）が課される。主要部移動制約によれば、主要部はそれを適正統率する主要部に移動しなければならない。端的に言うと、主要部はすぐ上の主要部に移動しなければならないということである。したがって、すぐ上の主要部を飛び越えて移動することはできない。(1)a では、助動詞の *has* が T から C に主要部移動している。*has* が生成される T 主要部のすぐ上位に C 主要部があるので、主要部移動の適用を受けることができる。(1)b,c では、*been* と *playing* が C 主要部に移動しているが、これらの文は非文となる。*been* や *playing* の上位には他の主要部要素（*been, has*）が生じているので、それらを飛び越えて移動することはできないのである。

(1) a. Has$_i$ John t$_i$ been playing baseball?
b. *Been$_i$ John has t$_i$ playing baseball?
c. *Playing$_i$ John has been t$_i$ baseball?

主要部移動に課されるもう一つの制約として、主要部移動の適用を受けたあとに、移動先の主要部に異なる要素を併合させることはできないという点が挙げられる。(2)は、*If* 節における倒置の例である。条件節は、*If* によって導入される場合と倒置によって条件節であることが標示される場合がある。(2)a では *If* によって条件節が形成されているのに対し、(2)b では助動詞の *should* が節の初頭に移動することによって条件節が形成されている。

(2) a. If anything should happen to you, I'd help you.
b. Should$_i$ anything t$_i$ happen to you, I'd help you.

(3)に示すように、主要部移動のオプションを選んだ場合、さらに *If* を外的に併合させることはできない（Kishimoto (2000)）。要するに、主要部の移動先は音声的に空になっていなければならないということである[1]。

(3) *If should$_i$ anything t$_i$ happen to you, I'd help you.

この想定は、本論の議論において重要な想定の一つである。

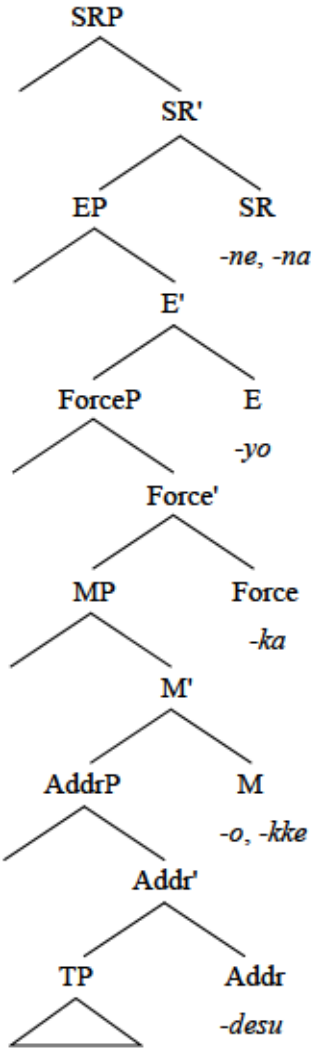
2.2. CP 領域の階層構造

本章では、日本語の CP 領域には、AddrP・MP・ForceP・EP・SRP という五つの投射が含まれていることを論じる。この階層を仮定することで、丁寧語・一部のモダリティ要素・終助詞の統語的分布を理論的に説明することが可能となる。(4)に図示しているように、TP の上位には、AddrP・MP・ForceP・EP・SRP の順にそれぞれの句が投射する。AddrP は聞き手の属性や聞き手との関係の指定に関与する投射であり、丁寧語の「です」や「ます」がこの投射との関係を持つ。MP (Modal Phrase) はモダリティに関わる投射であり、推量辞の「う」、

[1] ベルファスト英語の間接疑問文形成においても同様のことが観察される（Henry (1995)）。

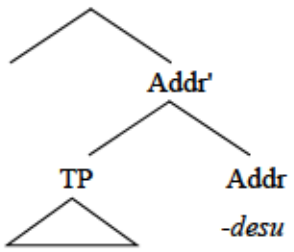
終助詞の「っけ」などがこの句の主要部に挿入される。ForceP は、平叙文・疑問文・命令文・感嘆文など節のタイプの指定に関わる投射であり、例えば、疑問を表す助詞の「か」は ForceP の主要部として生じる。EP（Emphasis Phrase）の主要部には、節全体の意味を強化する役割を持つ「よ」が現れる。そして、応答要求句（Soliciting Response Phrase）の主要部には「ね」や「な」が生じる。

(4)

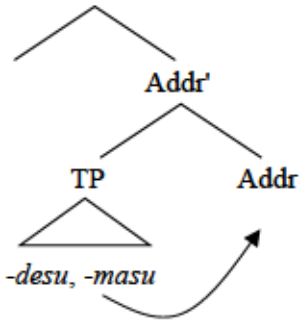


(4)の階層関係の妥当性については次節以降で詳しく検証するので、ここではそれぞれの概略を述べておく。3 節では、丁寧語の認可に関わる投射として AddrP を導入する。丁寧語は TP より下位に基底生成されるタイプと Addr に基底生成されるタイプの二つに分かれる。(5)にそれぞれの丁寧語の構造を示している。(5)a では丁寧語の「です」が Addr に生起している。一方、TP より下に併合される丁寧語は、(5)b のように主要部移動によって Addr まで移動する。このタイプの丁寧語の基底生成位置に関しては、「ます」は vP の主要部、「です」は CopP の主要部であると主張する。ただし、AddrP は、常に投射するのではなく、丁寧語が表出する時のみ投射すると想定する。

(5) a.

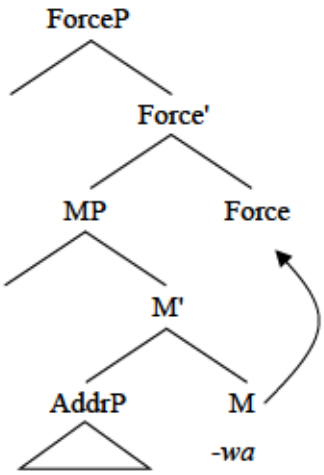


b.



4 節では、下から AddrP・MP・ForceP の順にそれぞれの句が投射することを示す。MP はモダリティに関わる投射であり、推量辞の「う」や終助詞の「っけ」などが主要部に起こる。このうち、「っけ」は、丁寧語の「です」や疑問を表す終助詞の「か」と共起できる。共起したときの線形順序から、(4)に示した [ForceP [MP [AddrP…]]] の階層関係が示唆される。さらに、終助詞の「わ」は、(6)に示すように、M から Force に主要部移動すると提案する。「わ」に関わるデータからも [ForceP [MP [AddrP…]]] の階層関係に関して支持が得られる。

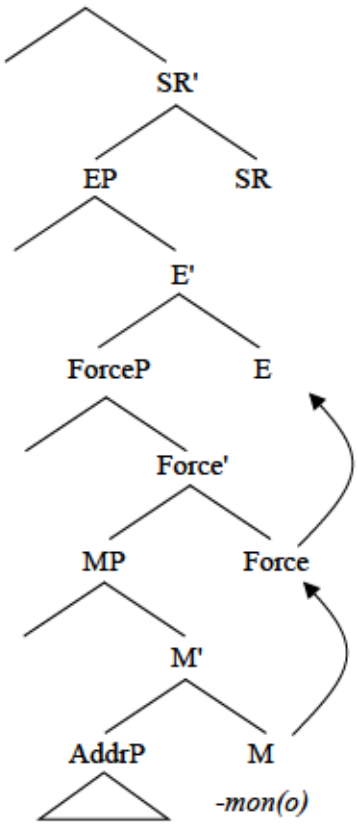
(6)



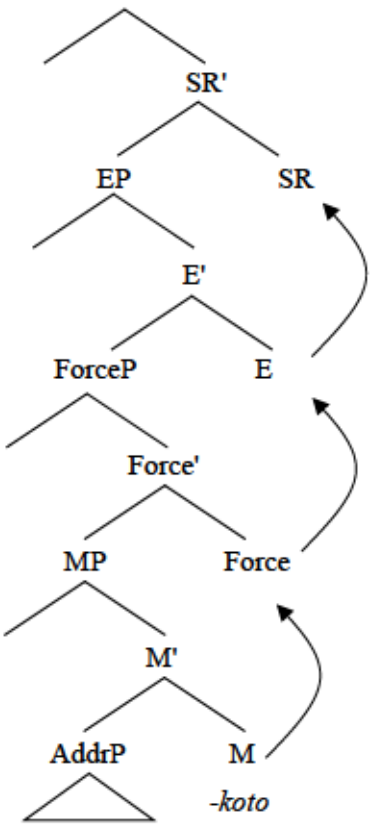
5 節では、ForceP と関与する「か・わ」と終助詞の「よ・ね・な」の線形順序に基づいて、「よ・ね・な」は ForceP より上位の要素であると論じる。ForceP の上には、EP と SRP が投射する。(4)に示しているように、「よ」は E、「ね・な」は SR に対応する（Saito and Haraguchi (2012)）。

6 節では、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP…]]]]] の五階建ての階層を立てることで、終助詞の「もん（もの）」と感嘆文を形成する「こと」の構造分析が可能となることを示す。AddrP から SRP までのそれぞれの投射に対応する語彙との共起関係に基づき、(7)に示すように、「もん（もの）」は M から E、「こと（感嘆）」は M から SR に主要部移動すると主張する。

(7) a.



b.



3. AddrP

本節では、丁寧語の統語的分布を記述し、CP 領域の要素であることを確認する。丁寧語は、聞き手への敬意を表す語なので、聞き手の属性や聞き手との関係の指定に関与する投射の Addr(essee)P に関係する要素であるとした上で議論を進める。

AddrP は聞き手の属性や聞き手との関係の指定に関与する投射なので、Addr 主要部に起こる語は必ずしも丁寧さを表すとは限らない。日本語以外の言語でも、AddrP には、聞き手への敬意を表さない語が現れることがある。聞き手の属性や聞き手との関係に関するような語は、近年の統語論ではアロキュティブ標識（allocutive marker）と呼ばれることが多くなってきている。アロキュティビティ（allocutivity）とは、聞き手の属性や聞き手との関係が述語周辺の形式に反映される言語現象のことである。日本語の丁寧語は、聞き手との関係を反映する語なので、アロキュティブ標識に分類される[2]。アロキュティブ標識は、丁寧さを表す語である必要はなく、友人に対して使われる語や家族に対して使われる語など、言語ごとに様々なバラエティがある。アロキュティブ標識は、日本語に限られず、バスク語（Basque）（Oyharçabal (1993); Haddican (2018)）、マガヒー語（Magahi）（Alok (2021)）、タミル語（McFadden (2020)）、韓国語（Portner, Pak, and Zanuttini (2019)）、プメ語（Pumé）（Antonov (2015)）、ナンビクワラ語（Nambikwara）（Antonov (2015)）、マンダン語（Mandan）（Antonov (2015)）、

[2] 日本語の記述的な文法研究では、丁寧語は敬語体系に含まれる。尊敬語や謙譲語のように、敬意の対象となる人物を表す要素が文中に存在する敬語は素材敬語と呼ばれる。丁寧語は聞き手を敬意の対象とすることから、対者敬語と呼ばれる（辻村 (1958)）。

ベジャ語（Beja）（Antonov (2015)）など様々な言語で観察される。

(8)はバスク語の例である。(8)a の太字部分-*ek* は聞き手が男性であるときに用いられ、(8)b の太字部分-*en* は聞き手が女性であるときに用いられる。聞き手は敬意の対象でなくてよい。

(8) Standard Basque (Antonov (2015: 67))

a. Bilbo-tik za-torr-**ek**.
Bilbao-ABL ASP.3.S-come-ALLOC:M
'S/He is coming from Bilbao.' (said to a man)

b. Bilbo-tik za-torr-**en**.
Bilbao-ABL ASP.3.S.-come-ALLOC:F
'S/He is coming from Bilbao.' (said to a woman)

(9)はマガヒー語の例である。この言語では、聞き手の性別ではなく、聞き手との親疎や聞き手の社会的地位に応じて使い分けが生じる。-*au* は友人、-*o* は父親、-*ain* は教師に対して使用される。

(9) Magahi (Alok (2021))

a. Ham dauR-l-i-**au**.
I run-PRF-1-NHS.NHA
'I ran.' (said to a friend)

b. Ham dauR-l-i-**o**.
I run-PRF-1-NHS.HA
'I ran.' (said to a father)

c. Ham dauR-l-i-**ain**.
I run-PRF-1-NHS.HHA
'I ran.' (said to a teacher)

マガヒー語の例は、(10)に示す日本語の「です」・「っす」・「でちゅ」の使い分けに類似している。日本語でも親疎によってこれらの語の使い分けが生じるからである[3]。「です」は、年齢が上の人物や見知らぬ人物に対して使用される。「っす」は、若年層で頻繁に使用され、特に親しい間柄の先輩に対して使用される傾向にある。「でちゅ」は、使用する母語話者はそれほど多くないが、幼児やペットに対して使用される場合がある[4]（Sawada (2013, 2014)）。

[3] 親疎（聞き手との社会的・心理的な距離）に基づく丁寧語の使い分けという観点は、本論独自の見解ではない。あくまで一例であるが、中村 (2021) は、社会言語学的観点から、日本語の敬語体系が上下関係を重視する体系から親疎を重視する体系へと変化していることを指摘している。敬語の分類や使用に関する研究については、林・南 (1974)、菊地 (1997, 2003) 等を参照されたい。

[4] 「でちゅ」は「でしゅ」と発音されることもある。また、「でちゅ・でしゅ」は、聞き手の属性に関係なく、話し手が赤ちゃんキャラを演じるときにも使用されることがある。これは

このように、AddrP は聞き手との関係や属性の指定に関係する投射である。

(10) a. ご飯ですよ。
b. ご飯っすよ。（親しい先輩に対して）
c. ご飯でちゅよ。（幼児やペットに対して）

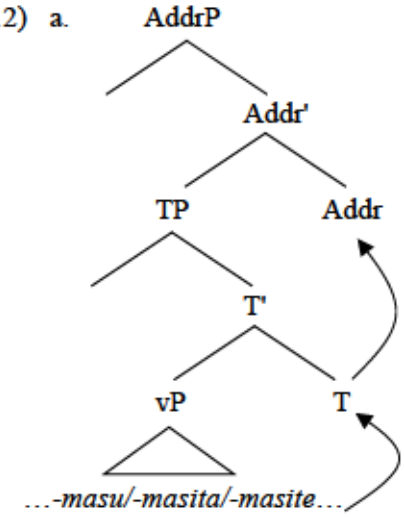
日本語における丁寧語は、文に現れる要素の活用の種類によって基底生成される構造位置が異なってくる。本節では、形容詞型の活用をする語を伴う文に現れる「です」は AddrP に基底生成されること、およびそれ以外の文では丁寧語は通常 TP の下位の投射に起こることを論じる。

動詞述語文や名詞述語文の肯定文では、丁寧語は TP の下位に生起する。(11)では、動詞述語文に現れる「ます」と名詞述語文に現れる「です」が、それぞれ動詞と名詞に後続している。このタイプの丁寧語を本論では丁寧語 A と呼ぶことにする。

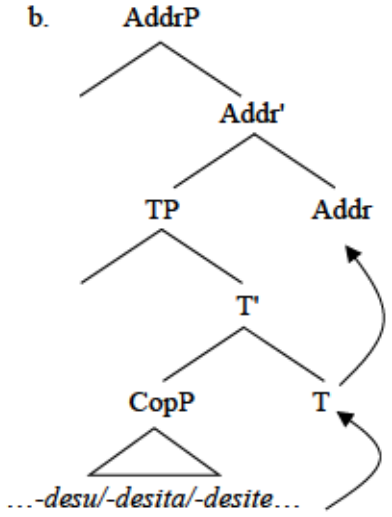
(11) a. 太郎が来ます。（動詞述語文）
b. 正解です。（名詞述語文）

本節では、「ます」と「です」は、それぞれ v 主要部、Cop 主要部として基底生成されると提案する。また、丁寧語は「ました・まして」や「でした・でして」のように時制要素の「た・て」と共起することがあるが、この場合、時制要素は TP の主要部に起こっているわけではなく、(12)に示されるように、丁寧語と組み合わさって一つの語彙項目（lexical item）として派生に導入されることを示す。さらに、矢印で示されるように、vP と CopP 内に生成された丁寧語 A は主要部移動によって Addr まで移動すると主張する。

(12) a.



b.

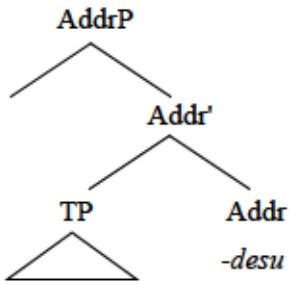


いわゆるキャラ語尾としての用法である。キャラ語尾については、金水 (2003)、定延 (2007, 2011)、定延・張 (2007)、秋月 (2012) などを参照されたい。

一方で、形容詞述語文では、丁寧語を時制要素の右に生起させることが可能である（井上(1998); Hasegawa (2015) など）。(13)では、丁寧語の「です」が過去の時制要素の「た」の右隣に現れている。時制要素より右に現れる要素は、二重節となる場合を除いて、CP の主要部であると考えられる。本論では、(13)における丁寧語の「です」を Addr に基底生成される主要部とみなす。(14)の樹形図に示しているように、「です」は Addr の主要部として生じる。このタイプの丁寧語を本論では丁寧語 B と呼ぶことにする。

(13) 面白かったです。（形容詞述語文）

(14)



言うまでもなく、丁寧語は常に文に現れるわけではない。そうすると、「太郎が来た」のような丁寧語の生起しない文では AddrP が投射するのかという点が問題になる。この点に関して、本論では、丁寧語が生起しない文では、AddrP は投射しないと仮定する。AddrP が投射するのは、丁寧語が文中に表出する場合のみである。このような仮定は特殊なものではない。たとえば、否定極性表現などを認可する NegP は、否定辞が起こらない文では投射しない[5]。このため、肯定文には NegP が含まれないことになる。このことと同じように、丁寧語が表出する文では AddrP が投射するが、丁寧語が含まれない文には AddrP が投射しないと仮定する。（AddrP 以外の投射が常に投射するかどうかについては、5 節で論じる。）

以降の議論は以下のように進める。3.1 節では、時制要素の右側に現れる丁寧語 B の「です」が AddrP の主要部として基底生成されることを確認する。3.2 節では時制要素の左側に現れる丁寧語 B の「です・ます」の統語特性を記述する。「です」は CopP、「ます」は vP に基底生成されるが、その後 AddrP への主要部移動を起こすと論じる。3.3 節では丁重語の統語的振る舞いを観察する。「ございます」のような丁重語は、統語的には「ござる」と「ます」に分かれることを示す。3.4 節では、長崎方言の「です」が形容詞型の活用語の有無に関係なく、時制要素の右側に基底生成されることを見る。3.5 節では、親しい先輩などに対して使用される「っす」も長崎方言の「です」と同じく活用の種類に関係なく、AddrP に基底生成されることを示す。

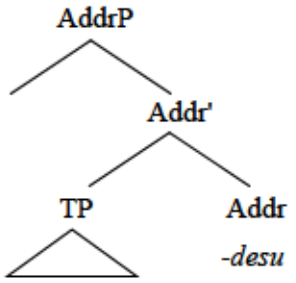
[5] ただし、Laka (1990) のように、否定辞または肯定辞が現れる ΣP が仮定されることもある。日本語では、否定辞の「ない」に対応するような肯定辞が存在していないので、本論では、NegP に対応する AffP（Affirmative Phrase）は仮定しない。

3.1. AddrP に基底生成される丁寧語

まず、丁寧語の統語的特性について記述し、理論的説明を与える。形容詞述語文に現れる丁寧語 B の「です」は、(15)に見られるように、時制要素の「た」より右側に現れる。Yamada (2019) に従い、丁寧語は聞き手に関係する AddrP の要素であると仮定する。(16)のように、時制要素の右側に現れる「です」は Addr 主要部である。

(15) 面白かったです。（形容詞述語文）

(16)



「です」が TP よりも上位に位置していることは、伝聞の「そうだ」への埋め込みからも確認できる。伝聞を表す「そうだ」は、補部に TP を選択する。(17)のように、時制要素の「た」に「そうだ」を続けることができる。一方で、CP 領域の主要部は、伝聞の「そうだ」の補部位置に現れることができない。日本語の CP 領域の主要部には、推量辞の「う」や終助詞の「わ」などがある。(18)は、伝聞の「そうだ」の補部位置にこれらの主要部が表出できないことを示している。

(17) 太郎は犯人ではなかったそうだ。

(18) a. *太郎は役者ではなかろうそうだ。
b. *太郎はもうすぐ来るわそうだ。

丁寧語も、伝聞の「そうだ」の補部位置への埋め込みが不可能である。(19)において、下線部の「です」は、「そうだ」の補部位置に起こりえない。このデータの不適格さは、「です」が CP 領域の要素であると仮定することによって説明することができる。「です」は AddrP の主要部なので、TP を補部に取る伝聞の「そうだ」の補部位置には現れることができないのである。

(19) *太郎は優しいですそうです。

丁寧語 B の「です」は機能範疇として完全に文法化しており、一切活用しない。このため、時制要素の「た・て」は接続しない。（「て」が時制要素であるという点については、Nakatani (2013) や Kishimoto (2012) を参照。）(20)a は、時制要素の「た」が丁寧語 B の「です」に

接続しないことを示している（辻村(1967, 1968); 日本語記述文法研究会（編）(2003: 235); Kishimoto (2018); 青木 (2020) など他多数）[6]。(20)b は、丁寧語 B の「です」に「て」が付けられないことを示している。(20)c では、「でし」が時制要素の右側に現れている。「でし」の直後には時制要素が接続していないが、非文と判断される。丁寧語 B の「です」は「です」という音形で機能範疇化しており、活用を完全に失っているので、時制要素に接続されていなかったとしても、「でし」という音形では発現することができないのである。

(20) a. *面白かったでした。
b. *太郎はやさしかったでして、たくましかったです。
c. *太郎はやさしくてでし、たくましかったです。

「です」は、形容詞型の活用を伴う語が文中に含まれていれば、述語が形容詞以外であっても、Addr に現れることができる。形容詞型の活用をする語には否定辞の「ない」がある。否定辞なので、名詞述語文や動詞述語文にも生じる。(21)では、丁寧語 B の「です」が時制要素の「た」の右隣に現れている。否定辞の「ない」は形容詞型の活用をするので、動詞述語文や名詞述語文でも、時制要素の右側に丁寧語を生起させることができるのである。

(21) a. 太郎は来なかったです。
b. 太郎は犯人ではなかったです。

否定文における「です」も活用を失い、機能範疇として文法化した丁寧語である。したがって、「た・て」などを接続させることはできない。(22)と(23)は、否定文に現れる丁寧語の「です」に「た・て」が付かないことを示している。（過去時制の「た」が付けられないという観察に関しては、日本語記述文法研究会（編）(2009: 264) や Kishimoto (2018) にも記述がある。）

(22) a. *太郎は来なかったでした。
b. *太郎は犯人ではなかったでした。

(23) a. *三ノ宮に行かなかったでして、姫路に行きました。
b. *太郎は犯人ではないでして、被害者です。

否定文であっても、否定辞の「ん」が現れる文では、時制要素の右側に丁寧語を生起させることはできない。(24)はどちらも否定文であるが、時制要素の右側に「です」は現れること

[6] 二階堂 (2009: 70–71) によれば、鹿児島方言では、「あついでした」のような文は容認可能である。また、鹿児島方言話者以外にも一部の話者がこのような文を容認するようである（辻村 (1967)）。このような判断をする話者は、「あついでした」のような文を二重節からなる文として捉えている可能性がある。この点については今後の研究課題とする。

はできない。このことは、「です」が AddrP に生起されるためには、形容詞型の活用語が必要となることを示している。

(24) a. *太郎は来ませんです。
b. *太郎は来ませんでしたです。

このように、丁寧語 B は、形容詞型の活用語が文に現れる場合、AddrP の主要部に基底生成される。「です」は活用を完全に失っており、機能範疇として文法化しているので、「た・て」などの要素による接続は許容されない。丁寧語の先行研究では、時制要素の左隣に現れる「ます」や「です」に関する研究が主であり、AddrP に生成される「です」の研究はそれほど多くない。この点において、ここで提示した言語事実は丁寧語の統語論研究の裾野を広げるデータとして寄与する。

3.2. 丁寧語の主要部移動

丁寧語は、時制要素の直後ではなく、動詞や名詞の直後に現れることもある。(25)a は動詞述語文に現れる丁寧語 A の「ます」、(25)b は名詞述語文に現れる丁寧語 A の「です」の例である。以下では、動詞述語文や名詞述語文に現れる「ます」と「です」は、はじめから AddrP に生じるのではなく、「ます」は vP 領域、「です」は CopP 内に基底生成されると提案する。さらに、主要部移動の適用によって Addr に移動することを示す。「ます・です」は、「ました・まして」や「でした・でして」のように時制要素と共起することがある。しかし、このときの「た・て」は TP の主要部に置かれるわけではなく、丁寧語とまとまって一つの語彙項目（lexical item）としてレキシコンに登録されており、vP や CopP 内に併合されることを示す。

(25) a. 太郎は来ます。
b. 太郎は学生です。

本論では、「ます」と「です」は、それぞれ vP の主要部、CopP の主要部に基底生成されると仮定する。その根拠となるのは、「まい」との共起関係である。モダリティ要素の「まい」は形態的には動詞に接続するという特徴がある。(26)の対比が示しているように、「まい」は動詞に接続しなければならず、形容詞には接続できない（澤田 (1993: 78)）。（「まい」の構造位置については、第 3 章で論じる。）

(26) a. 太郎は部屋を片付けるまい。
b. *その部屋は暑いまい。

形容詞への接続が容認されないという点は、意味的な要因によるものではない。(27)は、形容詞の「たい」を動詞化する「がる」が付くことによって「まい」が接続できるようになるこ

とを示している。(27)の二つの文は、論理的意味は同一なので、範疇特性の違いで文の良し悪しが決まっていると解釈することができる。「まい」には動詞に接続するという形態的制限が課されるので、形容詞には接続できないのである。

(27) a. *部屋を片付けたいまい。
b. 部屋を片付けたがるまい。

また、「まい」は動詞の終止形だけでなく、動詞の未然形にも接続できる。(28)では、「まい」が「食べる」の未然形に接続している。このことは、「まい」が動詞の範疇特性を持つ要素に接続する性質を持つことを示唆している。

(28) 太郎はそれを食べまい。

(29)に示されるように、「ます」は「まい」との共起が可能である。先に見たように、「まい」は動詞の終止形に接続する。通時的に見ても「ます」は動詞の「まゐらす」に由来するので、現在の文法でも動詞の特性を保っていることが示唆される（宮地 (1980); 高山・青木 (2010); 大堀 (2002, 2004); 青木 (2020)）。この観察に基づくと、「ます」は動詞句内にとどまっているということができる[7]。

(29) 太郎は来ますまい。

一方で、(30)のように、「です」は「まい」と共起できない。「です」はコピュラの「だ」の丁寧体である。「太郎は学生です」のように名詞述語文を形成するので、コピュラの特性を有している。

(30) *太郎は学生ですまい。

(31)a に示されるように、コピュラの「だ」も「まい」とは共起できない（田川 (2009)）。対照的に、(31)b のように、「だ」と意味的に近い「である」では容認される。

(31) a. *太郎は学生だまい。　　b. 太郎は学生ではあるまい。

「である」はコピュラの連用形「で」に動詞の「ある」が組み合わさってできているので、統語的には動詞句を形成する。このため、動詞の終止形に接続する「まい」と共起できる。

[7] 「ます」の併合位置に関する異なる仮定については、Yamada (2019) および Miyagawa (In press) を参照。Yamada (2019) は、分散形態論の枠組みを採用し、「ます」に関する素性が NegP の主要部に起こると主張している。また、Miyagawa (In press) は、vP と NegP の中間に投射する AgrP に「ます」が基底生成されると主張している。

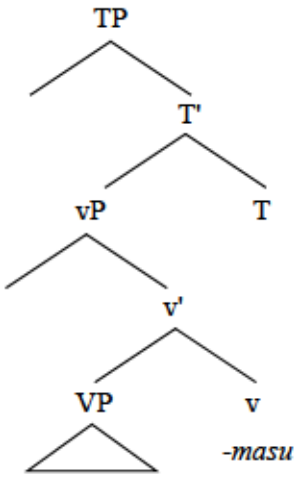
語源的には「だ」や「です」も動詞に由来する。「だ」はもとは「である」の縮約形である（Nishiyama (1999)）。名詞述語に付く「です」の語源に関しては、定説は存在しないが、「でさうらふ」や「であります」、「でござります」に由来するなどの説がある[8]（日本国語大辞典第 2 版編集委員会 (2000-2002); 青木 (2020)）。このように、「だ」や「です」は動詞に由来するが、にもかかわらず、「まい」とは共起できない。

(31)a の不適格さは「だ」が「である」の縮約形であることに起因するものではない。動詞の縮約形自体は「まい」の前部要素として現れることができる。(32)a のように、「告白する」というサ変動詞は「コクる」と縮約されることがある。そして、(32)b のように、「まい」による接続が可能である。縮約形であっても動詞の範疇特性を保っていれば、「まい」の接続が許容されるのである。よって、(31)a の非文法性は「だ」が縮約形であることには還元できない。このことから、「だ」や「です」は、「ます」とは異なり、すでに動詞としての範疇特性を失っているということができる。

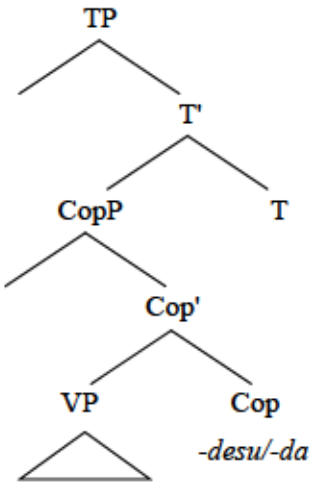
(32) a. 告白する＞コクる　　b. 太郎は花子にまだコクるまい。

本論では、「だ」や「です」は動詞句ではなく、コピュラ句（CopP）の主要部であると仮定する。(33)に示すように、「ます」は動詞句内の v 主要部に生成されるが、「です・だ」は CopP の主要部に基底生成される（cf. 田川 (2009)）。（コピュラ文の構造に関しては第 4 章においても論じる。）

(33) a.



b.



さらに、v・Cop 主要部に基底生成される丁寧語は AddrP への主要部移動を起こす。この仮説は、伝聞を表す「そうだ」への埋め込みに関するデータから裏付けられる。(34)に示すように、TP の下位に基底生成される丁寧語は伝聞の「そうだ」の補部位置には表出できない[9]。

---

[8] 近世から現代にかけての「です」の発達については、辻村 (1968) が詳しい。

[9] 昔話に出てくる伝聞の「そうな」には、丁寧語を埋め込むことができる。

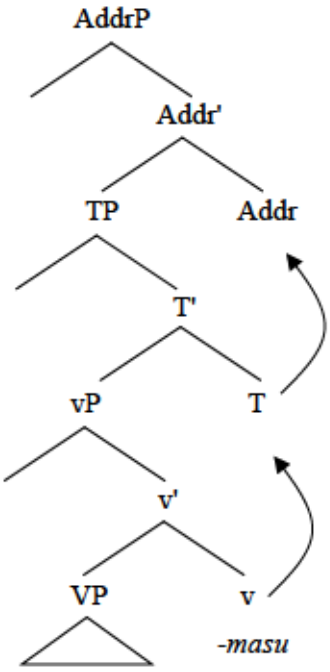
(i)　おじいさんとおばあさんはその後幸せに暮らしましたそうな。

また、辻村 (1968: 287–288) は、近世語においては「～ますそうだ（ますさうだ）」が使用されていたことを記述している。「～ますそうだ」の後継として「そうです」という言い方が

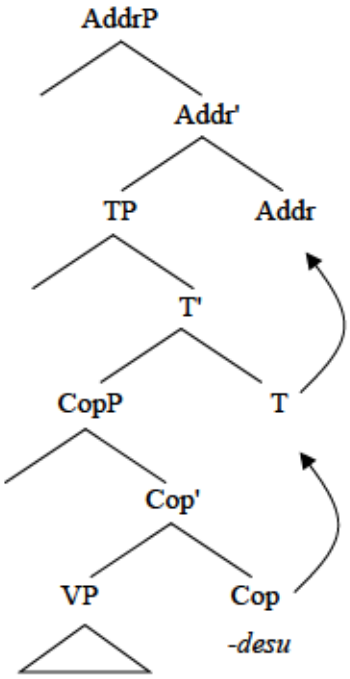
(34) a. *太郎はもうすぐ来ますそうです。
b. *太郎はもうすぐ大学生ですそうです。

(34)の非文法性は、丁寧語が TP より上位の CP 領域と関係を持つことを示している。伝聞の「そうだ」は TP を補部に取り、AddrP は補部に取れない。この観察に基づいて、本論では、丁寧語は TP より上位の Addr へ主要部移動すると仮定する（cf. Miyagawa (1987); Kishimoto (2013a)）。(35)に示すように、「ます・です」は、v・Cop 主要部から Addr への主要部移動を起こす。そうすると、(34)は、丁寧語 A の移動先が提供されないため、非文法的になるということができる。なお、この主要部移動は、形態音韻的な要請ではなく、丁寧語 A が AddrP に関係付けられることに起因する移動なので、統語部門において生じる移動であると仮定する（cf. Chomsky (2000, 2001)）。

(35) a.



b.



伝聞の「そうだ」を用いてテストを行っているのは、丁寧語の「です」が基本的には連体形接続の環境には、そのままの形態では生起できないという事情による[10]（松村（編）(1971:

普及したと論じている。
このことは、伝聞の「そうだ」と「そうな」が異なる補部を選択していることを示している。
[10] ただし、松村（編）(1971: 522) が記述しているように、連体形接続であっても「のに」、「ので」、終助詞の「の」の直前には例外的に「です」という語形のままで表出させることができる。
(i) a. 危険ですのに、それでもやるつもりなのですか？
b. 危険ですので、お控えください。
c. そうですの？

522))。(36)は、「場合」が連体形接続であることを示している。（過去時制が付く場合は埋め込みが可能である。）

(36) 危険｛な／*だ｝場合、使用できない。 （cf. 危険だった場合、…）

(37)から分かるように、「です」は連体形接続の環境では生起できない。（過去時制が付く場合は、従属節に埋め込むことができる。また、「ます」は「この部屋を使用されます場合、事前にご予約ください」のように、連体形接続の環境で表出することが可能である[11]。）

(37) ?*雨天です場合、ご利用になれません。（cf. 雨天でした場合、…）

これに対して、伝聞の「そうだ」の補部位置は、(38)a に示されるように、終止形接続の環境である。伝聞の「そうだ」以外にも、TP を補部に取るものには、「わけだ」などがある。しかし、(38)b から、「わけ」は連体形接続であることがわかる。「*太郎は賢かったですわけです」のような文は不適格となるが、この場合は、形態的な違反も起こしているので、純粋に統語的な理由で不適格となっているということはできない。一方、伝聞の「そうだ」は、述語の終止形に接続するので、潜在的に「です」という語形が起こりうる環境となる。したがって、終止形接続の「そうだ」の補部位置に「です」が表出できないという事実は、「です」が CP 領域の要素であることを示すデータとなる。

(38) a. 太郎は優秀｛だ／*な｝そうだ。
b. 太郎は優秀｛*だ／な｝わけだ。

TP の下位に生じる丁寧語 A の「ます・です」はいくつかの興味深い振る舞いを示す。(39)-(41)に見られるように、「ます」や「です」の直後への取り立て詞の挿入は許されない。(39)は非過去時制の例、(40)は過去時制の例、(41)はテ形の例である。「まし」や「でし」は、丁寧語 A の連用形なので、取り立て詞が挿入されてもよいように思えるが、にもかかわらず、取り立て詞の挿入は不可能である。

(39) a. *太郎は来ましはする。
b. *太郎は学生でしはする。

---

[11] また、推量辞の「う」も、連体形接続の環境に起こることが可能である。Kishimoto (2009) や三宅 (2010) が観察しているように、「う」は非制限関係節（non-restrictive relative clause）に現れることができる。(ia)では、「その男子」が非制限関係節によって修飾されている。非制限関係節には推量辞の「う」が現れている。(ib)に示しているように、非制限関係節は連体形接続の環境である。

(i) a. ［大学生ではなかろう］その男子
b. ［優秀｛な／*だ｝］その男子

(40) a. *太郎は走りましさえした。
b. *太郎は学生でしさえした。

(41) a. *太郎は山へ柴刈りへ行きましはして、花子は川に洗濯に行きました。
b. *太郎は大学生でしはして、花子は社会人です。

取り立て詞の挿入が許容されないのは、「ます」と「です」が時制要素とひとまとまりになって一つの語彙項目になっているからである。取り立て詞の特徴として、語彙項目の右端に挿入されなければならないことが知られている（岸本 (2005) など）。(42)に見られるように、語彙項目の「神戸大学」の右側に「さえ」を挿入することはできるが、語彙項目の内部に取り立て詞の「さえ」を挿入することはできない。「ます・です」、「ました・まして」、「でした・でして」が「神戸大学」と同じように一つの語彙項目として派生に導入されていると仮定すると、(39)-(41)が不適格になるのは、語彙項目の内部に取り立て詞が挿入されているからであるということができる。

(42) 神戸（*さえ）大学（さえ）

一方で、通常の動詞では、時制要素との間に取り立て詞の挿入が可能である（Kuroda (1965); Aoyagi (1998); Sakai (1998)）[12]。通常の動詞は、時制要素との一語化は起こしていないので、取り立て詞の挿入が許される。（また、取り立て詞の挿入が起こる際、代動詞の「する」が挿入される。この現象は、英語の *do* 挿入に相当する（Bobalijk (1994, 1995); Lasnik (1999) など; cf. Chomsky (1957, 1995)）。）

(43) a. 太郎が来はした。
b. その話は本当でありはした。

「ます」と「です」が時制要素とともに一語化しているという主張は、連用中止法が許容されないという点からも支持される。(44)に示すように、動詞の連用形は「て」が接続しないときにも、従属節として機能する。この用法は連用中止法と呼ばれる。

(44) a. 太郎は山へ柴刈りへ行き、花子は川に洗濯に行った。
b. 太郎は大学生であり、花子は社会人である。

連用中止法は、丁寧語では許容されない。(45)のように、丁寧語 A の連用形の「まし」や「でし」は、「て」なしでは従属節をなすことができない。(45)が許容されないのは、「まし・でし」という形式がレキシコンに登録されていないからである。

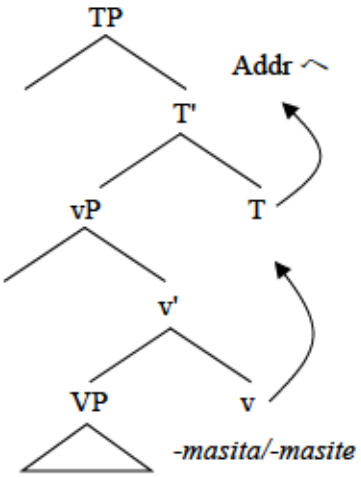
[12] 取り立て詞の統語的分布の記述については寺村 (1991) が詳しい。

(45) a. *太郎は山へ柴刈りへ行きまし、花子は川に洗濯に行きました。
b. *太郎は大学生でし、花子は社会人です。

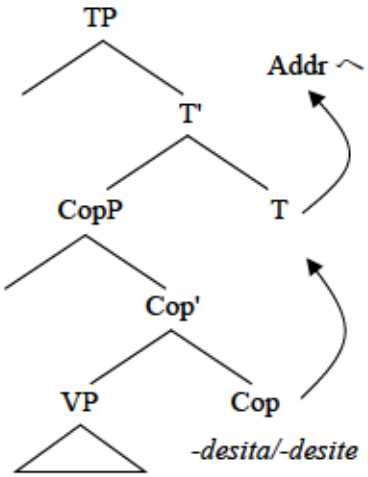
要するに、「まし・でし」は時制要素の「た・て」とひとまとまりになっていなければ生起できないということである。一方、通常の動詞は時制要素の「た・て」とは独立の語なので、連用中止法が可能である。

通常の動詞述語文では時制要素の「た」や「て」は、TP の主要部に起こる。しかしながら、丁寧語が起こる文では、「た」は TP の主要部には生じず、丁寧語と一つの語彙項目となって派生に導入される。(46)に示すように、「ました・でして」は vP 内に、「でした・でして」は CopP 内に外的に併合し、Addr へ移動すると仮定する。

(46) a.



b.



丁寧語 A の「ます」の特殊な統語的特性は否定文においても観察される。丁寧語 A の「ます」が否定辞とともに現れるとき、通常の動詞述語文とは異なり、(47)a のように、否定辞の「ん」が用いられる。一方で、(47)b に示すように、動詞述語文で用いられる否定辞の「ない」を接続させることはできない。

(47) a. 太郎は来ません。
b. *太郎は来ませない。

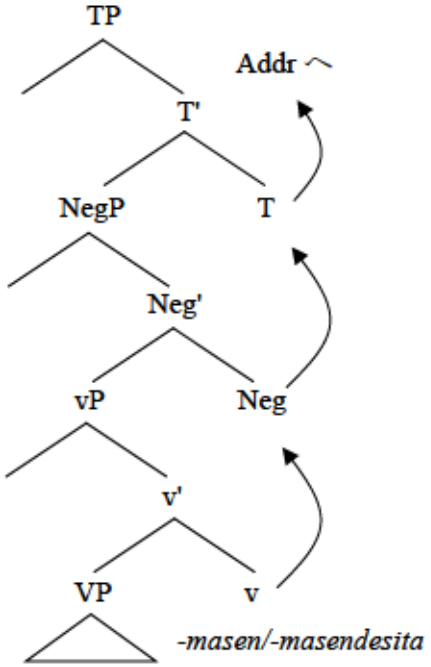
過去時制の文では、(48)a に示すように、「でした」という語形で現れる必要があり、(48)b に示すように、時制要素の「た」が単独で現れることはできない。加えて、(49)のように、「でし」は、同じくコピュラの「だっ」や動詞述語文において取り立て詞が挿入されたときに挿入される「する」の連用形とは交替できない。

(48) a. 太郎は来ませんでした。
b. *太郎は来ませんた。

(49) a. *太郎は来ませんだった。[13]
b. *太郎は来ませんした。

(47)から(49)は、非過去時制を表す否定文では「ません」、過去時制を表す否定文では「ませんでした」として丁寧語が派生に導入されていると考えれば捉えられる（西山 (2021)）。(50)に示されるように、「ません」と「ませんでした」は動詞句内に一つの語彙項目として生じる。その後、NegP や TP の主要部を経由して、Addr へ局所的に主要部移動する。（Neg や T には音形を持つ主要部要素は生じない。）つまり、否定辞が含まれる場合にも、否定辞は Neg に起こるのではなく、丁寧語とともに単一の語彙項目となって派生に導入されるということである。「ませ」は、否定要素・時制要素とひとまとまりになって「ません（でした）」として一語化しているということができる。

(50)



これに関連して、否定辞と「て」から形成される「なくて」という従属節は、「ず」との交替が可能である。(51)a では、動詞の「付く」の連用形が「なくて」に接続している。(51)b では、「なくて」の部分が「ず」と置き換わっている。この文は問題なく容認される。一方で、(52)に示すように、丁寧語が含まれる場合、両方とも容認されにくくなる。(52)a では「なくて」、(52)b では「ず」が生じている[14]。丁寧語を含む否定文が従属節に現れるときは、か

[13] 松村 (1957) によると、「ませんでした」という形式は、江戸語には見られず、この形式が文献上に多く現れるようになるのは、明治期に入ってからのことである。19 世紀の日本語では、「ませんでした」に加えて、「ませんかった」や「ませんだった」等のような形式が使用されていたことが既に報告されている（さらにそれ以前には「ませなんだ」・「ましなんだ」のような形式が使用されていたという）。本論では、現代日本語の文法を考察の対象としているので、丁寧語の通時的変化については深く立ち入らない（Yamada (2019) も参照）。
[14] 「ませず」は、公式的な文章では、稀に用いられることがあるかもしれない。また、(i)の

わりに、(53)のように、「ませんで」または「ませんでして」という形式が用いられる。

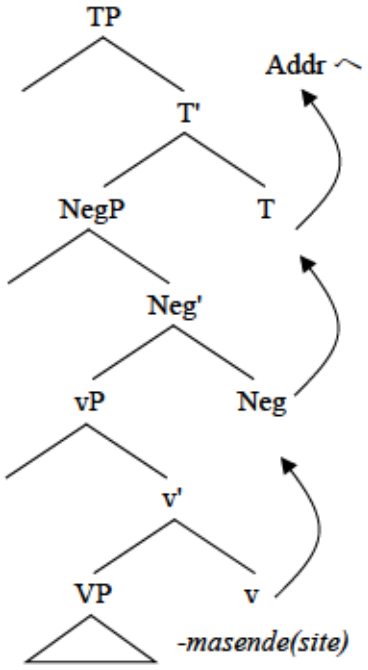
(51) a. 全く気が付かなくて、恥ずかしい限りです。
b. 全く気が付かず、恥ずかしい限りです。

(52) a. *全く気が付きませなくて、お恥ずかしい限りです。
b. ??全く気が付きませず、お恥ずかしい限りです。

(53) a. 気が付きませんで、お恥ずかしい限りです。
b. 気が付きませんでして、お恥ずかしい限りです。

したがって、丁寧語付きの否定文の従属節では「ませんで」、「ませんでして」が vP 内に導入されるということができる。その後、Addr への主要部移動の適用を受けることとなる。丁寧語は、否定要素や時制要素と外的併合によって組み合わさっているわけではなく、否定要素や時制要素と組み合わさった状態で予めレキシコン内に登録されているのである。

(54)



TP より下位に生起する丁寧語 A の例をまとめると、(55)のようになる。計 9 つの丁寧語がレキシコンに登録されていると仮定する。それぞれの丁寧語は、述語のタイプ（動詞か名詞か）、肯定文か否定文か、定時制（過去・非過去）か不定時制かの三点で区別される。動詞述語文に現れる丁寧語 A は v 主要部として生成され、名詞述語文に現れる丁寧語 A は Cop 主要部として生成される。

ように、否定要素の「ず」の直後に「に」が付くと容認度が上がるようである。
(i) (?)全く気が付きませずに、失礼しました。

(55) a. 動詞述語・肯定・非過去 *-masu*, 名詞述語・肯定・非過去 *-desu*
b. 動詞述語・肯定・過去 *-masita*, 名詞述語・肯定・過去 *-desita*
c. 動詞述語・肯定・不定 *-masite*, 名詞述語・肯定・不定 *-desite*
d. 動詞述語・否定・非過去 *-masen*
e. 動詞述語・否定・過去 *-masendesita*
f. 動詞述語・否定・不定 *-masende(site)*

ここまでの議論をまとめると、統語の面では、「です・ます」は TP の下位に生起し、主要部移動によって AddrP に移動する。この仮説は、伝聞を表す「そうだ」の補部に丁寧語が現れ得ないことから確認できる。「ます」については、「まい」の接続が可能であることから動詞句（vP）の主要部であると主張した。「です」については、もともとは動詞であったが、すでに動詞としての範疇特性を失っており、コピュラ句（CopP）の主要部に現れると論じた。形態の面では、通常の述語の連用形には取り立て詞の挿入が可能であるが、丁寧語ではこれが許されない。また、通常の述語では可能な連用中止法が丁寧語では不可能である。このことから、「でして・でした」や「まして・ました」のような形式は、統語的に派生されてできたものではなく、一つの語彙項目として予めレキシコンにリストされていると考えるのが妥当である。

3.3. 丁重語

形容詞述語文では丁寧語 B の「です」が時制要素の右側に表出することを見たが、形容詞述語文であっても、TP の下位に丁寧語 A を生起させることは可能である。(56)に例を示しているように、「ございます」は、形容詞の連用形に付き、構造的に TP より下に生じる。ただし、「ございます」は、「ます」や「です」と比較して、極めて強い丁寧さを表す。さらに、形容詞の連用形に付くとはいっても、今ではあまり用いられない音便化を受けた連用形に付くので、使用される頻度はそれほど高くない。これに対して、「優しかったです」のように時制要素に付く「です」では、通常程度の丁寧さが伝達される。また、音便化を受けた連用形に接続させる必要もない。形態的な事情とスピーチスタイルの関係で、現在では AddrP に生起する「です」が積極的に用いられるようになったと考えられる（井上 (1998: 154–157)）。

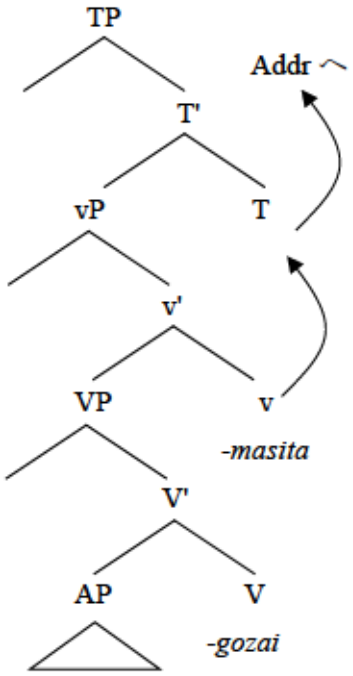
(56) 美しゅうございました。

「ございます」は完全に一語化しているのではなく、「ござる」と「ます」からなる分析的な構造を保っている。この点は、取り立て詞の挿入から確認できる。(57)a に示すように、取り立て詞の「は」は「ござる」と「ます」の間に現れることができる。このことは、「ござる」と「ます」が異なる語彙項目であることを示唆している。「ござる」は動詞なので、動詞句に対して「は」が付加されていると考えられる。一方で、(57)b のように、丁寧語の直後への取り立て詞の挿入は不可能である。これは「ました」が一語であることによる。

(57) a. 彼女は美しゅうござりはしました。
b. *彼女は美しゅうございましはした。

より具体的には、「ございます」は以下のような構造を持つと考えられる。すでに述べたように、「ござる」は動詞なので VP を投射する。「ました」は丁寧語なので vP の主要部に生成され、主要部移動によって Addr まで移動する。結局のところ、「ございます」は、丁寧語の「ます」が起こる他の動詞述語文と構造的には同じであるということができる。

(58)



日本語に関する記述的な文法研究では、「ござる」は丁重語（謙譲語 II とも）に分類されることがある（大石 (1975); 菊地 (1997)）。丁重語には、「ござる」以外に「いたす」・「まいる」・「申す」・「存じる」・「おる」などが含まれる。丁重語は、「ます」と共起する必要があり、聞き手への敬意を表すという点で丁寧語と同じ機能を持つ。しかし、主語位置に現れることができる名詞句に語用論的な制限が課されるという点で、丁寧語とは異なる。(59)に例示するように、丁重語の「いたす」が含まれる文では、主語位置に敬意の対象となる人物を表す名詞句を置くことができない。丁寧語のみが現れる文では、主語として生じることのできる名詞句に対して語用論的な制限が課されることはないので、丁重語と丁寧語は区別されなければならない。

(59) a. 私が出席いたします。
b. ??先生も出席いたしますか？　　（cf. 先生も出席しますか？）

丁重語と丁寧語の間に取り立て詞が挿入できるかどうかを確認すると、(60)のように、「ご

ざる」以外の丁重語についても、丁重語の連用形に取り立て詞を挿入することができる。したがって、丁重語は Addr まで主要部移動しているのではなく、動詞句内にとどまったままになっているということができる。

(60) a. 絶対に謝罪いたしはしません。
b. 研究室に参りはしましたが、先生はいらっしゃいませんでした。
c. たしかにそのように申しはしました。
d. そのことについては、詳しく存じはしません。
e. 気にしておりはします。

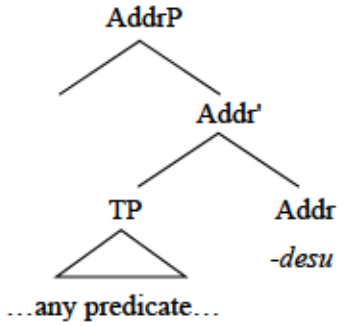
3.4. 長崎方言の「です」

日本語の標準語では、活用によって丁寧語が現れる位置が制限される。形容詞型の活用語が現れる文では、Addr に丁寧語 B が基底生成されるが、それ以外の文では、通常、丁寧語は、TP の内部に生起する。日本語の方言に目を向けてみると、形態論的な制約をほとんど受けることなく、丁寧語が CP 領域に起こる方言があることに気がつく[15]。

九州方言の一つである長崎方言では、(61)に示しているように、「です」は時制要素の右隣に表出できる。（標準語と同じく、TP 内部に表出することも可能である。）(61)では、形容詞型の活用語の有無に関係なく、「です」が TP の上位に現れている。このことは、長崎方言の「です」の出現位置に、標準語で見たような形態的制限が課されないことを示している。本論では、長崎方言の「です」は、(62)に示すように、AddrP の主要部であると仮定する。

(61) a. 太郎は犯人やったですよ。
「太郎は犯人でしたよ」
b. 太郎はそいば食べたですよ。
「太郎はそれを食べましたよ」
c. 太郎は優しかったですよ。

(62)



(61)の「です」には、標準語の丁寧語 B の「です」と同じく、TP の主要部の「た・て」が付けられない。(63)では、丁寧語に時制要素の「た」が付いているが、いずれも容認されない。

[15] 日本語の諸方言における敬語表現については加藤 (1973) を参照。

(63) a. *太郎は犯人やったでしたよ。
b. *太郎はそいば食べたでしたよ。
c. *太郎は優しかったでしたよ。

(64)では、「て」が丁寧語に接続しているが、こちらも非文である。Addr に起こる「です」は完全に機能範疇化しており、活用しないので「た・て」は接続できない。

(64) a. *昨日は息子の誕生日やったでして、プレゼントば買うてやりました。
「昨日は息子の誕生日でして、プレゼントを買ってあげました」
b. *昨日博多に行ったでして、書店巡りばしました。
「昨日博多に行きまして、書店巡りをしました」
c. *太郎は賢かでして、ようテストで満点ば取ってます。
「太郎は賢くて、よくテストで満点を取っています」

3.5. 「っす」

標準語にも、述語の活用に関係なく、CP 領域に基底生成される丁寧語の変種がある。親しみを表す「っす」である。本論では、「っす」は、時制要素に接続する場合、述語の活用に関係なく AddrP の主要部として起こることを示す。また、時制要素ではなく名詞に接続するときは TP の下位に生起し、AddrP に主要部移動すると主張する[16]。

「っす」の基本的な機能を概観すると、「っす」は、典型的には、年齢の近い先輩に対して用いられ、聞き手への敬意を表すと同時に、聞き手への親しみを表す。この語形は、発音が類似していることからも分かるように丁寧語 A の「です」に由来する。

(65) です＞っす

この語は、「です」がもとになっているので、(66)に示しているように、名詞述語文に現れることができる。過去時制の接続も可能である（呉 (2015)）。一方、「ます」がもとになっているわけではないので、(67)に例示しているように、動詞語幹には付かない。

(66) 頼んで正解っした。

(67) *太郎が参加しっす。

3.2 節で、名詞に付く丁寧語 A の「です」は時制要素とともに一語化していることを見た。

[16] 幼児語の「でちゅ」も「っす」と同様の振る舞いを示すと考えられるが、使用する母語話者が限られるため、ここでは深く立ち入らない。一方、「っす」は、若年層（特に男性話者の間）で頻繁に使用されている形式である。

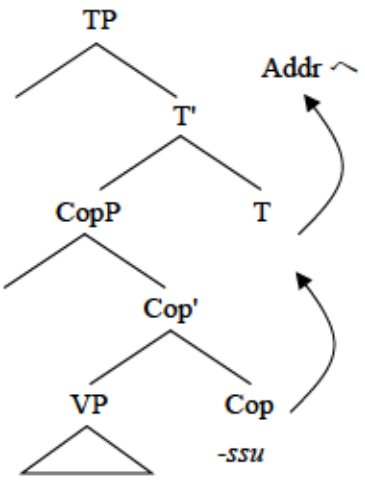
この点は、「っす」にも当てはまる。(68)に例を示しているように、取り立て詞の「さえ」の挿入が許されない。「っす」が時制要素とは独立に一つの語彙項目となっているのであるとすれば、通常の動詞と同じように取り立て詞の挿入が可能であることが期待される。しかしながら、非文と判断されるので、「っす」は時制要素と一語化していると考えられる。

(68)　*正解っしさえする。

名詞に付く「っす」は、CP 領域への主要部移動の適用を受ける。この見方は、(69)のデータから支持が得られる。(69)は「っす」が伝聞を表す「そうだ」の補部位置に表出できるかどうかを確かめたものである。伝聞の「そうだ」は TP を補部に取るので、「っす」が TP 内部にとどまるのであれば、両文とも文法的になることが予測される。しかし、実際には不適格なので、標準語の「です」と同様に、Addr への主要部移動の適用を受けているということができる。名詞に接続する「っす」は、(70)に図示するように、CopP の主要部として生起し、主要部移動によって Addr に移動すると仮定する。

(69)　*正解っすそうっす。

(70)



「っす」は、CP の領域に基底生成されることも可能である。(71)では、「っす」が時制要素の「た」の右隣に現れている。このデータで興味深いのは、形容詞型の活用をする要素が現れていないにもかかわらず、容認される点である。「っす」が単に「です」の異形態なのであるとすると、(71)は、標準語の「です」と同じように非文となるはずである。(71)のデータから、CP 領域に現れる「っす」は、「です」から独立した語としてすでにレキシコンに登録されていることが示唆される。

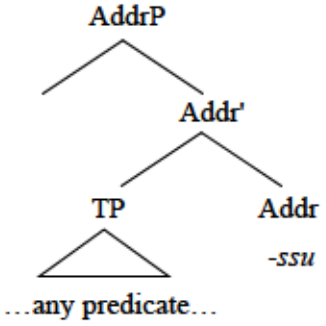
(71)　a. 太郎は犯人だったっす。
　　b. 太郎はもう帰ったっす。

(72)のように時制要素の接続は許されない（呉 (2015)）。丁寧語 B の「です」と同じく、機能範疇化して、活用を失っていることがこの例から窺える。

(72) a. *太郎は犯人だったっした。　　b. *太郎はもう帰ったっした。

名詞に付く「っす」が Cop から Addr へ移動するのに対し、時制要素に付く「っす」は、(73)のように、はじめから AddrP の主要部として生起する。

(73)



まとめると、本節では丁寧語をはじめとするアロキュティブ標識が AddrP の投射と関係付けられることを論じた。時制要素の左側に現れるアロキュティブ標識は TP の下位に基底生成され、AddrP への主要部移動を起こす。他方、時制要素の右側に現れるアロキュティブ標識は AddrP の主要部に基底生成されることを示した。

4. MP と ForceP

本節では、AddrP の上位に MP（Modal Phrase）と ForceP が投射することを示す。まず、ForceP と AddrP の階層関係について考察する。ForceP は、平叙文・疑問文・命令文・感嘆文などの節のタイプの指定に関わる投射である（Rizzi (1997)）。日本語においては、疑問を表す助詞の「か」がこの句の主要部に現れる[17]。(74)a に例示しているように、「か」は時制要素の右隣に現れる。助詞の「か」には、節のタイプが疑問文であることを指定する働きがある。カートグラフィー研究の枠組みでは、節のタイプの指定に関わる投射である ForceP の主要部であると考えられている（Kuwabara (2013); 遠藤・前田 (2020); Fujiwara (2020)）[18]。本論でも、(74)b に示すように、ForceP の主要部であると仮定する。

(74) a. もう飯は食った<u>か</u>？

b. [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……T] *-ka*]

---

[17] 「か」は *Wh* 疑問文研究でもよく取り上げられる。*Wh* 疑問文に関する議論は、Aoun and Li (1993), Choe (1987), Hagstrom (1998), Huang (1982), Kishimoto (2005), Nishigauchi (1990), Cheng (1991), Tsai (1999), Shimoyama (2006), Takahashi (1993), Tanaka (1999), Watanabe (1992), Cable (2010) などを参照されたい。

[18] イタリア語では、主節の *Wh* 疑問詞は FocP の主要部、if 節・*perché* 'why' は IntP、埋め込み節の *Wh* 疑問詞は Q_{emb} によって認可される（Rizzi (2001); Rizzi and Bocci (2017)）。

疑問を表す助詞の「か」以外の ForceP の主要部には、命令文を形成する-*e*、「ろ」、禁止を表す「な」がある。(75)a,b のように、子音語幹動詞には-*e* が付き、母音語幹動詞には「ろ」が付く。(75)c のように、禁止命令の「な」は動詞の終止形に接続する。これらの要素は節のタイプが命令文であることを指定するので、(75)d に示すように、ForceP の主要部に置かれると考えることができる。ただし、(75)a,b の-*e*・「ろ」は、形態的には動詞語幹に付かなければならない。(75)c の「な」は、モダリティ要素の「まい」と同様に動詞の終止形に付かなければならない。このため、「*食べたな！」のように、時制要素の「た」に付くことができない。（時制要素自体は「どいたどいた！」のように、命令文に現れることができるので、意味的な理由で「*食べたな！」が不適格となっているとは考えられない。）このような形態的な事情があるので、「か」とは違い、-*e*・「ろ」・「な」では統語的なテストを適用しにくい。以下では、形態的な制限が課されない「か」を用いて議論を進める。

(75) a. 走れ！（hasir-e）
b. 食べろ！
c. 食べるな！
d. [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……T] -*e*/-*ro*/-*na*]

Addr に基底生成される丁寧語 B は、疑問を表す助詞の「か」より構造的に低い位置にある。このことは、両者の線形順序から確かめられる。(76)において、CP 領域に基底生成される丁寧語 B の「です」は「か」の左隣に表出しなければならず、反対の語順では容認されない。この線形順序に基づくと、(76)を「です」が「か」より低い構造位置に現れることを示すデータとして見ることができる。

(76) 太郎は賢い｛ですか／*かです｝？

「かです」の語順が許されないのは、形態的な制約の違反によるものではない。(77)の下線部では、丁寧語の「です」が「か」で導入される埋め込み節の右隣に現れており、「かです」の語順で容認されている。この場合、「です」は埋め込み節とは異なる節にあるので、ForceP より上位に起こっているわけではない。

(77) Q: 太郎が知りたがっているのはどんなことですか。
A: *pro* この地球がどのようにしてできたかです。

日本語の丁寧語に関する統語論研究では、丁寧語は Speech Act Phrase（SAP）との関係を持つと論じられることがある（Miyagawa (2012, 2017); Kishimoto (2013b); cf. Yamada (2019)）。Speech Act Phrase とは、話し手と聞き手に関わる投射であり、CP 領域（ForceP）よりも上位

に存在する投射である[19]（Speas and Tenny (2003); Tenny (2006); Hill (2007); Haegeman and Hill (2013); cf. Portner, Pak, and Zanuttini (2019)）。また、Miyagawa (In press) は SAP を Speaker-Addresee Phrase の略であるとしているが、Speech Act Phrase としての SAP と基本的な機能は変わらない。これらの分析のもとでは、日本語の丁寧語（またはアロキュティブ探査子（第 1 章 3.1 節参照））は、(78)に示すように、SAP に非顕在的に移動する。SAP の下に投射する CP や ForceP の主要部には、疑問を表す助詞の「か」が現れる。したがって、この分析では、本論の提案とは異なり、丁寧語は「か」よりも上位の投射と関係しているということになる。

(78) [$_{\text{Speech Act Phrase}}$ [$_{\text{CP/ForceP}}$ [$_{\text{TP}}$ …*-mas/-des*…T] C/Force] SA]

Miyagawa (1987, 2012, 2017, in press) は、(79)のようなデータから、日本語の丁寧語（またはたアロキュティブ探査子）が疑問を表す「か」よりも上位の投射に移動することを提案している。丁寧語が含まれる(79)a は容認されるが、(79)b は通常不適格な文となる[20]。

(79) a. どちらのチームがクライマックスシリーズを制しましたか？
b. *どちらのチームがクライマックスシリーズを制したか？

Miyagawa (1987) によれば、日本語の「か」は何らかの要素によって統率（govern）されていなければならない。(79)に示される対比は、丁寧語が「か」の統率子として機能することを示している。丁寧語 A の「ます」は、LF で「か」の上位に移動するので「か」を統率できる。一方、丁寧語が含まれていない場合は、「か」の統率子が不在となるので、非文となる。

---

[19] Speech Act Phrase は、Ross (1970) の遂行分析（performative analysis）の現代版として言及されることもある（Haddican (2018)）。遂行文については、Austin (1962) を参照。遂行分析は、1970 年代に一部の言語学者（R. Lakoff (1969); Harada (1971); Sadock (1974); G. Lakoff (1975) など; Boyd and Thorne (1969) も参照）に支持されたが、哲学や意味論・語用論（Lyons (1977: 778–786); Gazdar (1979: Chapter 2); Searle (1979); Leech (1983) など）の立場からの批判を受けることとなる。また、解釈意味論（interpretive semantics）と生成意味論（generative semantics）の間で巻き起こった言語学戦争（linguistic war）の影響下にあって、遂行分析は徐々に下火となった（Newmeyer (1980)）。

[20] 非情報要求型の疑問文としては容認されるようである。野球の実況アナウンサーが(i)のような文を発話したとしよう。(ia)は *Wh* 疑問文、(ib)は *yes-no* 疑問文である。両文とも「か」が現れている。さらに、どちらの文にも、丁寧語は現れていない。この場合、話し手（実況アナウンサー）は聞き手に、疑問文に対する答えを求めているわけではないので、非情報要求型の疑問文である。（非情報要求型にしか現れない副詞の「果たして」の修飾も可能である（e.g. 「果たしてどちらのチームがクライマックスシリーズを制するか」））。このデータも Miyagawa (1987, 2012, 2017) の分析にとっての問題となりうる。

(i) ［文脈：実況アナウンサーが野球の試合を実況している。］
a. さあ、どちらのチームがクライマックスシリーズを制するか。球場内、大変盛り上がってきました。
b. さあ、ジャイアンツは今日で優勝を手にできるか。球場内、大変盛り上がってきました。

（丁寧語が起こらなくても、「どちらのチームがクライマックスシリーズを制したかな」のような文は許容される。これは、終助詞の「な」が「か」の統率子として機能するからである。）しかし、丁寧語が現れていなくても、疑問文が容認されるケースは存在する。例えば、父親が息子に対して、「もう飯は食ったか？」と尋ねることは何の問題もない。この文には、丁寧語が含まれておらず、「か」の統率子となる要素はない。また、*Wh* 疑問文であっても、「誰が来るだろうか？」のような文は文法的である。ここでも「か」の統率子となる要素は現れていないので、Miyagawa (1987) の分析にとって問題となる。(79)b の例文が通常の文脈で容認されないのがなぜなのかについては、現時点では不明のままであるが、そうであったとしても、「か」の統率子がなくても容認される文があるということは、(79)のデータが必ずしも丁寧語の LF 移動の証拠とはならないことを示している。もちろん、CP 領域に現れる丁寧語 B の「です」も、(76)において、Speech Act Phrase に移動すると考えることができないわけではない。TP の下位に起こる丁寧語と同じように、上位の投射に移動する可能性はある。しかし、そのような分析を採るならば、形態的には容認される「かです」の線形順序が(76)で容認されないのはなぜなのかを説明する必要があるであろう。これに対して、本論では、(80)に構造を示しているように、丁寧語に関わる AddrP の投射は ForceP より下位に投射するという立場を採る。このように考えることのメリットは、以降の議論で明らかになっていく。

(80) $[_{\text{ForceP}}\ [_{\text{AddrP}}\ [_{\text{TP}}\ \ldots\ldots\ldots \text{T}]\ \text{Addr}]\ \text{Force}]$

ちなみに、日本語以外の言語では、ForceP の上位の構造位置に AddrP の投射が現れる言語が存在する。ここではタイ語の例を提示する。タイ語は、基本的には、主要部先行型の言語である（Jenks (2011)）。(81)に示しているように、動詞の *dùum* 'drink'は目的語の名詞句に先行する。また、前置詞の *càak* 'from' も名詞句に先行する。

(81) a. **dùum** **lâw** (V-NP)
drink alcohol
'drink alcohol'

b. **càak** **yîipùn** (P-NP)
from Japan
'from Japan'

しかしながら、すべての投射が主要部先行型となるわけではなく、主節の CP の主要部に関しては後行型になる[21]。(82)では、*yes-no* 疑問文を形成する *mǎy* 'Q'、(83)では、聞き手への応答要求の意味を表す助詞の *ná* 'PRT'が文の右方周縁部に現れている（Cooke (1989); Iwasaki and Ingkaphirom (2005)）。

[21] タイ語の終助詞については、Cooke (1989) が網羅的に記述している。タイ語の疑問文に関する統語分析については、Ruangjaroon (2005) を参照されたい。

(82) cɔ̀ɔn dùùm lâw **mǎy**?
John drink alcohol Q
'Does John drink alcohol?'

(83) cɔ̀ɔn dùùm lâw **ná**.
John drink alcohol PRT
'John drinks alcohol.'

タイ語では、丁寧語も文の右方周縁部に現れる。(84)に示されるように、丁寧語の *khráp/khâ* は、文の右端に現れる。つまり、タイ語の丁寧語は CP の主要部である。また、タイ語の丁寧語にはジェンダーの区別がある。*khráp* と *khâ* は、通常の文脈では、それぞれ男性の話者と女性の話者によって使用される[22]。

(84) cɔ̀ɔn dùùm lâw **khráp/khâ**.
John drink alcohol ADDR.MALE/ADDR.FEMALE
'John drinks alcohol.'

興味深いのは、これら三種類の CP の主要部が共起した時の語順である[23]。(85)は、これらの文末要素が共起したとき、*mǎy-ná-khráp/khâ* 'Q-PRT-ADDR'の語順になることを示している。主要部後行型では、右側に現れる語が左手に現れる語よりも構造的に高い位置に現れるので、丁寧語は最も高い構造位置に現れているということになる（Baker (1985)）。このことは、(86)に示しているように、他の語順が許されないことからも支持される。

(85) cɔ̀ɔn maa mǎy ná khráp/khâ?
John come Q PRT ADDR.MALE/ADDR.FEMALE
'Did John come?'

(86) a. mǎy-ná-khráp/khâ
b. *mǎy-khráp/khâ-ná

---

[22] 男性が使用する丁寧語には、*khráp* よりも敬意の度合いが強い *khrápphŏm* もある。また、タイ語の丁寧語には日本語の「でちゅ」に類似した用法がある。タイ語では丁寧語が聞き手への愛情を表す語として使用されることがある。丁寧さを表す用法では、*khráp* は話し手が男性であること、*khâ* は話し手が女性であることが伝達される。しかしながら、これらの語の使い分けが話し手の属性ではなく、聞き手の属性によって生じるケースがある。*khráp* は男の子の乳幼児またはオスのペットに対して、また *khâ* は女の子の乳幼児、メスのペット、交際相手の女性に対して用いられることがある。この用法では *khráp* は女性話者が使用することも可能である。また、*khâ* は男性話者による使用が可能である。この場合の *khráp* と *khâ* は聞き手に対する愛情表現としての機能を持つ（Iwasaki and Ingkaphirom (2000: footnote 9) に類似の記述がある）。

[23] 例文の容認性判断にはタイ語母語話者 1 名（20 代女性）の協力を得ている。

c. *ná-mǎy-khráp/khâ

d. *ná-khráp/khâ-mǎy

e. *khráp/khâ-mǎy-ná

f. *khráp/khâ-ná-mǎy

yes-no 疑問文を形成する *mǎy* 'Q'は、節のタイプを指定するので、ForceP の主要部であると仮定することができる。その上位に、助詞の *ná* 'PRT'の句（PrtP）が投射することになる。そして、最上位に AddrP が投射する。つまり、タイ語の丁寧語は、日本語とは異なり、ForceP や PrtP より上位の投射と関係付けられるのである[24]。このことは、丁寧語の占める構造位置が言語によって異なることを示唆している。

(87) $[_{AddrP}[_{PrtP}[_{ForceP}$ … Force] ná] Addr]

ここまでの議論が正しければ、日本語の丁寧語とタイ語の丁寧語を認可する AddrP は、異なる構造位置に存在しているということが示唆される。丁寧語が認可される位置が言語によって異なるという点は、Alok (2021) や McFadden (2020) も指摘している。Alok (2021) は、マガヒー語の丁寧語は、FinP の主要部であるとしている。また、McFadden (2020) は、タミル語の丁寧語は、ForceP より上位の投射と ForceP より下位の投射の両方に生起できると論じている。丁寧語の構造位置は一様ではなく、言語ごとに異なるのが実情である。

次に、日本語には、モダリティに関する MP の投射がある。Koizumi (1993) は、推量を表す語を MP（Modal Phrase）の主要部であるとしている（Ono (2006); 上田 (2007); 田川 (2009); Ueda (2011); Kishimoto (2011); 岸本 (2011)）。本論でもこの仮説を採用して議論を進める。（本論で言うところの「モダリティ」という概念が形式意味論的な「モダリティ」と必ずしも一致しないことは、既に第 1 章の 4 節で言及している。）MP の主要部には、例えば、(88) に示すように、推量辞の「う」が起こる。（「だろう」、「でしょう」については、第 3 章で議論する。）

(88) a. 太郎は役者ではなかろう。

b. $[_{MP}[_{TP}$ ……..T] -*o*]

(89)a に例を示しているように、MP 主要部の「う」は ForceP 主要部の「か」と共起することができる。このとき、「う」は「か」より左側に生起する。このことから、ForceP と MP の階層関係は、(89)b のように規定できる。この構造では、MP は ForceP の下位に投射する。モダリティに関わる MP は、丁寧語に関わる AddrP と同じく ForceP よりも下位の CP 領域に起こる投射であることがわかる。

(89) a. 太郎は役者ではなかろうか。

[24] タイ語の CP 領域の正確な分離構造については、今後の研究課題とする。

b. [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{MP}}$ [$_{\text{TP}}$ ……T] *-o*] *-ka*]

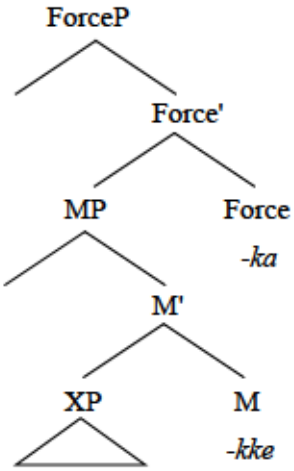
そうすると、次に問題となるのは AddrP と MP の階層関係である。論理的には、AddrP は MP よりも下位の投射であるという可能性、AddrP は MP より上位の投射であるという可能性、AddrP と MP は異なる投射ではなく同一の投射であるという可能性の三つがある。以下では、AddrP は MP よりも下位の投射であるという一つ目の仮説がもっとも妥当であることを論じる。以下では、終助詞の「っけ」と「わ」に関するデータに基づいて一つ目の仮説を支持する。

まず、MP が AddrP の上位に投射することは、終助詞の「っけ」のデータから確かめられる[25]。終助詞の「っけ」は話し手の記憶の確認や想起を表す。(90)a に見られるように、「っけ」は疑問を表す助詞の「か」との共起が可能である。「っけか」という線形順序では容認されるが、「かっけ」の語順では容認されないので、「っけ」が起こる投射は ForceP の下位であることが分かる。「っけ」は話し手の認識や判断に関わる MP の主要部であると考えられる[26]。この点は、(90)b のように、MP の主要部の「う」との共起が許容されないことからも裏付けられる。「う」と「っけ」はどちらも MP の主要部なので、主要部の競合によって共起が不可能になっているということができる。

(90) a. 太郎は来た<u>っけ</u>か？　　b. *太郎は犯人ではなかろ<u>う</u>っけ？

樹形図で描くと(91)のようになる。M 主要部に「っけ」、Force 主要部に「か」が置かれる。

(91)



[25] 「っけ」の意味論的な分析については Sauerland and Yatsushiro (2017) を参照されたい。

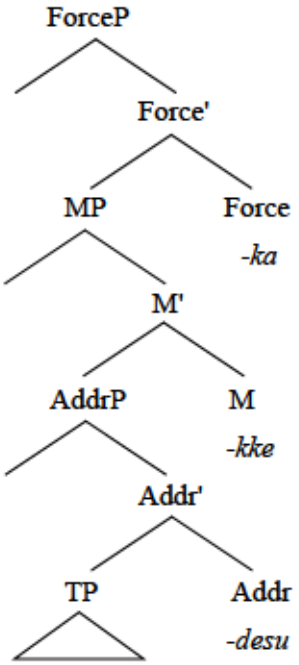
[26] 「っけ」は疑問専用の終助詞ではない。 (i)において、終助詞の「っけ」は疑問を表しているわけではない。話し手は、昔縄跳びで遊んでいたことを思い返しながら、過去の自分を振り返っているのである。この場合、「っけ」は、記憶の確認というよりはむしろ回想を表している。

(i)　昔ここで縄跳びした<u>っけ</u>。あれからもう二十年も経ったのか。

AddrP の主要部である「です」との共起関係を観察すると、(92)に示されるように、「です」は「っけ」の左側にのみ現れることができる。このことから、「です」の認可に関わる AddrP は、(93)に示されるように、MP よりも下位に投射する句であるということができる。

(92) a. 山田先生って昔あんなに学生に甘かったですっけ？
b. *山田先生って昔あんなに学生に甘かったっけです？

(93)



もちろん、AddrP に主要部移動する丁寧語 A との共起も許される。(94)は、丁寧語の「ました」や「でした」が終助詞の「わ」と共起できることを示している。「っけ」は AddrP を補部に取れるので、丁寧語 A の移動先が提供されることにより、(94)のような文は容認される。

(94) a. 太郎は来ましたっけ？　　b. 明日って休みでしたっけ？

AddrP が MP よりも上位に投射するのであるとすると、(92)において、「*っけです」の語順が許されないのがなぜなのかという点が大きな問題になる。また、AddrP と MP が同一の投射なのであるとすると、「です」と「っけ」が共起できるのはなぜなのかという点が問題になる。一つの主要部に複数の要素が起こることは通常ないからである。この点を踏まえると、AddrP は MP や ForceP よりも低い構造位置に投射する句であるということができる。

次に、終助詞の「わ」に関わるデータからも [ForceP [MP [AddrP…]]]] の階層を確認することができる。終助詞の「わ」は、上昇調と下降調で発話される場合がそれぞれある。上昇調で発話される場合、女性言葉のニュアンスを帯びる。今では、やや古風な響きがあり、上昇調の「わ」を用いる女性話者は若年層では減少している。一方、関西方言では、終助詞の「わ」は、下降調で発話され、男女兼用の語として、広く使用される。さらに、最近では、

下降調の「わ」が使用される地域は、関西地方だけでなく、全国に拡大してきている（遠藤・前田(2020)）。上昇調でも下降調でも、述語との接続の仕方は同じで、(95)のように、述語の終止形に接続する。

(95) 優秀｛だ／*な｝わ。

「わ」は興味深い統語的性質を持つ語である。まず、終助詞の「わ」は、MP の主要部に基底生成されると考えられる。(96)に示されるように、終助詞の「わ」は推量辞の「う」と共起できない（日本語記述文法研究会（編）(2003: 252); 遠藤 (2010)）。

(96) *太郎は役者ではなかろうわ。

「わ」は MP を修飾する副詞の「やっぱり」と共起できる。「やっぱり」は話し手の判断通りであること（(97)a）、あるいは計画していたことを変更すること（(97)b）を意味する副詞である。話し手の認識や判断に関わることから、MP を修飾すると考えられる[27]。

(97) a. やっぱり太郎は来た。　　b. やっぱりここには来るな。

(98)のように、「やっぱり」は「わ」との共起も可能である。

(98) やっぱり美味しいわ。

さらに、「わ」は、現れる節のタイプ（平叙文・疑問文・命令文・感嘆文など）が制限される。(99)に示すように、「わ」は、平叙文にしか現れることができない。そのため、疑問を表す「か」と共起することはできない。このことは「わ」に節のタイプを指定する働きがあることを示している。この観察から「わ」は ForceP と関係を持つ要素であると考えられる。

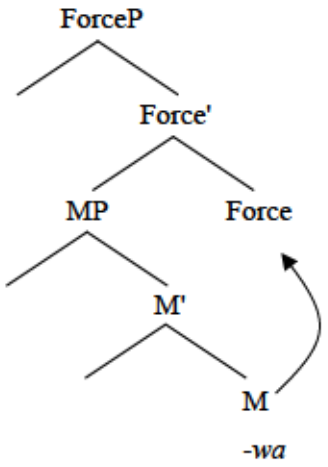
(99) a. 太郎は学生だわ。
　　b. *太郎は来ましたわか？

こうした「わ」の統語特性を捉えるために、本論では、「わ」は、(100)に示すように、M から Force への主要部移動を起こすと仮定する。「わ」は主要部移動によって Force まで移動するので、「か」のような他の Force 主要部とは共起できないのである[28]。なお、「わ」の主要部移動は 2.1 節で見た *should* の主要部移動と同様、統語部門での移動を仮定する。

---

[27] TP 同士を等位接続する「TP-か TP-かだ」構文（Kishimoto (2013a)）を用いることで、「やっぱり」が CP 領域の副詞であることが確認できる。(i)のように、等位項の内部に「やっぱり」を生起させることができないので、「やっぱり」は CP 領域の副詞であると考えられる。
(i)　太郎が（*やっぱり）来たか、花子が（*やっぱり）来たかだ。
[28] 本論では、共起制限を主要部移動によって説明しているが、他にも分析の可能性はある。

(100)



「わ」は疑問文だけでなく、命令文にも現れることができない（Saito and Haraguchi (2012); Saito (2015)）。(101)では、命令文に「わ」が後続しており、非文である。

(101)　早く行け（*わ）。

このことから、「わ」は平叙文で現れなければならないという統語特性を有していることが分かる。「わ」が ForceP に移動する必要があるのは、平叙文であることを指定する機能を「わ」が持つためであると考えることができる。

これらの終助詞は、AddrP に基底生成される丁寧語 B の「です」との共起が可能である。(102)は「ですわ」の語順で文法的と判断されている。その反対の語順では容認されない。したがって、「です」を認可する AddrP は「わ」の下位に投射するということができる。

(102)　太郎は賢い｛ですわ／*わです｝。

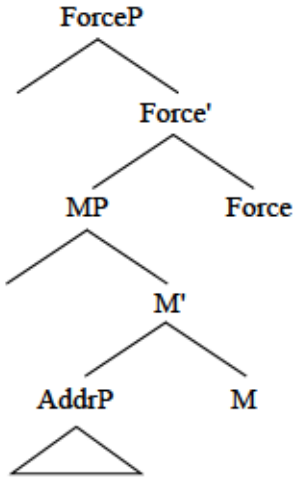
Saito and Haraguchi (2012) と Saito (2015) は、終助詞の「わ」が推量を表す語などの CP 主要部に接続しないことから、「わ」は TP を補部に取るとしている。しかしながら、実際には AddrP の主要部である丁寧語 B に接続できるので、TP だけでなく AddrP も補部に取れる。終助詞の「わ」は、(103)に規定されるように、TP または AddrP を補部に取る。本論では、AddrP は丁寧語が現れたときだけ投射すると想定しているので、「わ」は、丁寧語と共起するときは AddrP、丁寧語が起こらないときは TP を補部として選択する。

(103)　*-wa* 'PRT' [AddrP or TP _____]

例えば、分散形態論的なアプローチを採用して、遅延挿入（late insertion）等の操作によって共起関係を説明することも不可能ではないであろう。（「「わ」は M 主要部かつ Force 主要部の音声的具現化である」などの想定から、共起制限を導くことができる。）この点は、どのような理論を想定するかによって説明が異なってくる部分である。どのようなアプローチを採るのが最適であるかという点については、今後の課題とする。

線形順序に基づくと、AddrP は MP より下位に投射する句であるということができる。(104)の樹形図に示しているように、AddrP・MP・ForceP の順にそれぞれの句が投射する。

(104)



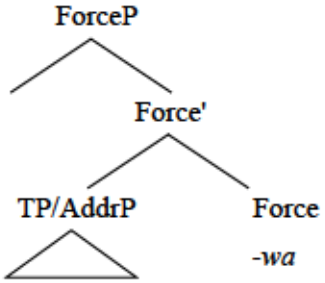
反対に AddrP が MP の上位にあるのであるとすれば、(102)において、「*わです」、「*もんです」の語順が許容されないのはなぜなのかという点が疑問となる。また、論理的には、AddrP と MP は区別されるべきものではなく、同一の投射であるという可能性もある。しかし、「ですわ」のように異なる語彙が共起できるので、この可能性は排除される。

言うまでもなく、「わ」は TP の下位に生じる丁寧語 A とも共起できる。これらの丁寧語は Addr まで主要部移動するので、Addr に基底生成される「です」と同じように「わ」と共起できるのである。

(105) a. 太郎は来<u>ましたわ</u>。　　b. 最高<u>でしたわ</u>。

もう一つの可能性として、「わ」は TP または AddrP を補部に取り、ForceP に基底生成される主要部であるという分析も考えられる。そのような分析では、(106)のように、MP が投射されないことになる。しかし、(98)で見たように、MP 副詞の「やっぱり」と終助詞の「わ」が共起可能であることから、MP が存在する構造の方が妥当である。

(106)



本節の議論を終える前に一点補足がある。Miyagawa (2012, 2017, in press) や Kishimoto

(2013b) では、丁寧語（あるいはアロキュティブ探査子）の SAP への移動を仮定する根拠として、「か」で導入される埋め込み節に丁寧語が表出できないことが挙げられている。「か」は SAP を選択することができないため、これらの埋め込み節では丁寧語が表出できないとしている。

(107)　*太郎は花子が来ましたか知らない。

「か」節への埋め込みに関するデータは、本論の仮説に対して必ずしも問題とはならない。(108)に例を示しているように、「か」の補部には MP の主要部も現れることができない。(108)a では、推量辞の「う」、(108)b では、確認・想起の「っけ」が「か」節に現れているが非文である。

(108)　a. *太郎が花子が犯人ではなかろうか聞いた。
　　b. *太郎は今日は何曜日だったっけか忘れた。

また、MP を修飾する副詞の「やっぱり」も「か」節には表出できない。

(109)　*太郎は花子がやっぱり来たか聞いた。

このことは、AddrP の要素だけではなく、MP の要素も「か」節に現れることができないことを示している。(110)のように、埋め込み節を導入する「か」は TP を補部に取るため、AddrP や MP の主要部は現れることができないのである[29]。

(110)　[$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{TP}}$ ….] *-ka*]

ここまでの議論をまとめると、TP の上位には、丁寧語を認可する AddrP の投射・話し手のモダリティに関わる MP の投射・節のタイプの指定に関わる ForceP が存在する。AddrP が MP や ForceP の下位に投射することは、終助詞の「っけ」や「わ」との線形順序から示唆される。MP の主要部に起こる「っけ」は、AddrP の主要部にある「です」の右側および ForceP の主要部にある「か」の左側に現れるので、このことから [ForceP [MP [AddrP…]]] の階層が成立しているということができる。また、「わ」は節のタイプの指定と話し手のモダリティに関わる要素であり、かつ AddrP の主要部に現れる「です」よりも右側に表出するので、[ForceP [MP [AddrP…]]] の階層を仮定する一つの根拠となる。

---

[29] これに関連して、Saito (2015) は補文標識の「の」・「か」・「と」が共起できることから、[$_{\text{ReportP}}$ [$_{\text{ForceP}}$ [$_{\text{FinP}}$ … の $_{\text{Fin}}$] か $_{\text{Force}}$] と $_{\text{Report}}$] の階層構造を提案している。「か」を ForceP の主要部に置く点は、本論の仮定と同一である。「の」の構造位置に関しては、第 4 章で論じる。
(i)　太郎は花子が来たのかと思った。
間接引用・直接引用の「と」の構造位置については、本論では深く立ち入らないが、Saito (2015) に従って ReportP の主要部であると仮定しておく。

5. EP と SRP

Rizzi (1997) のカートグラフィーの研究では、いわゆる CP 領域に現れる投射のうち、最上位の投射は ForceP であるとされる。しかしながら、日本語においては、ForceP の上位にさらに独立した投射が存在していると考えられる。(111)a では、疑問を表す助詞の「か」の右隣に終助詞の「よ」・「ね」・「な」が表出している。また、(111)b では、終助詞の「わ」の右隣に同じく「よ・ね・な」が現れている。疑問を表す「か」と平叙文にしか現れない「わ」はどちらも ForceP に関与する。「か」は Force に生成されるのに対し、「わ」は M から Force に移動する。これらの語彙の右隣に異なる語彙が現れるということは、「よ・ね・な」は ForceP よりも上位に投射する句の主要部として生起していると考えるのが妥当である。（ただし、「そうだなわ」の容認度に関しては個人差があるであろう。）

(111) a. 本当か｛よ／ね／な｝。 b. そうだわ｛よ／ね／?な｝。

本節では、ForceP の上位の投射として、強調句（Emphasis Phrase）と応答要求句（Soliciting Response Phrase）という投射を仮定する。応答要求（Soliciting Response）という用語は Saito and Haraguchi (2012) に基づく。樹形図では、簡略化して EP、SRP と表記する。終助詞の「よ」は、節全体の意味を強化する際に使用されるので、EP に属する[30]。「よ」が節全体の意味を強化する機能を持つことは、(112)の例から確認できる。(112)a は、平叙文の例である。「よ」が付くことによって「太郎が来た」という命題が強調されることになる。(112)b は命令文に「よ」が付く例である。「よ」が付かないケースと比較して、「よ」が付くケースでは、命令の意味が強化される。最後に、(112)c は修辞疑問文に「よ」が付く例である。「誰が行くか」という反語的な意味を持つ文に「よ」が付くことで、反語の意味合いが強調される。

(112) a. 太郎が来た（よ）。 b. 早く行け（よ）。 c. 誰が行くか（よ）！

ただし、「よ」は聞き手に答えを要求するような通常の疑問文には付くことができない。(113)では、yes-no 疑問文に「よ」が現れているが、奇妙な文となる。

(113) もう飯は食ったか（*よ）？

このことは、「よ」が通常の疑問文の意味を強化することはできないことを示している。これには意味論的な説明が必要であるが、(112)c のように、形態統語的には「かよ」の語順は可能なので、統語的には ForceP の上位に EP が投射していると考えて差し支えないであろう。

[30] 強調句は、焦点句（Focus Phrase）とは異なる投射である。どちらの投射も文全体あるいは文の一部を強調する語が現れるが、焦点句は焦点-前提（focus-presupposition）のペアを形成するのに対し、強調句はこのペアを形成しない。

EP に現れる要素には、「よ」以外に「かい」・「だい」・「わい」などの文末要素に含まれる「い」がある。(114)a は「かい」の例である。ただし、「い」は、「よ」とは異なり、独立した語としては生起しえない。(114)b から分かるように、「い」は単独では現れることができない。このことは、「かい」が一語化していることを表している。

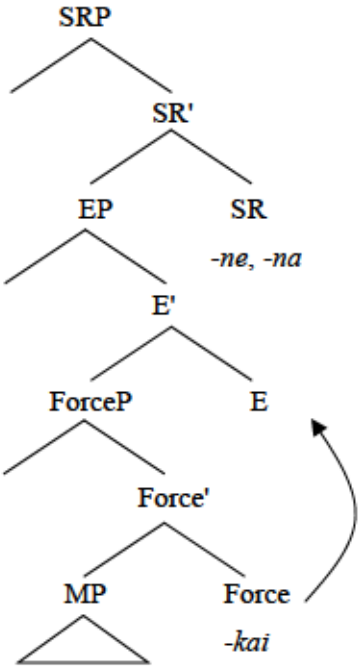
(114) a. 彼はアメリカ人かい？
b. *彼はアメリカ人い？ (cf. 本当よ)

個人差や方言差はあるであろうが、(115)のように、終助詞の「な」や「ね」とは共起できる。

(115) 本当かい｛な／ね｝。

本論では、「かい」は ForceP に生起し、EP に主要部移動すると想定する[31]（cf. Miyagawa (In press)）。「かい」は疑問文（または修辞疑問文）に現れるので、節のタイプの指定に関わる。そうすると、Force に関与する要素であると考えることができる[32]。さらに、「*彼はアメリカ人かいよ」のように、「よ」と共起できない一方で、(115)で見たように、「な・ね」と共起できることから、「かい」は、Force から E に主要部移動を起こすと考えられる。

(116)



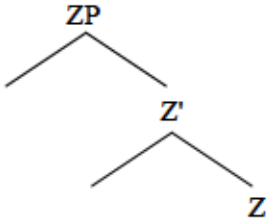
[31] 「だい」やコピュラの「だ」が現れる CopP の主要部位置に生起して、EP に移動すると考えられる。「わい」は終助詞の「わ」が現れる MP から EP に移動すると想定する。また、「だい」と「かい」の統語特性の差異については、Yoshida (1999) も参照。
[32] また、「い」の語源は、終助詞の「よ」あるいは係助詞「や」の変化した「え」にあるとされる（日本国語大辞典第 2 版編集委員会 (2000-2002: 762–763)）。「い」が終助詞の「よ」の音変化であるとすれば、EP と関与していることは十分に期待される。

また、「ね・な」は聞き手に応答を要求するような機能を持つので、SRP に属する。終助詞の「よ・ね・な」が ForceP よりも高い構造位置に現れるという点に関しては、(111)でも見たように、「か」や「わ」よりも右側に現れるということから支持される。(117)は、終助詞の線形順序の可否を簡易的にまとめたものである。(117)a と(117)b は、「か」と「わ」が「よ・ね・な」よりも常に左側に現れなくてはならないことを示している。次に、(117)c は、「よ」が「ね・な」よりも左に生起しなければならないことを示している(Saito and Haraguchi (2012))。逆の語順では容認されない。さらに、(117)d は「な」と「ね」が共起できないことを表している。このことから「な」と「ね」は同一の投射の主要部であることが示唆される[33]。

(117) a. かよ、かね、かな、*よか、*ねか、*なか
b. わよ、わね、わな、*よわ、*ねわ、*なわ
c. よね、よな、*ねよ、*なよ
d. *なね、*ねな

代案として、EP と SRP の二層に分かれているのではなく、(118)に示すように、単一の投射になっているという分析も考えられる。この分析では、「よね」や「よな」のような「よ」と「な」の二つの主要部からなっているわけではなく、一語化した要素として主要部に現れることになる。しかしながら、そのような分析では、「*ねよ」や「*なよ」のような語がどうして存在しないのかを説明することができない。これに対して、二層構造に基づく分析では、EP と SRP の階層関係から自動的に「*ねよ」や「*なよ」のような連鎖を排除することができる。このような事情で、本論では二層構造に基づく仮定を採用している。

(118)

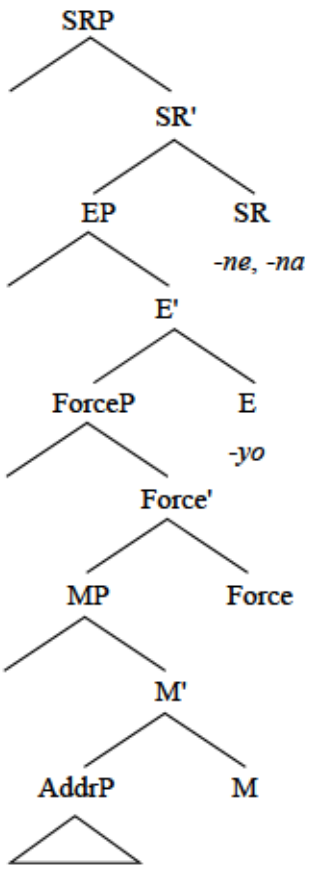


-yo, -ne, -na, -yone, -yona

以上の観察を踏まえると、(119)に示されるような階層関係を仮定することができる。ForceP の上位の投射として EP と SRP が投射する。終助詞の「よ」と「ね・な」は、それぞれ E と SR に対応する。

[33] Miyagawa (In press, Chapter 3) は、文末が「かな」で終わる文には、丁寧語が現れることができないとしている。しかしながら、(i)のような文は容認可能である。
(i) さあて、どうしますかな。
(i)の例は、Miyagawa (In press) の分析にとって問題となる。

(119)

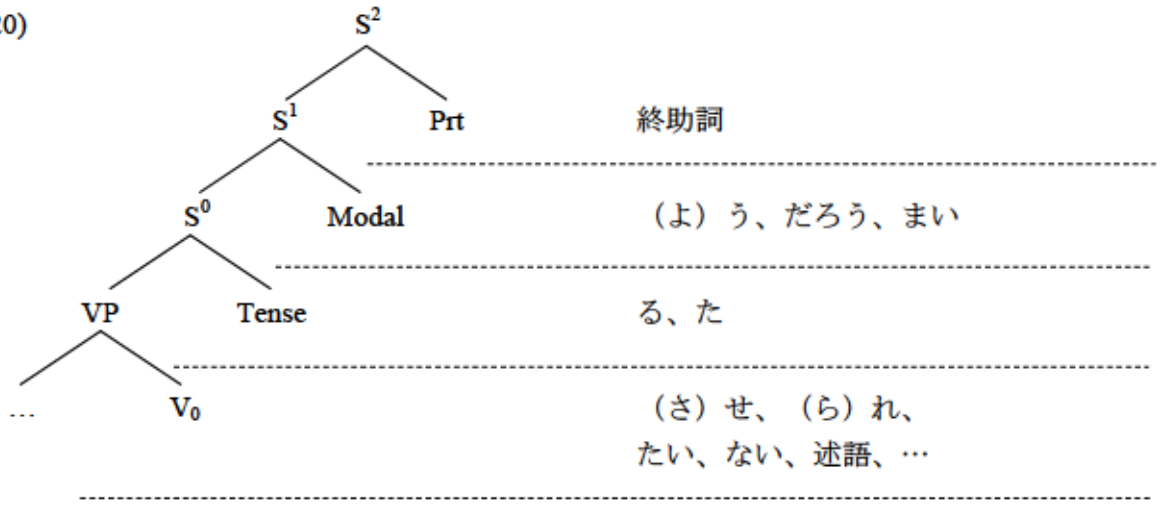


また、3 節でも言及したように、五つの投射のうち AddrP は丁寧語が起こる文にのみ投射すると仮定している。一方で、MP から SRP までの投射は、主要部が発音されない場合も基本的には常に投射すると考えておく。例えば、副詞の「やっぱり」は「やっぱり太郎が来た」のように、MP 主要部が音声的具現化を受けない場合でも生起できる。「やっぱり」は MP を修飾する副詞であるから、M 主要部が発音されない時も MP は投射していると考えられる[34]。同様に、ForceP・EP・SRP も常に投射すると想定する。

本節の議論を終える前に、他の類似分析との比較を行う。まず、澤田 (1993) は、「重層モデル」と呼ばれる階層構造を提案している。この階層構造は、(120)のように、VP-S^0-S^1-S^2 の四層からなる。VP は動詞句、S^0 は時制要素が現れる層、S^1 はモダリティ要素が現れる層、そして S^2 は終助詞が現れる層である。

[34] ただし、前節の最後でも触れたように、補文標識の「か」は TP を補部に選択するので、「か」節（埋め込み節）においては、MP は投射しない。

(120)



（澤田（1993: 167））

このモデルでは、すべての終助詞が S^2 に現れることになるが、本論のここまでの議論からも明らかなように、終助詞ごとに現れる構造位置は異なってくるので、単一の投射と関係付けることはできない。「わよね」のように複数の終助詞が生起できること、そして、終助詞間の順序関係を説明するにあたっては、(120)の「重層モデル」は適していないと考えられる。

また、終助詞のカートグラフィー研究を行った遠藤（2010）では、Cinque (1999) のカートグラフィーに基づき、終助詞の「ね」・「よ」・「な」・「わ」の階層関係について議論されている。Cinque (1999) は、副詞の順序関係に関する事実から、(121)のような構造が存在すると主張している。（TP より下位の階層構造にはここでは省略している。）上から、発話行為（speech act）に関する句、評価（evaluative）に関わる句、証拠性（evidential）に関わる句、認識性（epistemic）に関する句が T の上位に投射する。（なお、Mod は Modal の略である。）

(121) [*frankly* $\text{Mood}_{\text{speech act}}$ [*fortunately* $\text{Mood}_{\text{evaluative}}$ [*allegedly* $\text{Mood}_{\text{evidential}}$ [*probably* $\text{Mod}_{\text{epistemic}}$ [*once* T (Past) …　（Cinque (1999: 106) より一部抜粋）

遠藤（2010）は、終助詞の「ね」・「よ」・「な」・「わ」の意味機能に着目し、意味的観点から「ね」は Speech-Act、「よ」は Evaluative、「な」は Evidential、「わ」は Epistemic に現れると主張している。(122)に示す通りである。

(122) [[[[[…….] わ $_{\text{Epistemic}}$] な $_{\text{Evidential}}$] よ $_{\text{Evaluative}}$] ね $_{\text{Speech-Act}}$]

しかしながら、この分析には少なくとも二つの問題がある。一つには、終助詞の語順を正しく導くことができない。遠藤（2010）の分析は、(123)a,b が非文となることを説明できない。(122)によると、「な」は「よ」や「ね」より低い投射に現れるので、(123)a,b における語順は容認されるはずである。また、遠藤（2010）の分析が正しければ、(123)c は非文になることが期待される。この分析では、「よ」は「な」より低い構造位置に現れるので、「なよ」の

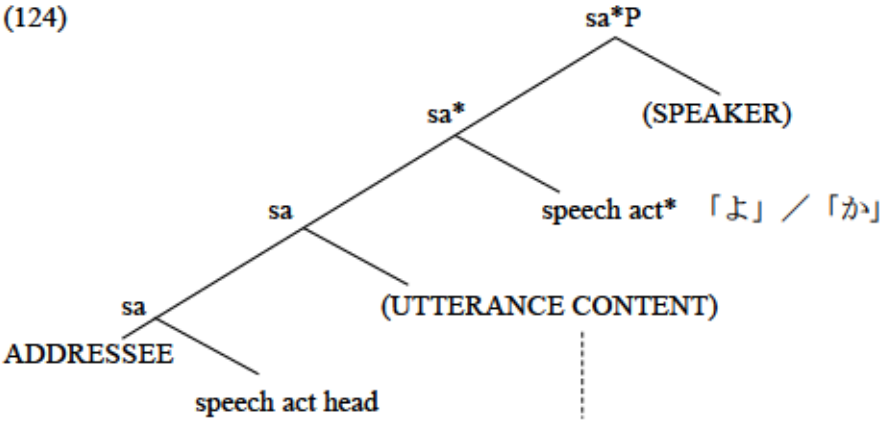
語順が許容され、「よね」の語順は容認されないはずである[35]。

(123) a. *太郎は学生だなよ。
b. *太郎は学生だなね。
c. 太郎は学生だよな。

もう一つの問題点は、Cinque (1999) のカートグラフィーを前提としている点である。Cinque のカートグラフィーは、日本語のデータを基にしたものではないので、(121)の階層構造が日本語にも当てはまるという保証はそもそもない。遠藤 (2010) の分析を正当化するには、まず(121)の階層構造が日本語にも存在することを経験的な事実に基づいて示しておく必要がある。日本語は自由語順を許す言語なので、副詞の現れる順序によって階層構造を追究することには困難が伴う。例えば、時制を修飾すると考えられる副詞の「昨日」と話し手のムードを表す副詞の「幸運にも」は、「幸運にも昨日彼に会えた」と「昨日幸運にも彼に会えた」の両文が容認されることからも分かるように、語順の制限が観察されない。Cinque (1999) の階層構造が正しければ、「幸運にも」は「昨日」の左側に現れる語順でのみ容認されるはずであるが、事実としては副詞の語順に制限が課されない。この事実は、日本語で Cinque (1999) の階層構造を検証することが困難であることを示している[36]。

終助詞に関する異なる分析の可能性として、Tenny (2006) の Speech Act Phrase 仮説が挙げられる。Tenny (2006) は、話し手と聞き手に関わる階層として Speech Act Phrase を仮定している。(124)に示されるように、Speeach Act Phrase には三つの項が現れる。最上位には発話行為の動作主(agent)にあたる SPEAKER が表示される。さらに、目標(goal)として ADDRESSEE、主題（theme）として UTTERANCE CONTENT が表示される。Tenny (2006: 263) では、終助詞の「よ」と「か」はいずれも speech act*に生起すると想定されている。

(124)

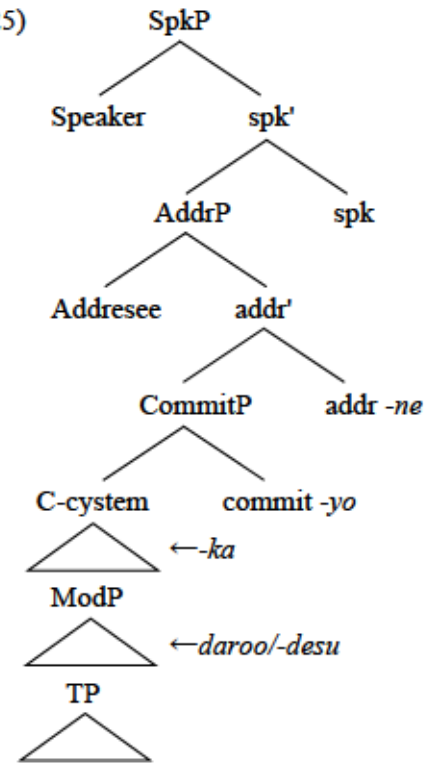


[35] 遠藤 (2010: 73) は、終助詞が複数共起した時の語順を説明可能であると論じているが、実際には説明できていないように思われる。
[36] Cinque (1999) の副詞の分析に対する反論については、Ernst (2002) や Gelderen (2013) を参照されたい。

しかし、この分析では「よ」と「か」が共起する「本当かよ」のような文をどのように扱うかについて疑問が生じる。仮に、speech act head に「か」、speech act*に「よ」が現れるとしよう。このようにすれば、共起関係を導くことができる。ところが、そのように仮定すると、今度は「本当だよね」のように、「よ」と「ね」が共起できることが問題となる。speech act*の上位には主要部は存在しないので、「ね」が起こる位置が存在しないことになる。

また、第 1 章で言及したように、Miyagawa (In press) が丁寧語や終助詞の統一的な分析を試みている。Miyagawa (In press) は、Rizzi (1997) の C-system の上位に Speaker-Addresee Phrase と CommitP という投射を立てている。Speaker-Addresee Phrase は話し手と聞き手に関わる投射であり、(125)のように、話し手に関わる Speaker Phrase と聞き手に関わる AddrP から構成される。AddrP 主要部には「ね」が起こる。CommitP は、命題内容の信憑性に関して話し手が聞き手に対して持つ責任（commitment）に関わる投射である。主要部には「よ」が起こる。

(125)



本分析と Miyagawa (In press) の分析の大きな相違点は、丁寧語の扱い方にある。Miyagawa (In press) は、Koizumi (1993) に従い、「だろう」は ModP の主要部に起こるとしている。ModP は、本論で言う MP の投射と同じである。Miyagawa (In press) は、Mod 主要部には、丁寧語 B の「です」も現れるとしている（「太郎は面白かったです」）。しかしながら、(92)a で見たように、「です」は MP 主要部の「っけ」と共起できるので、「です」を MP の主要部であると見ることはできない（「昨日は暑かったですっけ」）。さらに、Miyagawa の分析では、丁寧語は、(125)の階層構造において、（TP の下位または ModP から）SpkP の主要部に移動すると仮定されている（Miyagawa (2012, 2017) では、丁寧語自体は移動せず、アロキュティ

ブ探査子が SA に移動すると仮定されている一方で、Miyagawa (In press) では、丁寧語が（TP の下位または ModP から）spk への主要部移動を起こすと仮定されている）。

たしかに、丁寧語は発話行為 (speech act) に関与するので、同じく発話行為に関係する「よ」や「ね」が現れる投射と関係を持つように感じられる。日本語学においても、丁寧語は「よ」や「ね」と同じ対人的モダリティに分類される。一方で、「だろう」は対事的モダリティに分類される。このような意味機能的な観点を踏まえると、丁寧語は「よ」や「ね」が現れる投射と何らかの統語的な関係を持つと考えられないわけではない。そのような分析では、丁寧語 A や丁寧語 B は EP や SRP（あるいは SAP）に移動することになる。ここで、丁寧語 B が TP と MP の中間に基底生成されることを思い出して欲しい。丁寧語 B の EP・SRP への主要部移動を仮定する分析では、TP と MP の中間に丁寧語 B が基底生成されるのはなぜかについて、追加の説明が必要になる。丁寧語 B の移動先が ForceP より上位となる点は説明可能であるが、丁寧語 B の基底生成が TP と MP の中間となる点については疑問が残る。本論の分析では、TP と MP の間に AddrP というアロキュティブ標識を認可する投射を立てており、丁寧語はそれより上位の投射と関係を持たないと想定しているため、この点は問題とならない。（丁寧語 A の「です」・「ます」は、それぞれコピュラと動詞としての統語特性を有しているので、TP の下位に基底生成される。）なお、本論では、Speech Act Phrase という投射を立てていない。Speech Act Phrase は、その名称の通り、発話行為に関する投射である。発話行為に関わる要素には、「よ」や「ね」以外にも、丁寧語が含まれる。SPA という投射を立てると、（CP 領域において下位の構造位置で認可される）丁寧語もこの投射となんらかの関係を持つ含みが生じてしまうため、誤解を避けるために、本論では、SPA というラベルは用いていない。

一方で、Miyagawa (In press) と本分析には共通点もある。まず、ラベル名に違いはあれど、終助詞の「よ」と「ね」に対して専用の投射を仮定している点は本論の仮定と同一であり、本質的な違いはない。また、Miyagawa (In press) は、疑問を表す終助詞の「か」は C-system に現れるとしている。そうすると、Miyagawa の分析では、TP の上位には ModP・CP・CommitP・AddrP が存在することになる。これは、基本的には本論の MP・ForceP・EP・SRP の投射に対応すると考えてよいであろう。分析の詳細は異なるが、本分析と Miyagawa (In press) の分析は、丁寧語の分析を除いては、軌を一にしているということができる。

最後に、Rizzi (1997) の提案するカートグラフィーとの比較を行う。Rizzi (1997) によると、イタリア語の左方周縁部は、(126)に示しているような [ForceP [TopP* [FocP [Top* [FinP…]]]]] の階層構造を持つ。ForceP は節のタイプの指定に関わる投射、TopP は題目（トピック）を認可する投射、FocP は焦点化に関わる投射、FinP は節の定性に関わる投射である。TopP の右肩の「*」は TopP が多重生起可能であることを示している。

(126) $[_{\text{ForceP}} [_{\text{TopP*}} [_{\text{FocP}} [_{\text{TopP*}} [_{\text{FinP}} [_{\text{TP}} \ldots\ldots]]]]]]$

日本語のカートグラフィー研究では、(126)の構造を前提とした議論が展開されることがある（遠藤・前田 (2020) などを参照）。しかしながら、Rizzi (1997) の階層構造は、イタリア語

のデータを軸に組み立てられたものなので、日本語でも同じ階層構造が成り立っているとは限らない。反対に、日本語のデータによって動機付けられた分離 CP 仮説をもとに他の言語を見ると異なる知見が得られる可能性はあるので、他言語との比較が可能な形で、日本語のみのデータに基づいて分離 CP 仮説を追究することには相応の価値があると考えられる。本論では、(126)を前提とせず、日本語のデータに基づいて分離 CP 仮説を追究している。本節までに、丁寧語、推量辞、終助詞の「わ・よ・ね」などに関わるデータを見てきたが、Rizzi (1997) の(126)の構造では、それらのデータを捉えることは困難である。例えば、丁寧語は、聞き手への尊敬を表す機能を持つが、節の定性を決める機能・題目を表す機能・焦点化機能・節のタイプを指定する機能は持たないので、(126)の構造では適切に捉えることができない。日本語の丁寧語・モダリティ要素・終助詞の統語特性を捉えるには、FinP・TopP・FocP のかわりに、AddrP・MP・EP・SRP を立てる必要がある。

本論では、日本語の CP 領域に FinP・TopP・FocP を仮定しない。まず、イタリア語では節の定性は CP 領域で決定するが、日本語では「た」と「て」の対立に見られるように、TP の領域で決まるので、別個に FinP のような投射を CP 領域に仮定する必要はない。（補文標識の「の」が Fin 主要部であると想定されることもあるが、本論では、「の」は MP の主要部であると仮定する。詳しくは本論文の第 4 章を参照されたい。）

次に、日本語では、TopP は投射しないと仮定する。Kishimoto (2009) が論じているように、日本語における「は」は題目を表し、CP 領域への題目化移動を引き起こす。本論では、題目化移動は ForceP 指定部をターゲットとする移動であると仮定する。その論拠となるのは、「か」節のデータである。前節の最後で述べたように、埋め込み節を導入する「か」は、AddrP や MP を補部に取ることはできず、TP を直接補部に取る。

(127)　$[_{\text{ForceP}}[_{\text{TP}}\ \ldots.]\ \textit{-ka}]$

(128)に示されるように、「は」でマークされる「花子は」は「か」節に生起可能である。このことから、「は」は AddrP や MP の要素でないことがわかる。

(128)　太郎は [<u>花子は</u>帰ったか] 聞いた。

このデータに基づいて、本論では、日本語において、題目化は ForceP の指定部をターゲットとすると想定する[37]。

(129)　$[_{\text{ForceP}}\ \textit{-wa}_{i}\ [_{\text{TP}}\ \ldots t_{i} \ldots]\ \textit{-ka}]$

これに対して、岸本 (2011) は、題目を MP の要素であるとしている（Kishimoto (2006a, 2009) も参照）。しかし、埋め込みの「か」節に MP が投射しないとする本論の仮定が正し

[37] ただし、機能面を考慮に入れると、題目化が節のタイプの指定に関与しているとは考えにくい。この点については、さらなる検討が必要である。

ければ、(128)において題目化が可能であるという事実は、題目化が MP をターゲットとしないことを示している。

なお、岸本 (2011) は、B 類従属節と C 類従属節への埋め込みに関するデータから、日本語の題目は MP の指定部に移動すると主張している。南 (1974, 1993) は、日本語の従属節を A 類から D 類までの四つに分類している（尾上 (2001) や田窪 (1987, 2010) も参照）[38]。A 類は従属度の最も高い節を形成し、少数の統語要素を収容することができる。反対に、D 類は従属度の最も低い節であり、あらゆる統語要素を収容することができる。題目の構造位置は、B 類従属節と C 類従属節への埋め込みに関わるデータから特定できる。ここでは B 類従属節として「ように」、C 類従属節として「が」を用いる。(130)では、いずれも時制要素の「た」に接続している。

(130) a. さっき言ったように、明日は雨だ。（B 類）
b. さっき言ったが、明日は雨だ。（C 類）

(131)は、「ように」は MP の主要部の「だろう」を収めることができず、「が」は収めることができることを示している。また、(132)は、題目の「は」は B 類従属節には現れることができず、C 類従属節には現れることができることを示している。(131)と(132)から、MP の主要部である「だろう」と題目の「は」が統語的に並行的な振る舞いを示すことが分かる。岸本 (2011) は、このような観察から、題目は MP の指定部に移動すると主張している。

(131) a. *さっき太郎が言っただろうように、明日は雨だ。（B 類）
b. もう太郎が言っただろうが、明日は雨だ。（C 類）

(132) a. *さっき太郎は言ったように、明日は雨だ。（B 類）
b. 太郎は言ったが、次郎は言わなかった。（C 類）

本論の分析では、「だろう」は MP の要素である一方で、題目化は ForceP をターゲットとする移動である。(131)と(132) のデータは、「だろう」と題目がともに C 類従属節に生起可能であることを示すものであるが、そうであるからといって、「だろう」と題目が同一の投射と関係付けられることを示す証拠とはならないであろう。例えば、C 類従属節が ForceP を補部に選択できるのであるとすると、ForceP および MP に関わる要素が生起可能であるということになる。このため、(131)と(132)のデータは、本分析にとっては大きな問題とならない。

ちなみに、(133)に示すように、B 類従属節と C 類従属節には丁寧語は表出することができる。つまり、これらの従属節には AddrP を投射することが可能である。B 類従属節には MP と関係する「だろう」が現れることができない。一方で、AddrP と関係する丁寧語は表出できる。したがって、B 類従属節を導入する接続詞は、(134)に示しているように、AddrP または TP を補部として選択するということができる。（日本語の従属節に関する異なる分析に

[38] 従属節の分類の研究史については、Iori (2017) を参照。

ついては Endo and Haegeman (2019) を参照されたい。）

(133)　a. さきほど申しましたように、明日は雨です。（B 類）
　　b. さきほど申しましたが、明日は雨です。（C 類）

(134)　-*yooni* 'as' [TP or AddrP ____]

最後に、FocP については、日本語では顕在的な焦点移動（focus movement）が観察されないので、直接的な証拠を得ることは非常に困難であると考えられる。イタリア語では、焦点化を受ける要素が左方周縁部に顕在的に移動するので、FocP という投射を経験的なデータに基づいて動機付けることができる。しかしながら、日本語の顕在的移動はかき混ぜ移動や題目化などに限られ、焦点化に特化した移動は存在していない。また、FocP の主要部に現れるような統語要素も特に見当たらないので、FocP を仮定する必要性はない[39]。（Hiraiwa and Ishihara (2012) は、「のだ」文や分裂文におけるコピュラの「だ」が FocP の主要部であると主張している。これに対する反論は第 4 章で述べる。）

このように、本論では、日本語の右方周縁部に FinP・TopP・FocP の投射を仮定しない。ただし、日本語の右方周縁部は、イタリア語の左方周縁部と完全に異なっているわけではなく、どちらの言語にも平叙文・疑問文・命令文のような節のタイプを指定する ForceP が存在している。実際、日本語には「か」や命令の専用形式が存在する。節のタイプは日本語やイタリア語だけでなくあらゆる言語で区別されるので、ForceP は普遍的に存在する投射である。

6. 終助詞の「もん（もの）」と「こと（感嘆）」

前節までに見たように、日本語の CP 領域は、[SR [EP [ForceP [MP [AddrP …]]]]] の五階建ての構造を持つ。本節では、この構造を立てることで終助詞の「もん（もの）」と感嘆文を形成する「こと」の統語的特性を適切に捉えられるようになることを示す。これらの終助詞は、分離 CP 仮説に関する文献ではあまり議論されることがない終助詞である。本論で示した分離 CP 仮説に基づき、「もん（もの）」は M から E、「こと（感嘆）」は M から SR まで主要部移動することを示す。

まず、終助詞の「もん（もの）」は、発話内容の理由付けをする際に使用される。例えば、ある話者が「太郎は英語ができるよ」と発話し、別の話者が「だってハーバード卒だもん」と発話したとしよう。このとき、二文目の「もん」で結ばれる文は、一文目の「太郎は英語ができるよ」という文の理由付けとなっている。終助詞の「もん（もの）」は、(135)のように、終止形接続（「優秀だ」）である。連体形の「優秀な」には接続できない。

(135)　優秀｛だ／*な｝もん（もの）。

[39] ただし、Saito (2020) や斎藤 (2021) は、異なる角度から日本語に FocP が存在することを示唆している。さらに、斎藤 (2021) は、日本語がイタリア語と同一の階層構造を有していると主張している。

形式の上で「もん（もの）」に類似したものに「ものだ」と「ものか」があるが、(136)に示しているように、これらは連体形接続なので異なる形式である。

(136) a. 優秀｛*だ／な｝ものだ。
b. まさかあいつが優秀｛*だ／な｝もんか！

ここから、AddrP から SRP までのそれぞれの投射との関係を見ていく。はじめに、丁寧語との共起関係を見ると、終助詞の「もん（もの）」は、AddrP に基底生成される丁寧語 B の「です」との共起が可能である。(137)a では、「です」が終助詞より左側に現れるときに、文法的と判断されている。その反対の語順では容認されない。言うまでもなく、(137)b のように、「もん」は、TP の下位に生じる丁寧語 A とも共起できる（Tsunoda (2020: 110) も参照）。したがって、終助詞の「もん（もの）」は、AddrP を補部に取ることのできる主要部である。終助詞の「もん（もの）」は丁寧語が現れない文にも生じるので、(138)のように、AddrP または TP を補部に取ると規定する。

(137) a. だって、すごい｛<u>です</u>もん／*もん<u>です</u>｝。
b. だって太郎がそう言って<u>ました</u>もん。

(138) *-mon(o)* 'PRT' [AddrP or TP _____]

終助詞の「もん（もの）」は、(139)a に見られるように、MP の主要部に起こる推量辞の「う」と共起しない（日本語記述文法研究会（編）(2003: 270)）[40]。推量を表す副詞の「多分」が現れた(139)b は容認されるので、(139)a の不適格さは「もん（もん）」が持つ語彙的な意味には還元できない。

(139) a. *だって優秀ではなかろ<u>う</u>もの。
b. だって<u>多分</u>優秀ではないもの。

「もん（もの）」は、現れることのできる節のタイプにも制限がある。(140)に示すように、「もん（もの）」は、平叙文にしか現れることができない。疑問を表す「か」と共起することはできない。本論では、疑問を表す「か」を ForceP の主要部であると仮定している。(140)において、「か」との共起が許されないことから、「もん（もの）」は、ForceP との関係を持つ語であるとみなすことができる。

[40] ここでは、日本語記述文法研究会（編）(2003: 270) が示している容認性判断に従っている。ただし、「もん」と推量辞の共起を許容する話者もいる。これが方言によるものなのか、日本語記述文法研究会（編）(2003: 270) の記述に問題があるのかについては、議論の余地がある。

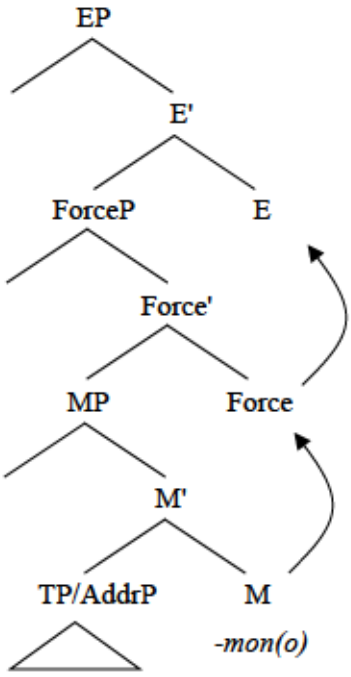
(140)　a. 太郎は学生だもん。
　　b. *太郎は学生だもんか？

EP と SRP との関係を確認すると、「もん（もの）」は、(141)に示しているように、EP の主要部に対応する「よ」とは共起できず、SRP の主要部に対応する「ね・な」とは共起できる。そうすると、「もん（もの）」は E とも対応するということができる。

(141)　a. *優秀だもんよ。
　　b. 優秀だもん｛ね／な｝。

ここまでの観察に基づき、終助詞の「もん（もの）」は、(142)の樹形図で示されるように、M に生成されたのちに、E まで移動すると仮定する。

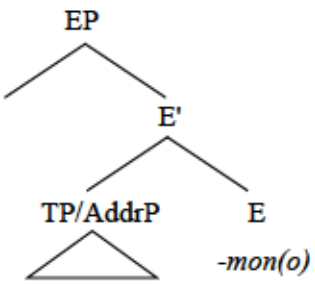
(142)



「もん（もの）」が MP、ForceP、EP に対応する他の語彙と共起できないのは、「もん（もの）」が M から E まで主要部移動するからである。2.1 節で述べたように、主要部の移動先は音声的に空になっていなければならないので、音声を持つ他の語彙とは共起できない。2.1 節で見た *should* の主要部移動と同じように、統語部門で移動していると考えておく。

他に考えられる代案として、「もん」は M から E に移動するのではなく、E に基底生成される可能性もある。(143)のように、TP または AddrP を補部に取るため、MP や ForceP の主要部と共起できないと考えられないこともない。

(143)



しかしながら、副詞の「やっぱり」と「多分」の修飾から、「もん」が起こる文にも MP と ForceP が投射することが示唆される。4 節で触れたように、「やっぱり」は MP を修飾する副詞である。(144)のように、「やっぱり」は「もん」との共起が可能である。

(144)　このせんべい、何枚でも食べたくなるわ。やっぱり美味しいもん。

「もん」が現れる文に MP が投射しないのであるとすると、「やっぱり」の修飾先が存在しないことになるので、(144)は非文になることが期待される。一方、本論で提案している主要部移動による分析では、「もん」の移動の経由地点として MP が存在しているので MP 副詞による修飾が可能である。

また、(139)b で見たように、「もん」は推量を表す「多分」との共起が可能である。「多分」は MP の投射と ForceP の投射の両方を修飾していると考えられる。まず、「多分」は話し手の推量を表す副詞なので、MP を修飾していると見ることができる。加えて、(145)に示されるように、「多分」は疑問文や命令文には起こらない。平叙文でのみ現れることができる。つまり、「多分」は現れうる節のタイプに制限が課されるということである。このことから、「多分」は MP だけでなく ForceP も修飾する要素であると考えられる。

(145)　a. *多分太郎は来ましたか？
　　b. *多分早く走れ！

MP と ForceP を修飾すると考えられる副詞の「多分」は C 類従属節に現れることができる。(146)に示すように、「多分」は C 類の「し」が導入する従属節の内部に収まる。一方で、EP の主要部である「よ」は従属節内に現れることができない。

(146)　a. 太郎も多分来るし、次郎も多分来るし、花子も多分来る。
　　b. *太郎も来るよし、次郎も来るよし、花子も来るよ。

このことから、「多分」は MP と ForceP を修飾する一方で、EP を修飾する副詞ではないということがわかる。ここまでの観察から、「多分」の生起条件として MP と ForceP の両方が投射していなければならないと仮定する。そうすると、「もん」が「多分」と共起できるということは、「もん」が現れる文には MP と ForceP が投射していなければならないというこ

とになる。これらのことから、(143)の分析よりも(142)の分析の方が妥当である。

次に、感嘆表現の「こと」の構造について考察を加える。「こと（感嘆）」は、(147)b のように、終止形に接続する。「こと（感嘆）」は上昇調の「わ」と同じように、主に女性話者によって使用される。近年では上昇調の「わ」を発話する話者は減少傾向にあるが、漫画やアニメ等では現在でも時折使用される。

(147)　優秀｛だ／*な｝こと。

類似した形式に「ことだ」があるが、(148)に示すように、終止形には接続できず、連体形に接続する。このため、「こと（感嘆）」とは異なる形式である。

(148)　優秀｛*だ／な｝ことだ。

AddrP から SRP までの要素との共起関係を見てみると、(149)のデータから、「こと（感嘆）」は、「です」以外の要素と共起できないことがわかる。「こと」は AddrP に移動する「です」と共起できるので、AddrP よりも高い投射と対応していることが示唆される。（「こと（感嘆）」が丁寧語と共起可能であることは、Tsunoda (2020: 111) も記述している。）(149)b は MP、(149)c は ForceP、(149)d は EP、(149)e は SRP との対応関係を確認するために提示したデータである[41]。

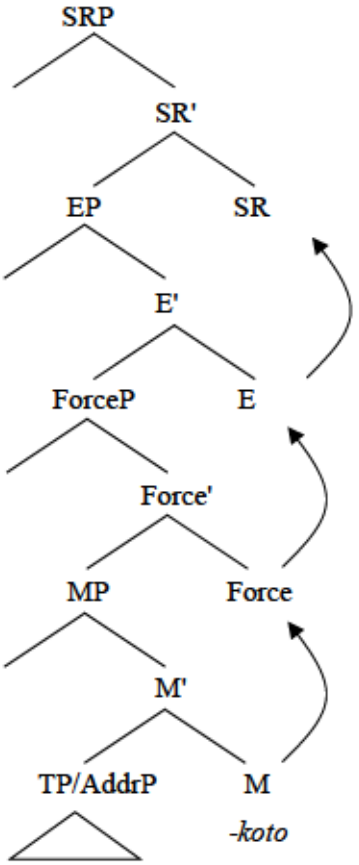
(149)　a. 優秀<u>です</u>こと。
　　b. *優秀であろ<u>う</u>こと。
　　c. *優秀だこと<u>か</u>。
　　d. ?*優秀だこと<u>よ</u>。　　（cf. 優秀なこと（だ）よ。）
　　e. ?*優秀だこと<u>ね</u>。　　（cf. 優秀なこと（だ）ね。）

「こと（感嘆）」は、話し手が感じたことを表出するときに発話されるので、話し手の認識や判断が関わってくる。このため話し手のモダリティに関わる MP と対応し、推量辞の「う」とは共起できない。ちなみに、推量辞は、感嘆文に現れることが可能である（e.g.「なんて賢いんだろう」）（Ono (2006); 田中 (2020)）。また、「こと（感嘆）」は、感嘆文専用の形式なので、ForceP と関わる要素であると考えておいて問題ない。そして、「こと（感嘆）」は、「よ・ね」とも共起できない。（「ことだ」文では「よ・ね」と共起できる。）

[41] 形容動詞の「優秀だ」を「優しい」などの形容詞に替えると、「優しいことよ」や「優しいことね」のように、容認可能となる。しかし、形容詞は連体形と終止形の区別を持たないため、形容詞（イ形容詞）を用いると、終助詞の「こと」と共起しているのか、モーダル述語の「ことだ」と共起しているのか判別できなくなる。「優しいことよ」や「優しいことね」のような文が容認されるのは、モーダル述語の「ことだ」からコピュラの「だ」が脱落した文であるからであると考えられる。終助詞の「こと」とモーダル述語の「ことだ」を区別するためには、連体形と終止形が形態的に区別される形容動詞を用いて判断する必要がある。

以上を考慮して、本論では、「こと（感嘆）」の構造として(150)の樹形図を仮定する。「こと（感嘆）」は MP の主要部として外的に併合し、主要部移動によって SR まで移動する。このため、(149)のように MP から SRP の他の主要部とは共起できない。

(150)



補部選択については、丁寧語と共起できることから、(151)に規定されるように、「こと（感嘆）」は Addr または TP を補部に取ると考えられる[42]。

---

[42] 日本語の終助詞には、他にも「ぞ」、「ぜ」、「とも」、「さ」などがある。「ぞ・ぜ」については、(i)と(ii)に示すように丁寧語や「よ」との接続に個人差がある（キャラ語尾の用法も関係していると考えられる。）。このような特殊な事情があるため、「ぞ」と「ぜ」の統語特性については深く立ち入らない。

(i) a. %そうですぞ。　b. %そうですぜ。

(ii) a. %行くぞよ。　b. %行くぜよ。

「とも」については、日常的に使用される頻度が低く、判断が判然としないこともあり、本論では考察の対象から外している。

(iii) それでいいとも。

最後に、終助詞の「さ」については、(iva)のように、MP の主要部と共起できる。(ivb-d)のように、Force から SR までの主要部とは共起できないので、Force に基底生成され、SR への主要部移動を起こすと想定する。（ただし、長崎方言などの方言では、「そうさね」のように、「さ」と「ね」が共起した言い方が容認される。）

(iv) a. 正解だろうさ。　b. *あいつは優秀さか。

c. *あいつは優秀さよ。　d. *あいつは優秀さね。

(151)　*-koto* 'PRT' [AddrP or TP _____]

ここまで標準語のデータを見てきたが、最後に、本論で提案した五階建ての階層構造を仮定することで方言の終助詞の統語特性も適切に捉えられることを補足しておきたい。ここでは、長崎方言の終助詞「ばい」のデータを見る。終助詞の「ばい」は、標準語の終助詞の「よ」に似た意味を持つ。「よ」と同じく、話し手が知っていて聞き手が知らないことを、聞き手に知らせる役割を担う助詞である（坪内 (2009: 89)）。(152)のように、「ばい」を用いることで、聞き手の知らないこと、ここでは、「太郎が来ない」ことを伝えることができる。

(152)　太郎は来んばい。
「太郎は来ないよ」

しかし、「ばい」は「よ」とは異なる統語特性を有している。(153)a に示されるように、「ばい」は、推量辞に接続できない（木戸 (2013)）。標準語の「よ」であれば、「太郎は来るだろうよ」のように、「だろう」に付くことができる。このように、「ばい」と「よ」は、意味的には類似しているが、統語的には区別されなければならない。

(153)　a. *太郎は来るやろうばい。
「太郎は来るだろうよ」
b. 太郎はかっこよかですばい。
「太郎はかっこいいですよ」

「ばい」は推量辞に接続することはできないが、(153)b からわかるように、丁寧語の「です」には接続できる。「ばい」は、AddrP を補部に選択するので、それより高い構造位置にある MP を補部に取れないのである（cf. Kido (2015); 長野・島田 (2019)）。「ばい」は、推量辞以外にも、(154)a に見られるように、ForceP の主要部の「か」とは共起できない[43]。「ばい」は平叙文では用いられるが、疑問文や命令文では使用できない（e.g. *走ればい）。つまり、「ばい」は節のタイプを指定する働きを持つということができる。また、(154)b のよう

ただし、終助詞の「さ」は、MP の下位に投射される AddrP の要素とは共起できない。(v) は終助詞の「さ」が丁寧語と共起できないことを示している。

(v)　*彼は賢いですさ。

このことには、終助詞の「さ」が持つ語彙的な意味が関与していると考えられる。終助詞の「さ」は、主に親しい関係にある人物に対して使用され、そうでない相手に対しては使用されにくい。丁寧語が使用されるのは目上の人物やそれほど親しくない人物に対してであるから、終助詞の「さ」とは共起できないものと考えられる。

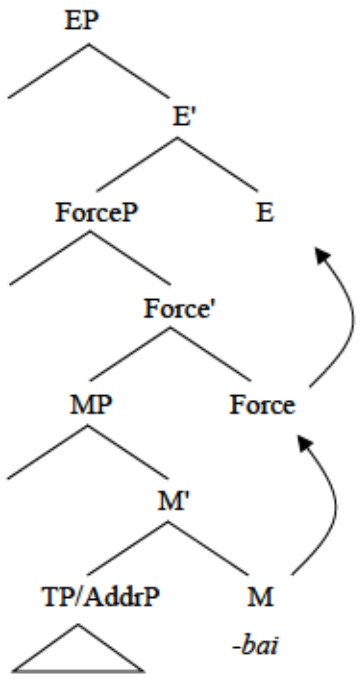
[43] 「*太郎は来るばいか」は「太郎は来るもんか！」のような修辞疑問文としても解釈できない。

に、終助詞の「よ」と共起できない。この共起制限から「ばい」は EP とも関与していることが窺える。一方で、(154)c は、「ばい」が終助詞の「ね」とは共起できることを示している。本論では、「ね」は SRP の主要部であると仮定している。「ばい」と共起可能であるということは、「ばい」が SRP の下位の投射に位置付けられることを示唆している。

(154) a. *太郎は来るばいか？
b. *太郎は来るばいよ。
c. 太郎は来るばいね。

「ばい」が推量辞や終助詞の「か」や「よ」と共起できないという言語事実は、「ばい」が MP から EP への主要部移動の適用を受けると仮定することで説明できる。(155)に派生を示している。この移動は、標準語の「もん（もの）」の主要部移動と等しい。「もん（もの）」でも、モダリティ要素・節のタイプを指定する働きを持つ要素・「よ」との共起が不可能である。主要部移動の移動先は音声的に空になっていなければならないので、共起制限が生じる。「ばい」・「もん（もの）」は SRP までは移動しないので、終助詞の「ね」とは共起できる。また、「ばい」は丁寧語と共起できるので、「もん（もの）」と同じく、TP または AddrP を補部に選択しているということができる。このように、「もん（もの）」と「ばい」は意味的には異なる要素であるが、統語的には同一の振る舞いを示す。

(155)



代案として、「ばい」がはじめから E に現れる可能性もあるが、副詞の「やっぱり」と「多分」の共起関係からこの可能性は排除される。先で見たように「やっぱり」は MP、「多分」は MP・ForceP に関係付けられる副詞なので、「ばい」がこれらの副詞と共起できるということは、MP と ForceP が投射していることを示している。

(156)　a. やっぱり来んやったばい。
　　b. 多分来るばい。

ここでの議論から、本論の提案が標準語だけでなく方言の分離 CP 構造にも応用可能であることが示唆される。

以上のように、五階建ての分離 CP 仮説を仮定することで、「もん（もの）」や「こと（感嘆）」、長崎方言の「ばい」のような統語的に特殊な振る舞いを示す要素の特性を捉えることが可能になる。「もん（もの）」と「こと（感嘆）」の統語特性は、Rizzi (1997) の [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP…]]]]] の階層から捉えることはできない。節のタイプの指定に関わる ForceP と関与するという点は Rizzi (1997) の枠組みでも説明できるが、推量辞や丁寧語との共起に関しては説明が困難である。なぜなら、推量辞や丁寧語は、節の定性の決定・題目化・焦点化・節のタイプの指定のいずれの機能も持たないからである。Rizzi (1997) の階層をそのまま日本語に当てはめようとすると、推量辞や丁寧語との共起関係のことを脇に置いて議論を進めることになりかねない。生成文法の究極の目標の一つは普遍性の解明であるけれども、ある言語のデータに基づいて提案されたある仮説が他の言語においても普遍的に成り立つ保証はない。日本語のカートグラフィー研究では [ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP…]]]]] の階層が仮定されることが一般的になりつつあるが、それによって無視せざるをえない言語事実が出てくることも確かである。「もん（もの）」と「こと（感嘆）」に関する言語事実はその一例である。[ForceP [TopP* [FocP [TopP* [FinP…]]]]] の階層で説明できない言語事実は、新たな理論を構築する上で重要なデータとなる。

7. まとめ

本章では、日本語における分離 CP 仮説について考察を加えた。CP 領域には、[SRP [EP [ForceP [MP [AddrP…]]]]] が投射する。AddrP は、丁寧語の認可に関わる投射である。日本語には、Addr に生成される丁寧語 B と TP の下位に生成される丁寧語 A の二種類がある。時制要素の右側に現れる「です」は Addr に基底生成される。TP の下位に基底生成される「ます」と「です」は、それぞれ vP 主要部、CopP 主要部に起こるが、主要部移動によって Addr に移動する。MP は、話し手のモダリティに関わる投射である。主要部には推量辞の「う」や終助詞の「っけ」が生じる。ForceP は、節のタイプの指定に関わる投射であり、主要部には疑問を表す「か」が現れることができる。[ForceP [MP [AddrP…]]] の階層関係の妥当性については、終助詞の「っけ」と「わ」に関するデータから支持が得られる。終助詞の「っけ」は、MP の主要部であり、Addr に生成される「です」の右隣、Force に生成される「か」の左隣に生じる。また、終助詞の「わ」は、M から Force への移動を起こす語であり、「です」の右隣に生起する。これらの要素の線形順序は、[ForceP [MP [AddrP…]]] の階層関係が成り立っていることを示唆している。EP は節全体の意味の強化に関わる句であり、主要部には「よ」が起こる。SRP の主要部には聞き手に応答を要求する機能を持つ「ね・な」が現れる。このような五層の分離 CP 仮説を仮定することで、これまでの研究ではあまり議論されていない

終助詞の「もん（もの）」や「こと（感嘆）」の統語的特性を捉えることが可能となる。「もん（もの）」はMからE、「こと（感嘆）」はMからSRに主要部移動すると論じた。

最後に、本章で扱った文末要素と階層構造との関係を一覧で示す。行は文末要素、列は階層構造を示している。また、✓は文末要素の生起位置、→は主要部移動を表している。

	構造位置					
	Lower than TP	AddrP	MP	ForceP	EP	SRP
T-*desu*		✓				
-o/-kke			✓			
-ka/-e, -ro-/-na（禁止）				✓		
-yo					✓	
-ne/-na						✓
-desita, -masita	CopP, vP →					
-wa			→	→		
-mon(o), -bai			→	→	→	
-koto			→	→	→	→

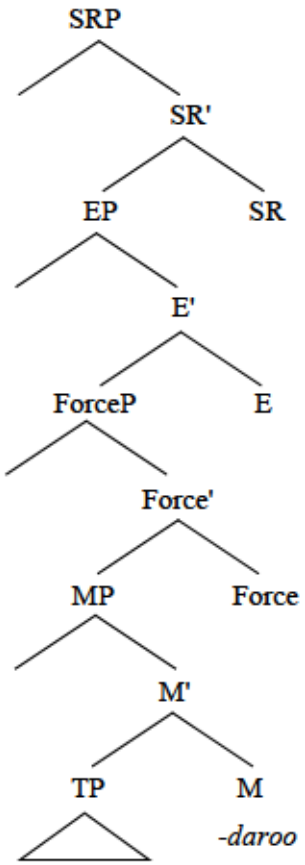
第 3 章　MP と補部選択

1. はじめに

本章では、MP の投射と関係する語彙の統語特性を記述し、それぞれの異同について考察する。（本論で言うところの「モダリティ」という概念の定義については、第 1 章の 4 節を参照。）第 2 章では、MP の主要部として推量辞の「う」を取り上げたが、本章では、MP の主要部には、推量辞の「う」以外に、推量辞の「だろう」、意志・勧誘を表す「（よ）う」、非命題確認要求表現の「じゃん・やん」、否定推量を表す「まい」が置かれると主張する。さらに、M 主要部要素と丁寧語の共起関係を観察し、それぞれの M 主要部要素ごとに補部選択が異なってくることを示す。丁寧語と共起できる要素は TP または AddrP を補部に選択できるが、丁寧語と共起できない要素は TP のみを補部に取ることを論じる。以下では、各節の概要を示す。2 節では、(1)に例示される推量辞の「だろう」と「でしょう」の構造について論じる。「だろう」は、(2)に示すように、TP を補部に取る MP の主要部である。

(1)　おそらく太郎は来た｛だろう／でしょう｝。

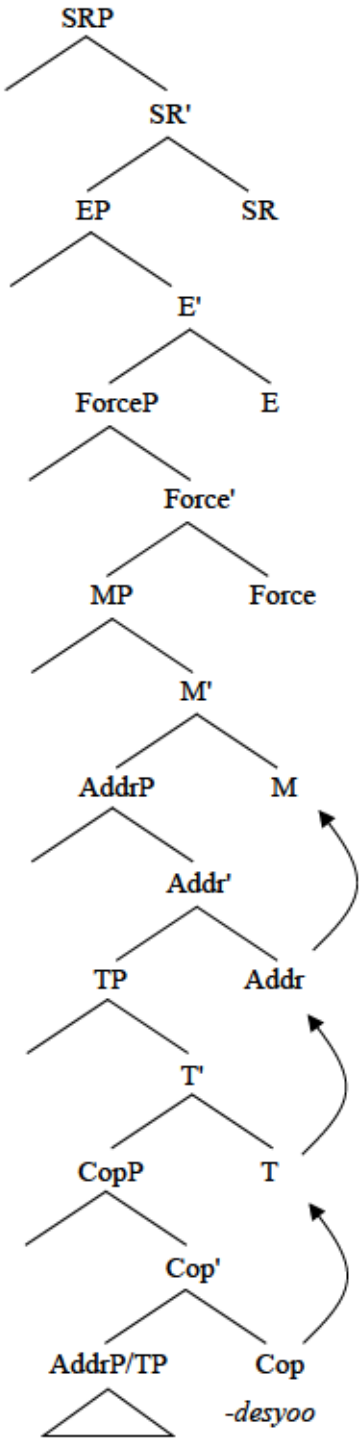
(2)



一方で、「でしょう」は MP に基底生成される主要部であるとはみなさない。(3)に示すよ

うに、CopP の主要部に生起し、循環的な主要部移動を経て、M に着地する。CopP の補部には TP または AddrP が現れる。この分析では、「でしょう」は単文構造ではなく、複文構造を持つことになる。（ここでいう複文構造とは二つ以上の TP が含まれる文のことを指す。「でしょう」が生じる文には必ず二つ以上の TP が現れる。一方で、単文構造を持つ文には少なくとも一つの TP が含まれていれば良い。単文構造を持つ「だろう」では必ずしも二つ以上の TP が現れるとは限らず、TP が一つしか含まれない場合もある。）

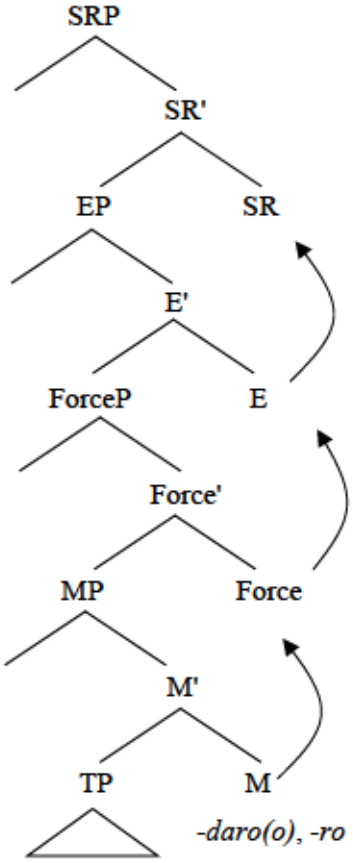
(3)



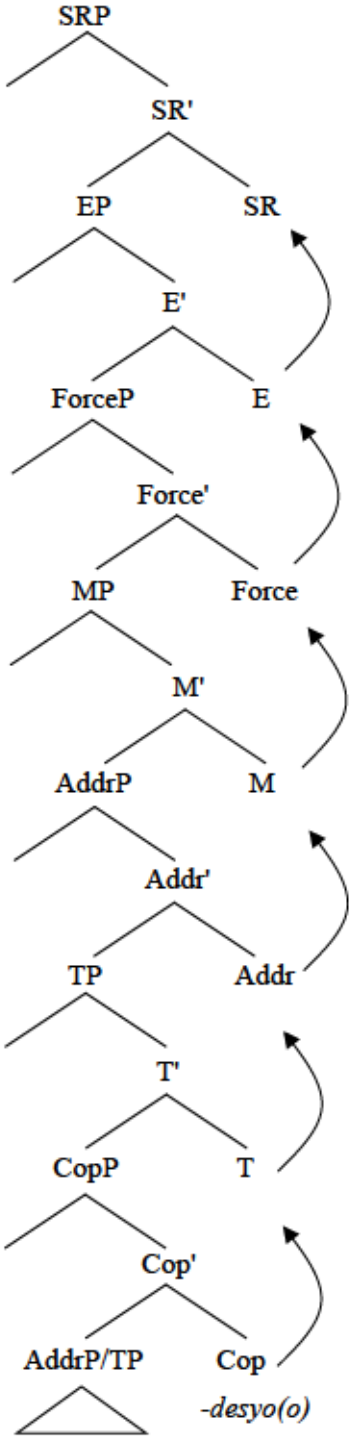
推量辞は、(4)に例示する確認要求用法においては、(5)に示されるような SR への主要部移動の適用を受けると提案する。この仮説は、他の終助詞との共起制限から支持される。

(4)　だから言った｛だろう／でしょう｝？

(5)　a.



b.



これに関連して、意志動詞に接続する「（よ）う」は、(6)に見られるように、意志・勧誘を表す。上田 (2007) は、意志・勧誘の「（よ）う」は推量辞の「う」より構造的に上位の投

射と関与するとしているが、本論では、「（よ）う」は MP の主要部要素であると主張する。

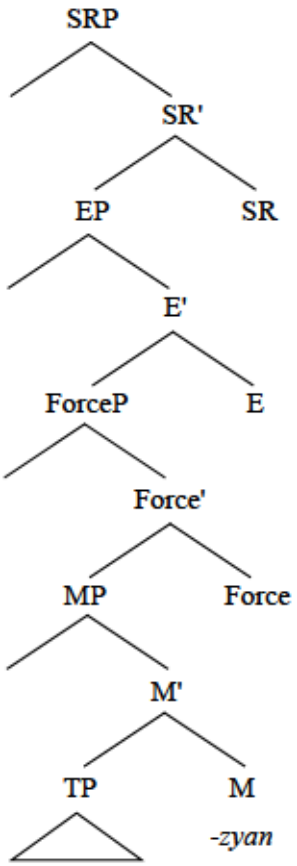
(6)　ご飯を食べよう。

3 節では、(7)に示す非命題確認要求表現の「じゃん」や「やん（関西方言）」が MP の主要部として生起することを論じる。他方で、命題確認要求表現の「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」や非命題確認要求表現の「じゃない」は、MP の主要部ではなく TP より下位に生起する表現であることを指摘する。

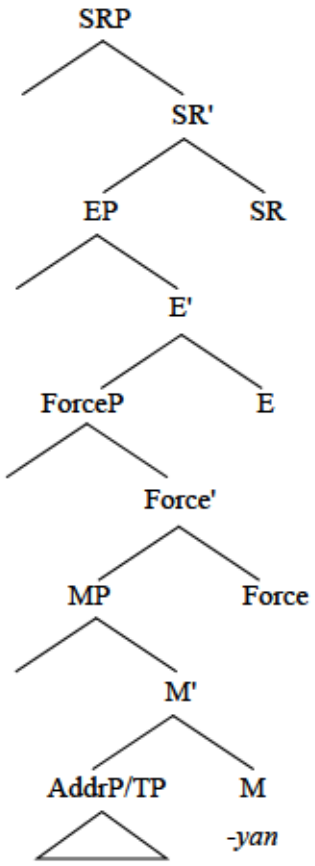
(7)　太郎は賢い｛じゃん／やん｝。

非命題確認要求表現の「じゃん」と「やん（関西方言）」はどちらも MP の主要部であるが、補部選択については相違が認められる。(8)に示しているように、「じゃん」は TP のみを補部に選択し、「やん（関西方言）」は TP または AddrP を補部として選択する。

(8) a.



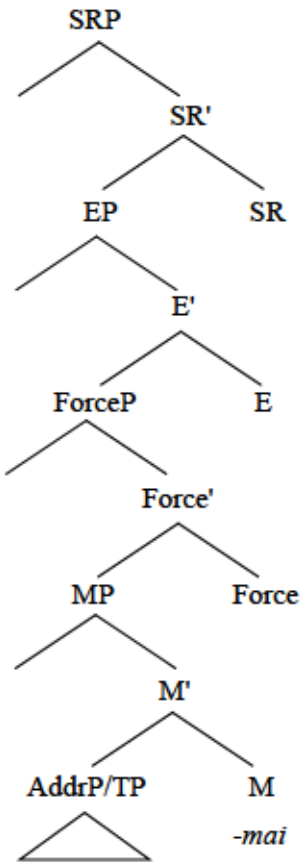
b.



4 節では、否定推量を表すモダリティ要素の「まい」の統語特性と形態的特徴を記述する。「まい」は、(9)に示すように、統語的には TP または AddrP を選択するモダリティ要素であると論じる。しかしながら、これとは別個に「まい」には動詞に接続しなければならないという形態的な制約が課されるので、他のモダリティ要素と比較しても、極めて特殊な統語的

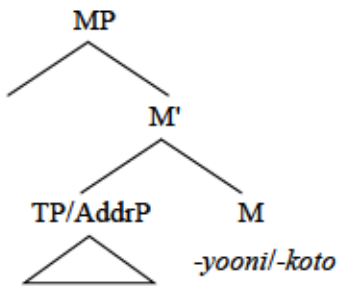
振る舞いが観察される。

(9)



5 節では、補文標識の「こと」と「ように」が M 主要部であると主張する。「こと」と「ように」節の内部に丁寧語が表出できることから、「こと」と「ように」は、TP または AddrP を選択するモダリティ要素であると主張する。

(10)



6 節は本章のまとめである。

2. 推量辞の補部選択と主要部移動

本節では、推量辞の「だろう・でしょう」の統語特性を観察する。まず、「だろう」は TP を補部に選択する MP の主要部であることを示す。一方で、「でしょう」は MP に基底生成される主要部であるとはみなさない。複文構造を持ち、CopP 主要部から MP 主要部への主要

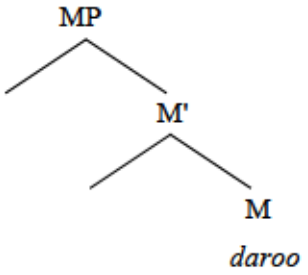
部移動を起こす語であると主張する。さらに、「でしょう」は TP または AddrP を補部に取れることを確認する。また、本節では推量辞の確認要求用法の統語特性を観察する。確認要求用法の推量辞は Force 主要部への移動を起こす。この仮説は、疑問を表す助詞の「か」との共起関係から支持が得られる。さらに、本節では意志・勧誘を表す「（よ）う」についても議論する。先行研究では「（よ）う」は推量辞より構造的に上位にあるとされるが、本節では MP の主要部であると主張する。一方で、「ましょう」は vP 主要部から MP 主要部に移動する語であると論じる。

2.1. 推量辞「だろう・でしょう」の構造位置と補部選択

第 2 章では、推量辞として「う」を代表させて議論を進めたが、推量辞には「う」だけでなく、「だろう」もある。「だろう」は、「う」とともに、MP の主要部に置かれる語である（Koizumi (1993); Ono (2006); 上田 (2007); 田川 (2009); Ueda (2011); Kishimoto (2011); 岸本 (2011)）。推量辞の「う」との違いは、「う」が述語の語幹に付くのに対し、「だろう」は、時制要素に接続できるという点である。(11)a において、時制要素の「た」の右隣に現れている「だろう」は、(11)b に示すように、MP の主要部を占める要素として分析される。（MP の上位には ForceP・EP・SRP が投射するがここでは割愛していることに注意されたい。）

(11) a. おそらく太郎は来ただろう。（cf. *…来たう。）

b.



MP の主要部なので、「う」と同じように終助詞の「わ」や「もん（もの）」とは共起しえない。

(12) a. *太郎は賢いだろうわ。

b. *だって、すごいだろうもん。

「だろう」は、もともと推量辞の「う」がコピュラの「だ」に接続してできた形式であるが、単一の語彙項目として派生に導入される。「だろう」が一つの語彙項目になっているという見方は、以下に示すデータから支持が得られる。(13)b は、「だ」が単独で CP に現れることができないことを示している。仮に「だろう」がコピュラの「だ」と推量の「う」に分解できるのであるとすると、「だ」は単独で CP 領域に現れてもよいはずである。ところが、単独で現れることはできないので、「だろう」は一つの語彙項目になっていると考えられる。

(13) a. 太郎は本を読むだろう。
b. *太郎は本を読むだ。

第 2 章では、(14)a に例示されるように、MP 主要部の「っけ」は AddrP を補部に取ることができることを見た。一方で、(14)b から分かるように、「だろう」では丁寧語との共起が不可能である[44]。

(14) a. 太郎は来ましたっけ。
b. *ご覧になりましただろうか。

本論では、AddrP は丁寧語が現れた時のみ投射すると想定している。そうすると、「だろう」は AddrP を選択することはできず、TP を選択するということができる。

(15) *-daroo* 'it is probable' [TP _____]

次に、推量辞には「う」と「だろう」以外にも「でしょう」がある。「でしょう」は MP に基底生成される要素であるとは考えにくい。一つには、(16)のように、「でしょう」は「でありましょう」との交替が可能であるという事実が挙げられる。「でありましょう」には「ます」の未然形（ましょ）が含まれる。「ます」は TP の下位に基底生成される丁寧語 A なので、「でありましょう」も TP の下位に基底生成されると考えられる。同様に、「でありましょう」との交替が可能な「でしょう」も TP の下位に基底生成されるということができる。

(16) a. その仮説はいずれ反証されるでしょう。
b. その仮説はいずれ反証されるでありましょう。

さらに、「でしょう」は語形に「です」の未然形（でしょ）を含んでいる。本論では、丁寧語は AddrP との関係を持つと仮定しているので、「でしょう」は AddrP とも関係を持つと考えるのが妥当である。

「でしょう」は一語化した要素として派生に導入される。「でしょう」は「でしょ」と「う」の外的併合によって統語的に派生された語の連鎖であるとは考えられない。このことは、AddrP に基底生成される「です」との対比から確認できる。AddrP に生成される丁寧語 B の「です」には、形容詞型の活用をする語が含まれる文以外では CP に現れにくいという特徴がある。(17)a の動詞述語を含む肯定文に起こる「です」は、通常、容認されない[45]。ところ

---

[44] Miyagawa (In press) も同様の観察をしている。ただし、辻村 (1968: 293–294) は、近世末期から明治初年にかけて「ますだろう」の形式が使用されていたことを報告している。

[45] ただし、定延 (2011) は、動詞述語文や名詞述語文の肯定文において、時制要素の右隣に「です」が現れる文を容認する話者も存在することを報告している。また、国民的人気アニメ『サザエさん』の登場人物であるタラちゃんがこのような発話をすることも広く知られているであろう。タラちゃんが使用する「です」の用法はキャラ語尾の一種であると考えられ

が、「でしょう」が現れる(17)b は、問題なく容認される。動詞述語を含む肯定文では、「です」は、単独では CP に起こることがないが、「でしょう」の語形でなら生起することができる。「でしょう」が「です」と「う」の異なる語の併合によって統語的に得られる形式なのであるとすれば、「です」が「う」と共起する時に限って動詞述語の肯定文に現れることができるのはなぜなのかが疑問となる。現在の標準日本語の文法では「でしょう」が一つの語彙項目になっていると考えれば、この点は問題とならない。「でしょう」は「です」とは異なる語彙項目なので、「です」に課される生起条件は課されないのである。

(17) a. ??太郎は本を読むです。
b. 太郎は本を読むでしょう。

「だろう」と「でしょう」では、補部の選択制限に関して興味深い対比が観察される。(18)は、丁寧語 A の「ます」は「でしょう」と共起できるが（仁田 (1991: 190)）、「だろう」とは共起できないことを示している。(18)の対比から、「ます」と共起できる「でしょう」は AddrP を補部に取るということができる。「でしょう」の補部には AddrP が現れるので、丁寧語 A の「ます」の移動先が提供されることになる。「ます」は vP 内に生起して、Addr に着地する。

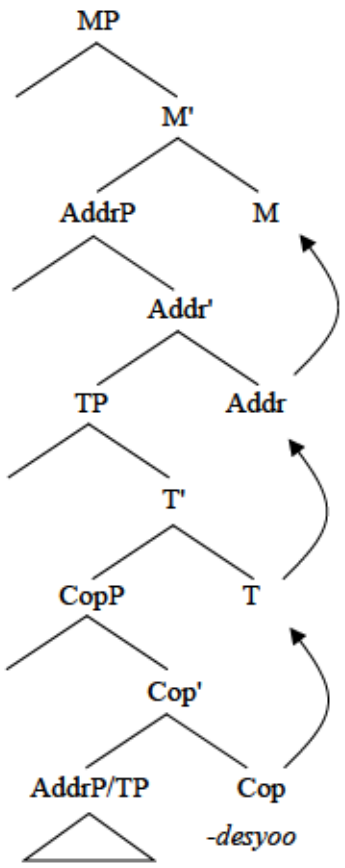
(18) a. ご覧になりましたでしょうか？
b. *ご覧になりましただろうか？

ここまでの観察に基づき、(19)a の構造を仮定する。「であります」との交替が可能であることから、「でしょう」は TP の下位に基底生成される。具体的には、「でしょう」は一つの語彙項目として Cop 主要部に基底生成されると仮定する（Cop については、第 2 章の 3.2 節を参照）。「でしょう」は丁寧語と推量辞を語形に含むので、AddrP 及び MP との関係を持つ。(19)a に示されるように、「でしょう」は Addr を経由し、M に着地する[46]。

る（川瀬 (2010)）。

[46] 「だろう」も「太郎はもうすぐ帰る｛だろう／であろう｝」のように、「であろう」との交替が可能である。「だろう」や「であろう」についても、複文構造を持つと分析できないこともないが、そのことを支持する積極的な証拠が得られていないため、本論では、「だろう」と「であろう」は M 主要部であるとして、議論を進める。

(19) a.



b. *-desyoo* 'it is probable' [AddrP or TP _____]

さらに、「でしょう」の補部には丁寧語が現れることができるので、TP だけでなく AddrP も選択できるということができる。(19)a の構造は、「でしょう」が複文構造を持つことを示している。

「だろう」と「でしょう」に関する本論の分析に対して、次のような反論が考えられる。(20)に示すように、「だろう」と「でしょう」の直前に「の」が現れることができる。本論の分析では、「だろう」は TP、「でしょう」は TP または AddrP を補部に選択するとしているが、(20)をどのように扱うかが問題となる。

(20) a. 太郎は帰った<u>の</u>だろう。
b. 太郎は帰った<u>の</u>でしょう。

本分析への反論として、「だろう」や「でしょう」は TP や AddrP ではなく、NP や CP を補部に取っている可能性が挙げられる。「太郎は帰った｛だろう／でしょう｝」のような文は、N または C 主要部に対応する「の」が省略されることで派生されている可能性がある（「の」の構造位置については、第 4 章で議論する。）。しかしながら、「の」の脱落分析では、(21)のような例が問題となる。(21)は、「のだ」文の「の」が省略できないことを示している。

(21) 太郎は帰った（*の）だ。

「太郎は帰った｛だろう／でしょう｝」のような文が、「の」を省略することで得られるのであれば、(21)において、「の」が省略できないことが問題となる。このため、本論では、「の」の脱落分析を採用しない。

(20)については、「のだ」文に、推量辞の「だろう・でしょう」が付いたものであると想定する（cf. Ono (2006)）。(22)のように、「のだ」文の「だ」は義務的に脱落すると想定する[47]（奥津 (1978) も参照）。（「のだ」文の構造については、第 4 章においても論じる。）

(22) [[$_{TP}$…の~~だ~~]だろう／でしょう]

最後に付け加えるべきことがある。(19)a で示したように、「でしょう」が AddrP を選択可能なのであれば、Addr に基底生成される「です」も、「だろう」とは共起できず、「でしょう」とは共起できても良さように思える。しかしながら、実際には、(23)に示されるように、「です」は「だろう」だけでなく「でしょう」とも共起し得ない。「だろう」は TP を補部に取るので、予測通り非文となる。一方、「でしょう」では、AddrP の主要部が空いているので、論理的には「でしょう」の直前に「です」が現れてもよいはずである。

(23) a. *昨日は楽しかったですだろう。　b. *昨日は楽しかったですでしょう。

(23)b は別個の要因によって排除される。(24)の文法性の対比は、「だろう」の直前にコピュラの「だ」が現れ得ないことを示している。「だだ」の音連続が生じている(24)a は、不適格な文と判断される。「だろう」は統語的には一つの構造物として派生に導入されるが、形態的には「だ」と「う」が組み合わさってできた語彙である。この点において、「だだ」の音連続の禁止は、同一形態（「だ」）の連続の禁止であるとみなすことができる[48]。他方、(24)b では二つの「だ」の中間に時制要素の「た」が介在している。「だだ」の音連続は回避されているので、文法的である。

(24) a. *明日は雨だだろう。
　　b. 明日は雨だっただろう。

---

[47] 「だろう」や「でしょう」は名詞に接続することができる。
(i)　明日は雨だろう／でしょう。
奥津 (1978) に従い、これらの文は、「だ」が義務的に脱落することで得られると仮定する。
(ii)　明日は雨~~だ~~だろう／でしょう。

[48] 同一の音連続が回避される現象は、必異原理（OCP）や異化（dissimilation）などのように、音韻論で一般的に観察される現象である。「だだ」の音連続の禁止は、重音脱落（haplology）の一種であると考えられる。ここでは、片方の「だ」を脱落させることによって「明日は雨だろう」のような名詞文が得られるものと考えることにする。

「です」についても同様である。「でしょう」は統語的には一つの語彙項目であるが、形態的には「です」と「う」からできている。(25)a が排除されるのは、「です」が連続していることによる。(25)b では、「です」と「でしょう」の間に「た」が生じているので、「です」の連続は生じておらず、適格な文となる。そうすると、(23)b が不適格となるのは、統語的な要因によるものではないということができる。(25)a と同じく同一語形の連続によって不適格になっていると考えられる[49]。

(25) a. *明日は雨ですでしょうか。
b. 明日は雨でしたでしょうか。

2.2. 推量辞の確認要求用法

本節では、確認要求の用法で用いられる推量辞は、SR への主要部移動を起こすと主張する。確認要求とは、話し手が聞き手に対して、何らかの確認を行う用法である。三宅 (1996, 2011) によれば、確認要求には二つのタイプがある。一つ目は、確認の対象を命題とするもので、命題が真であることを確認する用法である。この用法は、「命題確認の要求」と呼ばれる。(26)に具体例を挙げている。

(26) 命題確認の要求
a. おそらく君もそう思った｛だろう／だろ／ろ｝？
b. おそらく君もそう思った｛でしょう／でしょ｝？

この文を発話するとき、話し手は、「君もそう思う」という命題はおそらく真であろうと推測しているが、命題が真であることを確信してはいない。この文は、話し手が真であることを完全には確信できていない場合に、真であることを確認するために発話される。

---

[49]「だ」の代わりに「である」を用いると、(ia)のように、「だろう」との共起が可能である。これは同一形態の連続が回避されるからである。一方で、(ib)のように、「でしょう」では「である」と共起した場合、やや不自然になる。
(i) a. 明日は雨であるだろう。
b. ?明日は雨であるでしょうか。
(ib)の不自然さには、文体の問題が関与していると考えられる。今日の日本語では、「である」は聞き手が存在する会話では用いられにくい（かわりに、「だ」が優先的に使用される。例：「明日は雨だよ」vs. 「?明日は雨であるよ」）。「でしょう」は丁寧体なので、聞き手の存在が含意される。「である」と「でしょう」の文体差が(ib)の不自然さに影響を与えているのであろう。
一方で、「でしょう」は、「である」を否定形にした「ではない」とは問題なく共起できる。「ではない」は日常会話でも使用されるので、「である」とは異なり、文体の問題が生じない。このため、共起可能であるということができる。
(ii) 明日は雨ではないでしょうか。

二つ目は、話し手は命題が真であることを確信した上で、その情報や知識を聞き手も認識しているかどうかを確認する用法である。これは、「知識確認の要求」と呼ばれる。(27)に例を提示している。

(27) 知識確認の要求

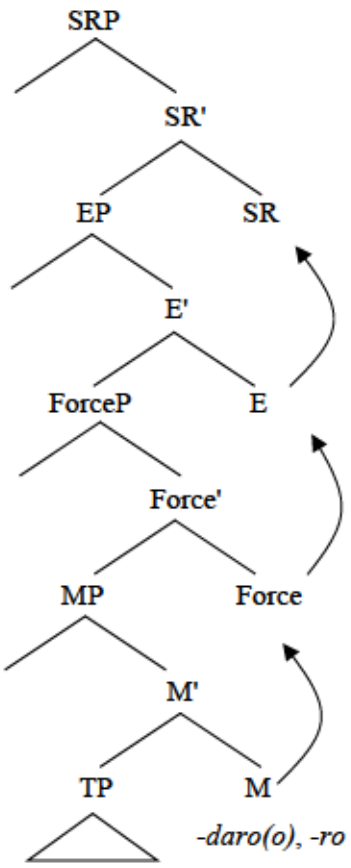
a. だから言った｛だろう／だろ／ろ｝？

b. だから言った｛でしょう／でしょ｝？

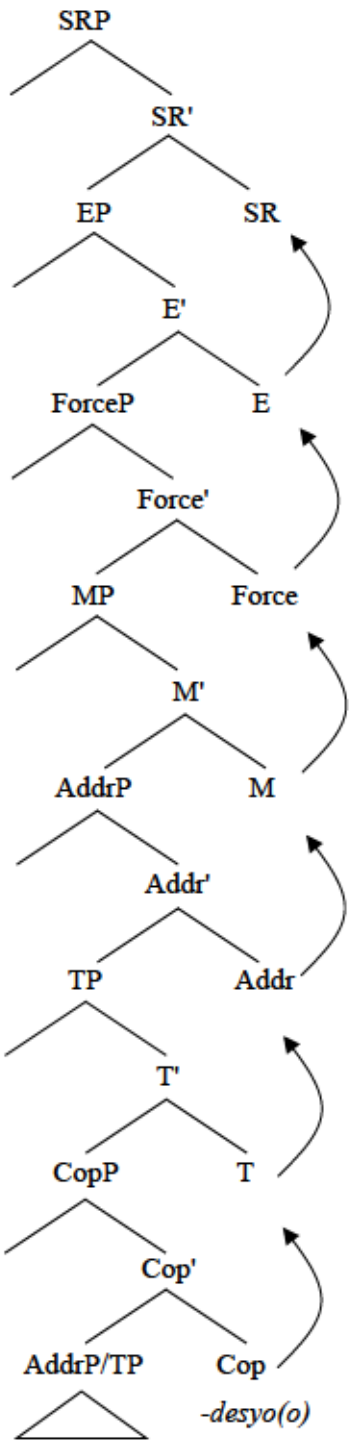
この文は、話し手が事前に忠告を行ったにもかかわらず、聞き手が失態を犯した時などに使用される。話し手は、聞き手に自分が忠告を行なったかどうか再確認するために、この発話を行なっているわけではない。自分が忠告を行ったことを確信した上で、聞き手もそのことを認識しているかどうかを確認しているわけである。命題確認要求・知識確認要求のいずれの用法でも、「だろう・でしょう」以外に「だろ・ろ」、「でしょ」のような縮約形が頻繁に使用される。「だろ・ろ」、「でしょ」は通常の推量の解釈も可能である。ただし、標準日本語の「ろ」は直前の時制が過去に限られ、非過去時制では用いられない（「*明日は暑いろ」）。

本論では、推量辞は、確認要求の用法で用いられる場合、SR への主要部移動を起こすことを提案する。(28)に示すように、「だろう」系の推量辞は M から SR へ、「でしょう」系の推量辞は Cop から SR へ移動する。

(28) a.



b.



SR への主要部移動は、他の主要部要素との共起制限から示唆される。(29)と(30)に示すように、確認要求の推量辞は、疑問を表す「か」と共起することができない。確認要求は、疑問文の一種なので、「か」との共起が許されてもよいはずである。同じく確認要求用法を持つ終助詞の「じゃん」では、「だから言ったじゃんか」のように、「か」との共起が可能なので、(29)と(30)は意味的な制約を受けて不適格になっているとは考えられない。(31)のように、確認要求の用法でないときは、推量辞の移動は起こらないので、推量辞は「か」と共起

できる。この点からも、推量の用法と確認要求の用法では、推量辞は統語的に異なる振る舞いを示すことが分かる。

(29) 命題確認の要求
a. *君もそう思った｛だろう／だろ／ろ｝か？
b. *君もそう思った｛でしょう／でしょ｝か？

(30) 知識確認の要求
a. *だから言った｛だろう／だろ／ろ｝か？
b. *だから言った｛でしょう／でしょ｝か？

(31) 荷物は届いた｛だろう／でしょう｝か。

さらに、確認要求を表す推量辞は、(32)と(33)に示されるように、終助詞の「よ・ね・な」と共起できない。これらの事実は、確認要求の推量辞が SR に主要部移動すると仮定することで捉えられる。

(32) 命題確認の要求
a. *君もそう思った｛だろう／だろ／ろ｝よ？
b. *君もそう思った｛だろう／だろ／ろ｝｛ね・な｝？
c. *君もそう思った｛でしょう／でしょ｝よ？
d. *君もそう思った｛でしょう／でしょ｝｛ね・な｝？

(33) 知識確認の要求
a. *だから言った｛だろう／だろ／ろ｝よ？
b. *だから言った｛だろう／だろ／ろ｝｛ね・な｝？
c. *だから言った｛でしょう／でしょ｝よ？
d. *だから言った｛でしょう／でしょ｝｛ね・な｝？

確認要求の推量辞の補部選択に関しては、通常の推量用法で用いられる推量辞の補部選択と同じである。TP の下位に起こる「ます」は、(34)a と(35)a に示しているように、「だろう」系の推量辞とは共起できない。つまり、「だろう」系の推量辞は TP を補部に取り、AddrP は選択することができない。一方で、丁寧語は、(34)b と(35)b のように、「でしょう」系の推量辞とは共起できるので、TP・AddrP のどちらも補部として選択できるということができる。「だろう・でしょう」は推量用法でも確認要求用法でも用いられるが、統語的には異なった振る舞いを示すことがわかる。

(34) 命題確認の要求

a. *おそらく山田さんのことはご存じでした｛だろう／だろ／ろ｝？
b. おそらく山田さんのことはご存じでした｛でしょう／でしょ｝？

(35) 知識確認の要求
a. *だから言いました｛だろう／だろ／ろ｝？
b. だから言いました｛でしょう／でしょ｝？

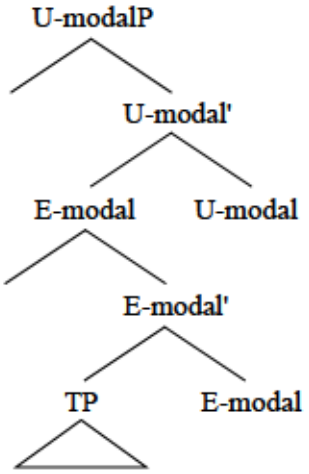
2.3. 意志・勧誘の「（よ）う」

推量辞と関連して、意志・勧誘を表す「（よ）う」の統語構造について論じる。(36)に見られるように、意志動詞に付く「（よ）う」は子音語幹動詞に付くときは*-oo*、母音語幹動詞に付くときは*-yoo* として具現化する。上田 (2007) では、意志・勧誘の「（よ）う」は推量辞の「う」より構造的に上位に位置付けられる。しかし、本論では、意志・勧誘の「（よ）う」は推量辞の「う・だろう」と同じく MP の主要部であると主張する。他方、「ましょう」は TP の下位に生起し、MP に移動すると論じる。

(36) a. 本を読もう。（yom-oo）
b. 食べよう。（tabe-yoo）

上田 (2007) は、モダリティ要素を認可する投射を E-modalP と U-modalP の二つに分割している。E-modalP は認識モーダル句であり、発話内容に対する話し手の認識を表すような語彙が現れる。U-modalP は発話伝達モーダル句であり、発話の伝達に対する話し手の態度を表す要素が現れる。(37)に図示するように、E-modalP の上位に U-modalP が投射する。推量辞の「（よ）う」は E-modalP の主要部として、意志・勧誘の「（よ）う」は U-modalP の主要部として起こる。（U-modalP の主要部には、「（よ）う」以外にも命令を表す要素が生じるとされる。しかし、本論では、第 2 章で触れたように、節のタイプを指定する ForceP の主要部と仮定している。）

(37)



この仮説は、C 類従属節への埋め込みのテストから支持されるという。(38)は、意志・勧誘の「よ（う）」は C 類従属節内に表出できず、推量辞の「う」は表出できることを示している[50]。このデータに基づいて、上田 (2007) は、意志・勧誘の「（よ）う」は推量辞の「う」より構造的に上位に存在すると主張している。接続助詞の「が」は E-modalP は補部に取れるが、U-modalP は補部に取れない。意志・勧誘の「（よ）う」は E-modal に生起するので「が」の接続を許す一方で、推量辞の「う」は U-modalP の補部に現れるので「が」の接続を許容しないとしている。

(38) a. *一緒に散歩に行こうが、雨が降っている。
b. 太郎は遠足に行くだろうが、花子は行かないだろう。

しかしながら、(38)a は統語的な要因で不適格になっているとは考えにくい。というのも、(39)a に示すように、意志・勧誘文の直後に副詞の「が」を続けると、不自然な発話になる。接続助詞の「が」には副詞としての用法もあるので、(39)b のように二つの文に分離することができる。推量辞では、副詞の「が」が容認される。これに対して、意志・勧誘の「（よ）う」は分離させても容認度は低いままである。副詞は埋め込み節を導入する補文標識ではないので、(39)a の二文は統語的には独立している。このため、(39)a の不自然さは統語的な要因には還元できない。そうすると、(38)a と(39)a は統語的な要因ではなくて、意味・語用論的な要因で不適格になっているということになる。このため、(38)のデータは、必ずしも MP を二分割する根拠とはならない。

(39) a. ??一緒に散歩に行こう。が、雨が降っている。
b. 太郎は遠足に行くだろう。が、花子は行かないだろう。

意志・勧誘の「（よ）う」は ForceP より下位の MP の要素である。(40)では、疑問の助詞の「か」が意志・勧誘の「（よ）う」の右方に現れている。「（よ）う」が仮に ForceP の主要部に起こるのであれば、(40)は非文になることが予測される。また、「（よ）う」が M から Force に主要部移動を起こすという可能性も排除される。推量辞の確認要求用法に関する議論で示したように、Force に主要部移動するのであれば、「か」と共起できないはずであるからである。

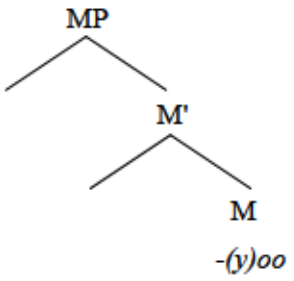
(40) 私がやろうか？

(41)に示すように、意志・勧誘の「（よ）う」は MP の主要部として生起する。

---

[50] (i)のように、意志動詞＋「う」の形式が接続助詞の「が」の補部位置に現れることがある。意志動詞に付く「う」は、通常、意志・勧誘を表すが、(i)は、反実仮想を表す文なので、推量の「う」であると考えられる。このため、(i)は必ずしも上田 (2007) の反例とはならない。
(i) 行こうが行かまいが構わない。

(41)



意志・勧誘の「（よ）う」には丁寧形式も存在する。(42)に示すように、「ましょう」、「ましょ」という形式で現れる。「ましょ」は「ましょう」の縮約形である。また、「ましょう」は意志・勧誘だけでなく、(43)のように、推量辞の「う」と共起することもある。

(42) a. はやく行きましょう。
b. はやく行きましょ。

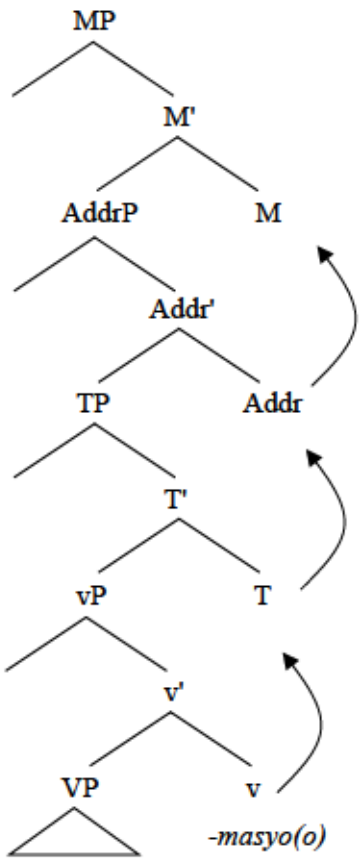
(43) おそらくはそうでありましょう。

「ましょう」は、「ます」と「う」が統語的に併合して得られる形式ではなく、一語化した語彙項目である。「ましょう」が一語化していることは、取り立て詞の挿入のテストから裏付けられる。(44)a では、動詞と推量辞が「は」によって隔てられているが、文法的である。一方、(44)b では、「ます」と推量辞が「は」で隔てられている。この文は容認されない。取り立て詞は、語の内部に生起できないという特徴を持つ。「ましょう」が一語化していると考えれば、(44)b の不適格さが捉えられる。

(44) a. それを食べはしよう。
b. *それを食べましはしよう。

「ましょう」は一語化しているが、その語形には TP の下位に生起する丁寧語 A の「ます」の未然形（ましょ）が含まれる。本論では、「ましょう」は「ます」と同じく TP の下位（vP）に基底生成されると仮定する（「ます」の構造位置については、第 2 章の 3.2 節を参照）。(45)に示されるように、主要部移動によって MP の主要部に動く。

(45)



以上、本節では、推量辞の「だろう」、意志・勧誘の「（よ）う」は MP の主要部である一方で、「でしょう」は複文構造を持つこと、また、「ましょう」は v から M への主要部移動を起こすことを論じた。

3. （非）命題確認要求表現

本節では、命題確認要求表現の「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」と非命題確認要求表現の「じゃない」・「じゃん」・「やん（関西方言）」の構造について考察する。命題確認要求表現の「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」と非命題確認要求表現の「じゃない」は複文構造を持つことを示す。加えて、「じゃん」と「やん（関西方言）」は MP の主要部であると主張する。「じゃん」は TP を補部に取るのに対して、「やん」は TP または AddrP を補部に取ることを示す。

「じゃない」には、命題確認の要求、知識確認の要求、驚きの表示の用法がある（三宅 (1996, 2011); cf. 田野村 (1988); 宮島・仁田 (編) (1995)）。命題確認の要求と知識確認の要求の定義は、推量辞の確認要求のときと同様である[51]。(46)a,b に具体例を示している。また、驚きの表示とは、(46)c のように、話し手の驚きを聞き手に表明する用法である。（この場合、話し手は確認行為を行なっているわけではない。）

[51] 推量辞と「じゃない」の用法の差異については、蓮沼 (1995), 三宅 (1996, 2011), 宮崎 (2000) が詳しい。

(46) a. もしかして合格じゃない？（命題確認の要求）
b. だから言ったじゃない。（知識確認の要求）
c. やればできるじゃない。（驚きの表示）

三宅 (2011) が論じているように、命題確認の要求を表す「じゃない」と知識確認の要求・驚きの表示を表す「じゃない」は、同音異義語である。「じゃない」が二種類存在していることは、(47)に示しているように、「じゃん」が命題確認要求を表すことができないことからも確認できる[52]。「じゃん」は知識確認の要求や驚きの表示を表すことはできるが、命題確認の要求の用法は持たない。

(47) a. *もしかして合格じゃん？（命題確認の要求）
b. だから言ったじゃん。（知識確認の要求）
c. やればできるじゃん。（驚きの表示）

「じゃん」とは反対に、命題確認要求の用法しか持たない形式もある。(48)に示すように、「じゃね」は命題確認の要求の用法は持つが、知識確認の要求と驚きの表示の用法は持たない。

(48) a. もしかして合格じゃね？（命題確認の要求）
b. *だから言ったじゃね。（知識確認の要求）
c. *やればできるじゃね。（驚きの表示）

方言においても、命題確認要求の用法しか持たない表現が見つかる。長崎方言では、命題確認の要求を行う際、「じゃなか」という表現が用いられる。(49)から、この表現が命題確認要求の用法以外では許容されないことがわかる。（知識確認要求や驚きの表示では、終助詞の「たい」や「やん」が使用される。）このように、命題確認要求と知識確認要求・驚きの表示は、形態のレベルで区別されることがある。このことを考慮に入れて、本節では、命題確認の要求を表す表現を命題確認要求表現、知識確認の要求・驚きの表示を表す表現を非命題確認要求表現と呼んで区別する[53]。

(49) a. もしかして合格じゃなか？（命題確認の要求）
「もしかして合格じゃない？」
b. *やけん言ったじゃなか。（知識確認の要求）

---

[52] ただし、松丸 (2001) では、「ひょっとしたら、あいつが犯人じゃん？」のような文が容認されている。ここでの判断は、筆者の判断によるものである。
[53] 近年の生成文法の研究では、命題確認要求を表す「じゃない」の意味分析が盛んに行われている（Ito and Oshima (2016); Hirayama (2018); Shimoyama, Goodhue, and Hirotani (2018)）。ただし、命題確認という用語が使用されているわけではなく、否定疑問文（negative question）という用語が広く採用されている。

「だから言ったじゃない。」

c. *やればできるじゃなか。（驚きの表示）

「やればできるじゃない。」

また、命題確認の要求と知識確認の要求・驚きの表示では、音韻的なレベルでも違いが見られる。(50)a の命題確認の要求においては、上昇調（↗）での発話が義務的であり、下降調（↘）で発話されると不自然な発話となる。これに対して、(50)b,c の知識確認の要求・驚きの表示では、上昇調・下降調ともに容認される。（どちらかといえば、下降調の方が自然である。）

(50) a. もしかして合格じゃない（↗／*↘）（命題確認の要求）

b. だから言ったじゃない。（↗／↘）（知識確認の要求）

c. やればできるじゃない。（↗／↘）（驚きの表示）

命題確認要求表現の「じゃない」の特徴として、この要素は TP に接続できないという点が挙げられる。(51)に例示するように、命題確認要求表現の「じゃない」は、名詞（または名詞化辞（「の」））に付くことはできるが、時制要素には付くことができない。また、(52)a のように、「じゃない」に時制要素の「た」を接続することが可能である。したがって、「じゃない」は、(52)b に示すように、TP の下位に生じる要素であることがわかる。また、「じゃね」と「じゃなか（長崎方言）」についても同じ構造を仮定する。

(51) a. もしかして合格じゃない？

b. *もしかして合格だったじゃない？

(52) a. もしかして合格じゃなかった？

b. [$_{TP}$ .... *-zyana-i*]

命題確認要求表現の構造は(52)で事足りるので、非命題確認要求表現の構造の検討に移りたい。命題確認要求表現の構造とは対照的に、非命題確認要求表現の構造は少し込み入ったものになっている。以下では、「じゃん」・「やん（関西方言）」は M 主要部であるのに対し、「じゃない」は二重節の構造を有する構文であることを示す。まず、「じゃん」の構造について考察する[54]。(53)から、「じゃん」は、疑問を表す「か」の左隣に現れることが可能であることがわかる。「か」を ForceP の主要部とみなすと、線形順序から「じゃん」は ForceP より下の投射と関係付けられることが示唆される。そして、(54)に例示するように、「じゃん」は MP の主要部である推量を表す「う」と共起できない。このことから、「じゃん」は、M 主要部であることが示唆される。

[54]「じゃん」は静岡県から横浜に伝わり、戦後に東京に伝播したとされる（井上 (1998)）。

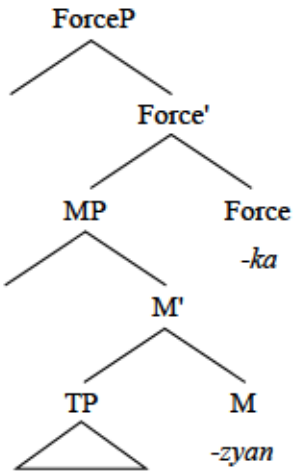
(53) a. 面白いじゃんか。
b. やればできるじゃんか。

(54) *太郎は犯人ではなかろうじゃん。

「じゃん」の補部選択を見てみると、(55)に示すように、「じゃん」は丁寧語と共起できない。「じゃん」は、「だろう」と同様に、AddrP を補部に取れず、TP を選択する語彙であるということができる。以上を考慮に入れると、「じゃん」は、(56)a に示すように、TP を補部として取る MP の主要部であると規定することができる。(56)b は「じゃん」の補部選択を示している。

(55) *やればできますじゃんか。

(56) a.



b. *-zyan* [TP _____]

次に、関西方言の「やん」の構造に関して考察を加える[55]。「やん」は「じゃん」の単なる異形態のように思えるが、両者の補部選択には違いがある。(57)に示しているように、「やん」は疑問を表す「か」の左隣に現れることができるが、推量辞の「やろ」とは共起できない。(57)のデータから、「やん」は、「じゃん」と同じように M 主要部であることがわかる。

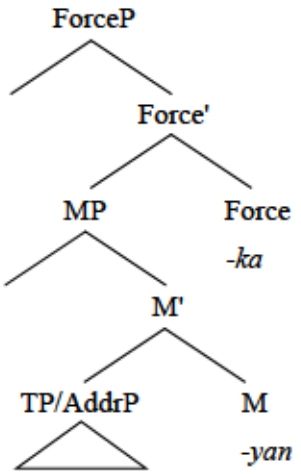
(57) a. おもろかったやんか。
b. *おもろかったやろやん。

[55] 前田 (1977: 138) によれば、「やんか」という形式は、明治あるいは大正の頃に若い女性間で使用され始めた。「やんか」から「か」が脱落したものが、「やん」である（井上 (1998: 48)）。

(57)は、「じゃん」と同じ特徴を示しているが、丁寧語との共起に関しては、「やん」は「じゃん」とは異なる振る舞いを示す。(58)に例を挙げているように、「やん」は丁寧語の生起位置にかかわらず、丁寧語とともに現れることができる。このことは、「やん」が AddrP を補部に取ることができることを示している[56]。(59)に図示しているように、「やん」は MP の主要部に対応する。この点は「じゃん」と同じであるが、補部位置に TP だけでなく AddrP も現れることができるという点で「じゃん」とは異なっている。

(58) a. おもろかったですやん。
b. だから言うてましたやん。

(59) a.



b. *-yan* [AddrP or TP _____]

最後に、非命題確認要求表現の「じゃない」の構造に関して考察を加える。非命題確認要求表現の「じゃない」は、命題確認要求表現の「じゃない」と異なり、TP に接続することが可能である。(60)に示しているように、「じゃない」は時制要素の「た」の右隣に現れている。また、「か」との共起も可能である。

(60) だから言ったじゃないか。

このことから、非命題確認要求表現の「じゃない」は「じゃん」と同じように、MP の主要部であると考えたくなるかもしれない。しかし、「じゃない」は、丁寧語と共起する際に「じゃん」とは異なった奇妙な振る舞いを示す。(61)に示しているように、TP の下位に生成され

[56] ちなみに、筆者の出身地である長崎県佐世保市の方言でも、非命題確認要求表現として「やん」が使用されることがある。しかし、関西方言の「やん」とは異なり、丁寧語との共起は不可能である。これは、佐世保方言の「やん」が「じゃん」と同じく AddrP ではなく TP を補部に取ることによる。

る丁寧語 A の「ます」は、「じゃない」とは共起することができない。一方、Addr に基底生成される丁寧語 B の「です」は、「じゃない」の右隣に現れることができる。

(61) a. *だから言いましたじゃないか。
b. 面白いじゃないですか。

これに対して、「じゃん」と「やん」は、MP の主要部に対応する要素なので、(62)に示されるように、AddrP に基底生成される「です」が「じゃん」と「やん」の右隣に現れることはない。「じゃない」が MP の主要部なのであれば、(62)と同じく不適格な文となることが期待される。しかしながら、(61)b は適格な文なので、MP の主要部であるとは考えられない。

(62) a. *面白いじゃんですか。
b. *おもろかったやんですか。

一見したところ奇妙に思えるこの分布は、非命題確認要求表現の「じゃない」が(63)に示すような二重節の構造を持つと考えることによって説明することができる。「じゃない」は、CP 領域の主要部ではなく、TP より下位の投射に現れる[57]。したがって、その右側には Addr 主要部の「です」や Force 主要部の「か」が現れることが可能である。また、「ます」と共起できないのは、「じゃない」が TP を補部に取るためである。「ます」の移動先となる AddrP が同一節内に投射されないため、「ます」が移動できず、非文となる。

(63) $[_{SRP}\ [_{EP}\ [_{ForceP}\ [_{MP}\ [_{AddrP}\ [_{TP}\ [_{TP}$ ……T] *-zyana-i*]]]]]]

二重節構造を持つ他のモーダル述語も丁寧語との共起に関して「じゃない」と同様の振る舞いを示す。例えば、「かもしれない」と「にちがいない」は、(64)に示すように、TP を補部に取り、二重節構造を持つ。伝聞を表す「そうだ」の補部位置への埋め込みが可能なので、「かもしれない」と「にちがいない」は、(65) の構造を持つということができる[58] (岸本 (2005:

[57] (i)のように、非命題確認要求表現の「じゃない」には時制要素の「た」が接続できない (三宅 (2011); 田野村 (1988, 1990)) 。この文の不適格性には意味・語用論的な要因が関係している。先に見たように、命題確認要求表現の「じゃない」には「た」が接続可能である。ここで、「もしかして合格じゃなかった？」のように、命題確認要求表現とともに現れる「た」は、過去ではなく、想起を表すことに注目してほしい。想起の「た」は、発話時に話し手が命題の内容を思い出す場面で使用される。一方で、非命題確認要求用法として用いられる「じゃない」は、話し手が命題の内容が正しいことを既に確信している場面でのみ使用される。
(i) *だから言ったじゃなかった。
非命題確認要求表現の「じゃない」と想起の「た」が共起すると、命題の内容を話し手が発話時以前から既に確信しているにも関わらず、命題の内容を発話の直前に思い出したという奇妙な意味になる。このため、非命題確認要求表現の「じゃない」には時制要素の「た」が接続できないものと考えられる。

[58] これらの形式では、「太郎は帰ったかもしれません」や「次郎は帰ったにちがいありませ

56)）。（本論では、MP は CP 領域にのみ投射すると想定する。この想定の下では、「かもしれない」と「にちがいない」は、MP の主要部にはないことになる[59]（cf. 岸本 (2021: 53–54)）。）

(64) a. [$_{TP}$太郎が来る] かもしれない（そうだ）。
b. [$_{TP}$太郎が来る] にちがいない（そうだ）。

(65) [$_{SRP}$ [$_{EP}$ [$_{ForceP}$ [$_{MP}$ [$_{AddrP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{TP}$ ……T] *kamosirena-i/nitigaina-i*]]]]]]

丁寧語との共起に関して、これらのモーダル述語は、非命題確認要求表現の場合と同じ振る舞いを示す。(66)では、AddrP に基底生成される丁寧語 B の「です」がモーダル述語の直後に現れている。また、(67)に示すように、TP の下位に生成される丁寧語 A は、モーダル述語の補部位置には表出できない。(66)と(67)における丁寧語の分布は、(61)の分布と並行的である。

(66) a. 太郎は来るかもしれないです。
b. 太郎は来るにちがいないです。

(67) a. *太郎は来ますかもしれない。
b. *太郎は来ますにちがいない。

「じゃん」が MP 主要部であり、「じゃない」が二重節構造を持つことは、終助詞の「の」に関する事実からも支持される。終助詞の「の」は疑問文や平叙文で用いられる。(68)で示されるように、上昇調で発話されれば疑問文となり、下降調で発話されれば平叙文となる。

(68) a. 太郎は来たの？　　b. 実は太郎も来たの。

(69)a,b に示すように、丁寧語と共起できるので、「の」は AddrP を補部に取ることができる。ちなみに、このような発話をするのはもっぱら女性話者であり、男性話者が発話することはそれほど多くない。本論では、(69)a,b を男性話者があまり使用しないのは、文法上の制

ん」のように、丁寧語 A の「ます」を表出させることが可能である。このことからも、「かもしれない」や「にちがいない」が TP より下位に基底生成されていることが分かる。また、伝聞を表す「そうだ」についても、「太郎は帰ったそうでございます」のように、「ます」が生起できることから分かるように、TP の下位に基底生成される。一方で、丁寧語 B が起こる文では、「ます」を含む「でございます」との交替が不可能であり、「*太郎は優しかったでございます」のような文は容認度の低い文となる（役割語としての解釈は除く）。これは、丁寧語 B の「です」が Addr に基底生成される要素であり、この位置に、「ます」が現れることができないためである。

[59] モダリティの階層関係に関する統語論・意味論的研究には、Butler (2003) や Hacquard (2006) などがある。

限によるものではなく、単に慣習的な事情によるものであると仮定する。一方で、(69)c から、M 主要部の「だろう」は「の」の補部に現れ得ないことがわかる。この観察に基づくと、(70)のように、終助詞の「の」は TP または AddrP を補部に選択すると規定できる。（「の」の構造位置については第 4 章で議論する。）

(69) a. この前六本木に行ってきましたの。
b. 本当に美味しいですのよ。
c. *太郎は来るだろうの。

(70) *-no* 'PRT' [TP or AddrP _____]

そうすると、「じゃん」は MP の要素なので、(69)c と同じように非文となることが予測される。一方、「じゃない」は TP の下位に起こる語なので、「の」と共起できることが予測される。この予測は正しく、(71)のように、「の」は「じゃん」とは共起できず「じゃない」とは共起できる[60]（松丸 (2001)）。このように、「じゃん」は CP 領域に起こる要素であるが、「じゃない」は TP の下位に起こる要素であるという違いがある。

(71) a. *だから言ったじゃんの。（非命題確認要求表現）
b. だから言ったじゃないの。（非命題確認要求表現）

ここまで見てきたように、非命題確認要求表現の統語構造は、命題確認要求表現とは違って、いくつかのバリエーションがある。「じゃん」と関西方言の「やん」は MP に基底生成される主要部である。一方、非命題確認要求表現の「じゃない」は TP を補部に取り、二重節の構造を持つ。非命題確認要求表現の「じゃん」・「やん」・「じゃない」は、意味の上では類似しているが、構造的には区別されなければならないのである。

4. 「まい」の統語と形態

日本語の推量辞としては、「だろう・でしょう」以外にも、日常会話ではあまり使われることはないが、書き言葉で使われる語に「まい」がある。「まい」は、否定事態に対する話し手の推量を表す推量辞の一種である。「だろう」は、肯定事態と否定事態の両方に対して推量を表すことができるが、「まい」は、否定事態専用の推量表現である。(72)では、話し手が「太郎は来ない」と推量していることが伝達される。「太郎は来ないだろう」と論理的には同じ意味である。本節では、「まい」は MP の主要部であり、TP または AddrP を補部に取るが、形態論的には動詞に接続するという性質があるので、統語と形態の両方に課される条件を満たさなければならないことを示す。

---

[60] 命題確認要求表現の「じゃない」も、(i)のように、「の」と共起できる。これは、命題確認要求表現の「じゃない」が TP の下位に生起する要素であることによる。
(i) もしかして合格じゃないの。（命題確認要求表現）

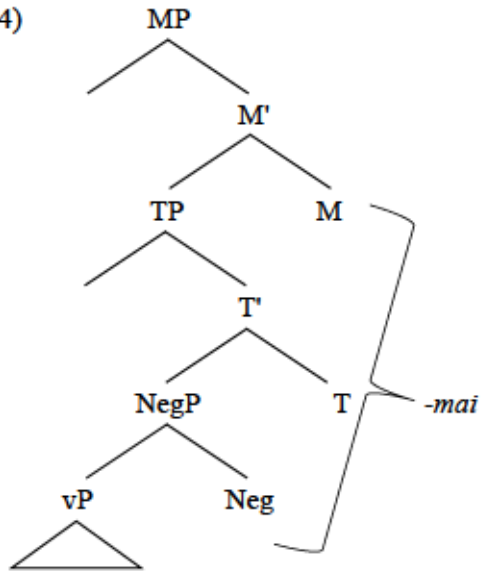
(72) 太郎は来るまい。

田川 (2009) と岸本 (2011) は、分散形態論の遅延挿入を仮定して、「まい」を NegP から MP までの投射を跨ぐ要素として規定している（Halle and Marantz (1993, 1994); Bobaljik (1994, 1995); Harley and Noyer (1999) など）。この仮説は、(73)に示されるように、時制要素の「た」や否定要素の「ない」が「まい」の左側に起こらないことから支持が得られる。「まい」が挿入される構造位置には、NegP と TP が含まれるので、他の時制要素や否定要素とは共起できない。

(73) a. *太郎は来たまい。　　b. *太郎は来ないまい。

(74)に示されるように、「まい」が Neg・T・M に対応した出力形式であると考えれば、(73)の非文法性を説明できる。この仮説に従うと、一つの主要部に対して複数の語彙が挿入されることがないので、Neg・T・M に対応する「まい」は T に対応する「た」と Neg に対応する「ない」とは共起できないということになる。つまり、語彙挿入の規則から共起制限を導くことができる。

(74)



本論では遅延挿入を仮定していないので、(73)の不適格さは語彙挿入の規則からは説明できない。(73)が許容されないのは、語彙挿入によるものではなく、「まい」の統語と形態が対応していないことに起因するものであると考えられる。第 2 章でも見たように、「まい」は丁寧語 A の「ます」と共起できるので、「まい」は AddrP または TP を補部として選択していると考えられる。

(75) a. 太郎は来ますまい。

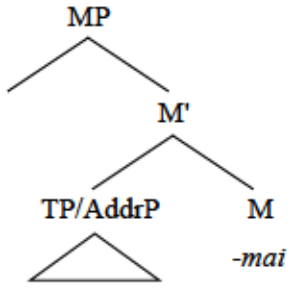
b. *-mai* [TP or AddrP _____]

ただし、「まい」には形態的制限が課される。(76)a に示すように、形容詞には接続できない。また、(76)b のように、丁寧語であってもコピュラの性質を持つ「です」は補部に取れない。これは、「まい」が動詞に接続しなければならないからである。丁寧語の「ます」は動詞の一種なので、「まい」を接続させることができる。しかし、形容詞やコピュラは動詞ではないので、(76)は容認されない。

(76) a. *太郎は面白いまい。　　b. *太郎は学生ですまい。

そうすると、(73)a と(73)b も統語的な要因ではなく、「まい」が動詞に接続しなければならないという形態的な制限から排除できる。過去時制の「た」と否定辞の「ない」は動詞ではないので非文と判断される。本論では、(77)に示すように、「まい」は MP の主要部に生起すると仮定する（cf. Urushibara (2009); 漆原 (2011)）。構造的には TP や AddrP が投射するが、形態的には動詞にしか付けないという制約があるので、(73)は非文となるのである[61]。

(77)



「まい」は M 主要部なので、MP より上位の投射の主要部と共起できる。(78)a の「か」は Force 主要部なので、「まい」の直後に現れる。(78)b では「まい」が E 主要部の「よ」と共起している。(78)c では「まい」が SR 主要部の「ね」と共起している。

(78) a. 太郎が犯人ではあるまいか。
b. 太郎は犯人ではあるまいよ。
c. まさか太郎が犯人ではあるまいね。

第 2 章で記述したように、「まい」は動詞の終止形だけでなく、動詞の未然形に接続することも可能である。(79)a では、動詞の「できる」の未然形に「まい」が接続している。一方で、(79)b に示しているように、丁寧語の「ます」の未然形である「ませ」に「まい」を接続させ

[61] 過去時制の「た」とは対照的に「る」形は、「まい」の接続が可能である。この場合、「る」は TP の主要部に生起しているわけではなく、動詞の不定形として vP に現れていると考えられる。「る」は動詞の一部として現れるので、「まい」の接続が可能となる。
(i) a. 太郎は来るまい。
b. *太郎は来たまい。

ることはできない。これは、第2章で観察したように、現在の日本語の文法では、「ませ」は否定要素の「ん」や時制要素と一語化しているからである。(79)b では、「ませ」の直後に否定要素の「ん」が現れていないため、「まい」の後続は許されない。

(79) a. 太郎にはそんなことはできまい。
b. *太郎にはそんなことはできませまい。

以上のように、否定推量を表す「まい」は、統語と形態にある種の不一致が生じているため、他のモダリティ要素とは異なる性格を有している。統語的には AddrP または TP を補部に取ることができるが、同時に、動詞に接続しなければならないという形態的な特徴を持っているので、形容詞や時制要素などの動詞ではない範疇に接続することはできない。この点で、「まい」は、形態的な制約が課されない他のモダリティ要素とは大きく異なっている。

5. 補文標識の「こと」と「ように」

本節では、補文標識の「こと」と「ように」は、TP または AddrP を補部に選択する MP の主要部であると主張する。内堀 (2007) は、補文標識の「こと」と「ように」の補部に丁寧語が表出できることを観察している[62]（Yoshimoto (2017), Miyagawa (In press) も参照）。(80)に例を示している。

(80) a. 益々ご活躍されますことをお祈りいたします。
b. 今後ともご協力頂きますようにお願い申し上げます。

「こと」節と「ように」節内には、MP より上位の要素は現れることはできない。(81)や(82)では、MP 主要部の「だろう」や EP 主要部の「よ」、SRP 主要部の「ね・な」が「こと・ように」節に表出しているが、いずれも非文である。補文標識の「こと」と「ように」は MP の主要部であるから、同じく MP 主要部の「だろう」とは共起できない。また、EP や SRP の主要部とも共起できない。

(81) a. *益々ご活躍されるだろうことをお祈りいたします。
b. *益々ご活躍される｛よ／ね／な｝ことをお祈りいたします。

(82) a. *今後ともご協力頂くだろうようにお願い申し上げます。
b. *今後ともご協力頂く｛よ／ね／な｝ようにお願い申し上げます。

「こと」と「ように」が TP または AddrP を補部に選択すると仮定することで、上記のデータを捉えることができる。

[62] 「こと」と「ように」が補文標識であることについては、井上 (1976)、柴谷 (1978)、藤井 (2016) を参照されたい。

付け加えると、主節に丁寧語が現れない場合は、(83)のように、「こと」節や「ように」節には丁寧語は生起できない。

(83) a. *益々ご活躍されますことをお祈りする。
b. *今後ともご協力頂きますようにお願い申し上げる。

このことには、語用論的な要因が関係していると考えられる。埋め込み節に丁寧語が現れる文は、(80)から分かるように、丁寧度が非常に高い文となる。そのような文体を Harada (1976) に従い、極丁寧の文体（hyperpolite styles）と呼ぶことにしよう。（「でございます」のような丁重語も極丁寧の文体の一種である。）そうすると、埋め込み節に現れる丁寧語には次のような語用論的な生起条件が課されると考えることができる。

(84) 「ように」や「こと」が導入する埋め込み節に表出する丁寧語は、極丁寧の文体（hyperpolite styles）において現れなければならない。

この条件に基づくと、(83)は、上記の生起条件の違反であるとみなすことができる。

また、通常程度の丁寧さを表す際に、埋め込み節に丁寧語が現れにくいという事実も捉えられる。(85)は、埋め込み節と主節の両方に丁寧語が現れているにもかかわらず、不適格である。(85)では、主節に丁寧語が現れているが、主節の動詞周辺に尊敬語や謙譲語が使用されていないことから分かるように、(80)とは文体が異なっている。(80)が極丁寧の文体であるのに対して、(85)は通常の丁寧体（polite styles）である。(84)の生起条件に違反するため、(85)は不適格となる。

(85) a. ?*益々活躍しますことを祈ります。
b. ?*これからも協力してくれますように願います。

このように、埋め込み節の丁寧語の生起には文体（speech levels）が関与している。主節に丁寧語が現れていれば必ず、埋め込み節にも丁寧語が生起できるというわけではないことに注意する必要がある。（主節に起こる丁寧語が埋め込み節を認可するといった分析は成立しない。）

6. まとめ

本章では、日本語におけるモダリティ要素のバリエーションとそれぞれの統語特性について論じた。特に、推量辞の「だろう・でしょう」、非命題確認要求表現の「じゃん・やん」、否定推量を表す「まい」を取り上げた。まず、推量辞の「だろう」は MP の主要部であり、TP を補部に選択する。一方、「でしょう」は TP または AddrP を選択し、複文構造を持つ。推量辞は常に MP の主要部にとどまっているわけではなく、確認要求で用いられる場合は、SR への主要部移動を起こす。また、意志・勧誘を表す「（よ）う」が MP の主要部であるこ

とも論じた。「ましょう」は TP の下位に起こり、MP に移動すると論じた。次に、非命題確認要求表現の「じゃん」と「やん（関西方言）」はどちらも MP の主要部であるが、「じゃん」は TP のみを補部選択し、「やん（関西方言）」は TP または AddrP を選択する。非命題確認要求表現には「じゃない」もあるが、「じゃない」は CP の主要部ではなく、二重節の構造をもち、TP 以下に位置する表現である。また、命題確認要求表現の「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」は TP より下位に起こる。否定推量を表す「まい」は M の主要部として AddrP または TP を補部選択する。しかしながら、動詞に接続しなければならないという形態的な制限があるために、動詞句に起こる「ます」とは共起できるが、コピュラ化して動詞性を失っている「です」とは共起することができない。最後に、補文標識の「ように」と「こと」は AddrP または TP を補部選択する。

以下は、本章で扱った文末要素と階層構造との関係をまとめた一覧表である。行は文末要素、列は CP 領域に生起する主要部の補部選択と構造位置を表している。また、✓は文末要素の生起位置、→は主要部移動を表している。また、「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか」は CP 領域の主要部ではないので、補部選択は空欄のままにしている。

	CP 領域の主要部の補部	構造位置		
		Lower than TP	MP	SRP
-daroo（推量）	TP		✓	
-desyoo（推量）	TP or AddrP	→	→	
-(y)o（意志）	—		✓	
-masyo（意志）	—	→	→	
-daro（確認要求）	TP		→	→
-desyo（確認要求）	TP or AddrP	→	→	→
-zyanai（命題確認要求）		✓		
-zyanai（非命題確認要求）		✓		
-zyane		✓		
-zyanaka（長崎方言）		✓		
-zyan	TP		✓	
-yan（関西方言）	TP or AddrP		✓	
-mai	TP or AddrP		✓	
-koto, -yooni（補文標識）	TP or AddrP		✓	

第 4 章　分裂文の統語構造

1. はじめに

本章では、日本語の分裂文の統語構造について考察する。分裂文とは、(1)のような形式を持つ構文である。「の」で導入される節は前提（presupposition）を表すことから前提節と呼ばれ、「タンスの中から」は焦点（focus）と呼ばれる。分裂文はコピュラ文の一種なので、「だ・である」が文末に生じる。

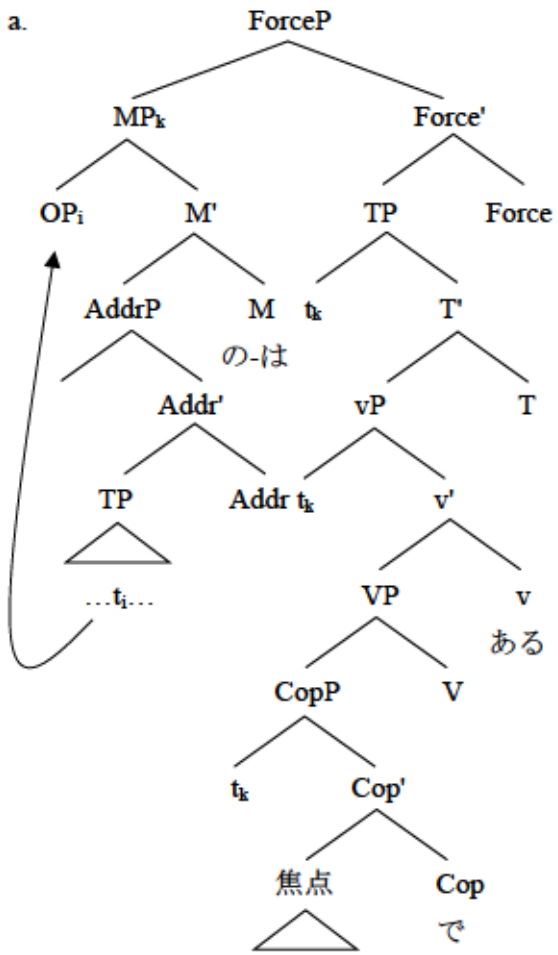
(1)　[虫が t_i 出てきたのは]タンスの中から$_i$｛だ／である｝。

生成文法の枠組みでの分裂文研究では、分裂文に移動操作が関与していることが広く知られており、これまでの研究では、移動の効果を説明することに焦点が当てられてきた。Hoji (1990) や Kizu (2005) は、空演算子の移動を仮定することで、移動の制約の違反を捉えることを試みている。また、Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) は、焦点要素が前提節の内部から抜き出されるとする直接移動分析を提案している。

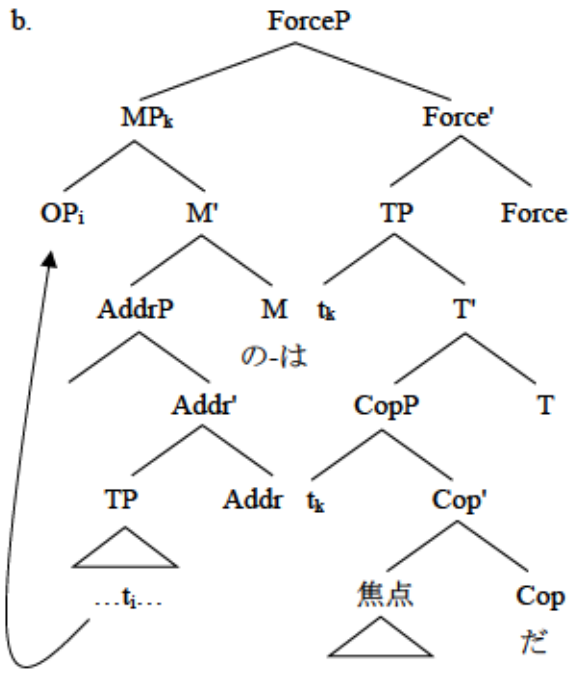
一方で、日本語の分裂文が持つ統語構造の全体像を明らかにする試みはそれほど積極的に行われてこなかった。本章では、分裂文の構造として、(2)に示す統語構造を提案する。この統語構造には、先行研究で提案されている構造との相違が三点ある。まず、コピュラの構造位置である。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) は、分裂文の「だ」は CP の領域に現れると主張している。しかしながら、丁寧語との比較や伝聞を表す「そうだ」の埋め込みに関わるデータから、コピュラが CP 領域ではなく TP の下位に起こっていることが示唆される。また、推量辞の「まい」の接続に関する事実から「である」は Cop-V-v、「だ」は Cop と関係付けられることを示す。次に、焦点要素（「タンスの中から」）は CP 領域ではなく、CopP の補部に現れる。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) は、焦点移動（focus movement）によって焦点要素は FocP の指定部に移動すると主張している。しかし、未確定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語に関わるデータから CP 領域に現れていないことが確認できる。最後に、前提節は [MP [AddrP [TP …]] の] の構造を持つと主張する。一般的な分析では、「の」は TP を補部に取る CP の主要部であるとされるが、丁寧語が「の」節に現れうることから、「の」は TP または AddrP を補部に取ると論じる。

日本語の分裂文の全体像を明らかにする試みは、空演算子分析と直接移動分析の対立に対しても示唆を与える。未確定代名詞束縛・「も」の等位接続や丁寧語の埋め込みのテストは直接移動分析に対する反例を提供する。本論では、それらのデータが空演算子分析の問題とならないことから、空演算子移動分析を採用する。(2)のように、空演算子は前提節内で移動を起こすと仮定する。

(2) a.



b.



本論の議論は以下のように進める。まず、2 節では先行研究の議論を整理し、主に直接移動分析と空演算子移動分析の対立について概観する。3 節では、コピュラの構造位置について論じる。時制要素の接続と伝聞の「そうだ」の補部への埋め込みのテストから、コピュラの「だ・である」は CP 領域の主要部ではなく、TP の下位に生起することを示す。さらに、「まい」の接続の可否に基づいて、「だ」は CopP の主要部、「である」は Cop-V-v に対応する主要部であると主張する。4 節では、分裂文の焦点要素の構造位置について考察する。未確定代名詞の束縛・「も」の等位接続・主格主語に関わるデータから、焦点要素は焦点移動を起こさず、CopP の補部にとどまることを示す。5 節では、分裂文の前提節の統語構造について議論する。前提節に丁寧語を埋め込むことができることから、前提節を導入する「の」は MP の主要部であり、AddrP または TP を補部に選択すると論じる。6 節は本章のまとめである。

2. 空演算子移動分析と直接移動分析

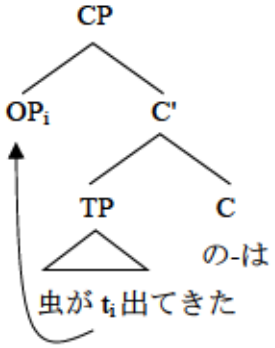
本節では、分裂文の先行研究について整理する。はじめに、分裂文の派生には移動が関与していることが知られている（Hoji (1987, 1990)）。(3)では、関係節の内部から前置詞句が焦点位置に移動しており、非文である。この例は、いわゆる複合名詞句制約（Complex NP

Constraint）の違反である（Saito (1985)）。このことから、分裂文研究では、日本語の分裂文の派生には移動が関与していると考えられている。

(3) *太郎が[[虫が t_i 出てきた]日を]覚えているのはタンスの中から$_i$｛だ／である｝。

分裂文の派生における移動分析には、空演算子移動分析と直接移動分析がある。まず、空演算子分析によれば、(4)に示すように、前提節の内部で空演算子の移動が起こる（Hoji (1990); Matsuda (1998); Kizu (2005)）。(3)の例では、空演算子 OP が複合名詞句を飛び越えて CP の指定部に移動するため、島の制約に抵触し、非文となる。（なお、空演算子と焦点要素は叙述関係（predication relation）によって同定される（Hoji (1990: Ch. 5, 75); Kizu (2005: 36)）。）なお、「の」は CP の主要部であると仮定されている（Murasugi (1991) も参照; cf. Matsuda (2000)[1]）。

(4)



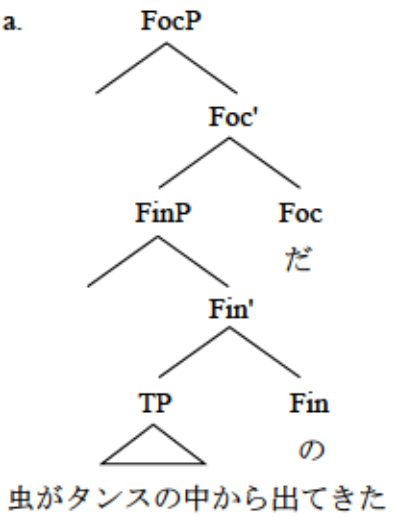
他方、直接移動分析では、焦点要素ははじめ前提節内部に生起し、焦点化移動によって CP 領域に移動する（Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012); Hasegawa (1997); Tatsumi (2013); Noguchi (2020, 2021)）。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) によれば、分裂文は「のだ」文から派生される。例えば、(5)a の分裂文は、(5)b の「のだ」文を基底とする。

(5) a. 虫が出てきたのはタンスの中からだ。
b. 虫がタンスの中から出てきたのだ。

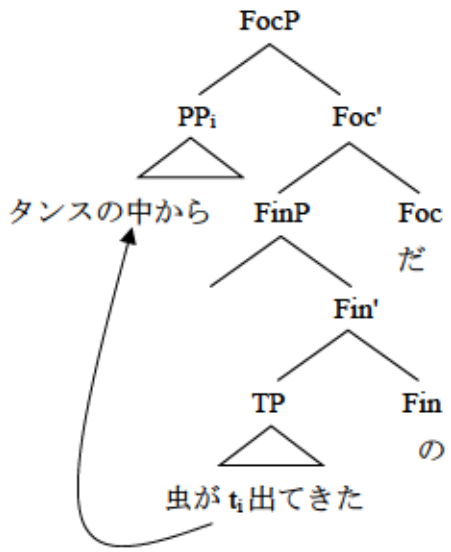
より具体的には以下のような派生を経て、分裂文が形成される。まず、分裂文の基底構造となる「のだ」文は(6)a のような構造を持つ。「の」は FinP の主要部、「だ」は FocP の主要部と仮定されている（cf. Tatsumi (2013)）。次に、(6)b のように、TP の内部から焦点要素が FocP の指定部に移動する。最後に、(6)c のように FinP が話題化（Topicalization）によって TopP の指定部に移動する。

[1] Harada (2016, 2018) は、「の」を C 主要部であるとしながらも、前提節は、非顕在的な名詞を含む [$_{NP}$ [$_{CP}$ … e … *no*] N] の構造を持つと主張している。また、那須・依田・秋本 (2021) は、「の」が名詞句の主要部である可能性を示唆している。

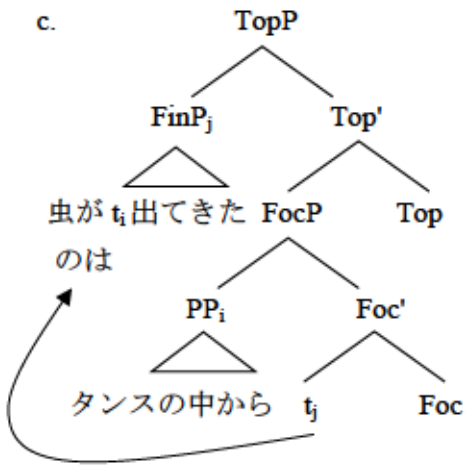
(6) a.



b.



c.



「だ」の FocP 主要部分析は、Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) 以外の文献でも、Hiraiwa and Kobayashi (2019)、Ono (2006)、Kuwabara (2013)、Maeda (2014)、Takano (2015)、西垣内 (2016)、Takahashi (2006, 2020)、遠藤・前田 (2020) などの文献で採用されており、非常に影響力の強い分析である。コピュラを CP 主要部と見るべき積極的な根拠は挙げられていないが、コピュラは焦点要素へと文法化するという通言語的な傾向があることから「だ」の FocP 主要部分析が提案されている（Hiraiwa and Ishihara (2012: footnote 10); Kuwabara (2013)）。

このように、日本語の分裂文に関する先行研究では、移動の制約に関わるデータをいかに説明するかという点に焦点が当てられてきた。一方で、日本語の分裂文がどのような統語構造を持っているかについてはこれまで積極的な説明は与えられてこなかった。本章は、移動の制約以外の面にも視野を広げることで、これまでに気づかれていない言語事実を掘り起こすことを目的とする。

ちなみに、分裂文の派生には常に移動が関与するわけではない。関連性（aboutness）が絡むと、移動の制約が観察されないケースもある（Hoji (1987, 1990)）。(7)の文では、焦点位置に現れている要素と「訪れる」の補部が同一指示の関係にある。「訪れる」の補部は関係節内にあるので、仮に移動が関与しているのであるとすれば、移動の制約の違反によって非文

となることが予測される。しかしながら、実際には容認可能な文である。このように、関連性（aboutness）が関与する場合、移動の制約の違反が観察されない。Hoji (1990) は、このような文では移動は起こらず、*pro* が現れるとしている。（Kizu (2005) は、(7)のような文でも空演算子移動が起きていると主張している。）

(7) [*pro* 訪れた人]が幸せになれるのはあの島｛だ／である｝。

関連性（aboutness）によって認可される分裂文は、移動の制約が関与する通常の分裂文とは区別される。本論では、移動が関与するタイプの分裂文を中心に扱うが、分裂文と疑似分裂文は、（空演算子移動の有無を除いては）基本的に同じ構造を持つと考えて差し支えない。

以下では、移動の制約が観察される格助詞や後置詞付きの焦点要素が現れる文を用いる[2]。ただし、分裂文の焦点要素が主格や対格で標示されるケースでは容認度に個人差がある。Nishiyama, Whitman and Yi (1996) は、(8)に示される、主格あるいは対格で標示される焦点要素はどちらも容認不可能と判断している。また、Shimoyama (1995: 15, footnote 5) では、容認不可能とはされていないものの、主格標示のデータには??、対格標示のデータには?が付されている。他方、Hiraiwa and Ishihara (2012) では、主格標示の例には*、対格標示のデータには個人差が認められることを表す%が付されている。このように、主格や対格で標示される焦点要素は、容認度にばらつきがある[3]。

(8) a. %その本を読んだのは花子<u>が</u>だ。
b. %花子が読んだのはその本<u>を</u>だ。

このような事情から本論では主格・対格標示のデータは扱わない。かわりに後置詞でマークされるデータを提示する。(9)では、後置詞の「から」でマークされた焦点要素が現れている。このデータは、(8)に比べて容認度が高く、自然な文である。分裂文の先行研究では、対格標示のデータが頻繁に用いられているが、本論ではより容認度の高い、焦点要素が後置詞でマークされるデータを使用する[4]。

---

[2] Hiraiwa and Ishihara (2012) は、焦点要素に格助詞や後置詞が付く文を分裂文と呼び、付かない文を疑似分裂文と呼んでいる。分裂文は、島の効果を示し、疑似分裂文は島の効果を示さないと論じられている。ところが、実際には、格助詞が付かないケースでも島の効果が観察される場合がある。(i)は、Hiraiwa and Ishihara (2012) の分類では、疑似分裂文にあたるが、格助詞が無いにもかかわらず、非文と判断される。
(i) *太郎が[[花子があげた]人]を軽蔑しているのは雑誌だ。

[3] Nishiyama et. al (1996) は、主格や対格のような構造格（structural Case）は焦点位置に現れにくいという一般化を提出している。

[4] 主格や対格で標示される焦点要素は、多重分裂文（multiple cleft construction）では容認度が上がることが知られている（Koizumi (1995, 2000); Kuwabara (1996); Takano (2002)）。ただし、高野 (2020) によれば、多重分裂文では移動の制約の違反が観察されない。高野 (2020) の観察が正しければ、単一の焦点要素が現れる分裂文は多重分裂文とは異なる構文であるということになる。本論では、多重分裂文の統語構造については特に議論しない。

(9) 太郎が出てきたのはあのビルからだ。

3. コピュラの構造位置

本節では、コピュラの「だ」と「である」は CP 領域の主要部ではなく、TP の下位に基底生成されると論じる。さらに、コピュラの「だ」は CopP の主要部、「である」は Cop-V-v に対応することを示す。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) 等の文献では、「だ」は FocP の主要部であるとされるが、複数のテストから、FocP 主要部仮説の問題点が明らかになる。

第 2 章で示したように、日本語の時制要素には「た・て」がある。(10)に見られるように、分裂文に現れる「だ」と「である」は両方とも時制要素の「た」の接続を許す。このため、「だ」と「である」は TP の下位に基底生成されると考えるのが妥当である[5]。

(10) 太郎が出てきたのはあそこから｛だっ／であっ｝た。

「て」の接続については、「である」と「だ」で対比が観察される。(11)は「である」に「て」を接続させることができることを示している。

(11) 太郎が出てきたのはあそこからであって、こちらからではない。

一方で、(12)に示されるように、「て」は「だ」には接続できない。

(12) *太郎が出てきたのはあそこからだって、こちらからではない。

(12)の不適格性には、統語的な要因ではなく、活用が関係している。コピュラの「だ」は従属節を作るとき、(13)に示されるように、「で」になり、「だって」という語形は許されない。「て」の接続のテストが「だ」に対して適用できないのはこのためである。いずれにしても、「た」の接続は「だ」と「である」共に可能なので、コピュラの基底生成位置は TP の下位であるということができる。

(13) 太郎が出てきたのはあそこからで、こちらからではない。

(10)と(11)のデータからのみでもコピュラの FocP 主要部分析が妥当でないことが示唆されるが、「だ」や「である」が主要部移動によって FocP に移動している可能性もある。この可能性は伝聞の「そうだ」への埋め込みのテストから排除される。第 2 章で示したように、伝聞の「そうだ」は TP を補部に取る。このため、CP 領域の主要部は補部位置に表出できない。仮に「だ」と「である」が FocP に主要部移動する要素なのであれば、伝聞の「そうだ」への

[5] Hiraiwa and Ishihara (2012) や Hasegawa (2011) は、時制要素の接続は問題にならないとしているが、具体的な「た」の構造位置については論じられていない。

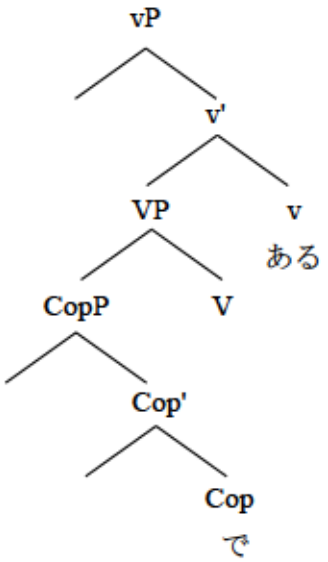
埋め込みが不可能であることが予測される。ところが、実際には(14)に見られるように、コピュラの「そうだ」への埋め込みは可能である。

(14)　［太郎が出てきたのはあそこから｛だ／である｝］そうだ。

このことから、コピュラの「だ」と「である」は、CP の領域に主要部移動を起こしているのではないと結論付けることができる。このテストは、「た・て」の接続のテストとともに、「だ」と「である」は TP の下位に基底生成され、主要部移動を起こさないことを強く示唆している。

そうすると、次に問題となるのは、「である」と「だ」が具体的にはどのような構造位置に存在するかという点である。まず、「である」については(15)のような構造を仮定する。下から CopP、VP、vP の投射を立てる。CopP の主要部には「で」が起こる[6]。「ある」は通常の動詞であると見て、分離動詞句構造を仮定する（Chomsky (1995)）。

(15)



「である」が「で」と「ある」の二つに分かれる理由としては、(16)のように、「で」と「ある」の間に取り立て詞の挿入が可能であることが挙げられる。(16)では、取り立て詞の「は」

[6] Kizu (2005) は「で」を後置詞であると仮定している（Nakayama (1988) も「で」を後置詞であるとしている）。Kizu (2005) によると、分裂文に現れる「で」は場所・理由・目的を表す後置詞の「で」と同一の形態素である。すでに述べたが、(ia)に示しているように、対格標示の焦点要素を容認する話者が一定数存在する。(ia)では対格の「を」の直後に「で」が現れている。一方で、(ib)では対格の「を」に後置詞の「で」が現れているが、一般に、構造格の直後に後置詞を接続することは不可能なので、不適格な文である。分裂文における「で」を後置詞と見る仮説では、(ia)は容認されてはならないはずであるが、実際には容認する話者もいることから、「で」の後置詞仮説は妥当ではないと考えられる。

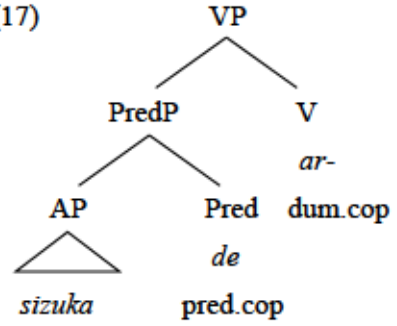
(i)　a. %太郎が読んだのはその本をである。
　　b. *太郎が校庭をで走った。

が「で」と「ある」の間に挿入されている。取り立て詞は語の右端に現れ、語の内部に現れることはできないので、(16)は、「である」が一語ではないことを示している。

(16) たしかにお金が出てきたのはあそこからではある。

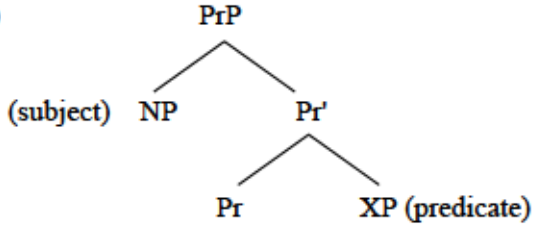
Nishiyama (1999: 189) は、コピュラ文の構造として(17)の構造を仮定している。「で」は PredP の主要部、「ある」は VP の主要部として起こる。

(17)



PredP とは、叙述（predication）に関わる投射である。この投射は Bowers (1993) によって提案された。Bowers (1993) は、PredP とは呼ばずに、PrP と呼んでいる。Pr は、機能範疇の一種である。Bowers (1993) は、指定部に主語（subject）、補部に述語（predicate）が現れる(18)の構造を提案している。補部には、動詞述語、形容詞述語、名詞述語、前置詞述語が現れうる。

(18)



X = {V, A, N, P}　　（Bowers (1993: 595)）

Nishiyama (1999) によれば、「である」文では、「で」のみが叙述に関与し、「ある」は叙述に関与しない。「で」が叙述に関与すると考えられているのは、(19)のように、二次述語文で「で」が義務的に現れるからである。（日本語の二次述語の統語構造については、Kishimoto (2021a, b) や Kishimoto (to appear) を参照。）一方で、「ある」は二次述語文には現れない。Nishiyama (1999: 188) によると、「ある」は意味を持たず、単に時制を支える要素に過ぎない。このため、(17)では、「で」は pred.cop（predicational copula）、「ある」は dum.cop（dummy copula）と表記されている。

(19) 太郎は裸足で走った。

しかし、「ある」を時制を支える要素であると仮定した場合、(20)のデータが問題となる。(20)では、「は」が「ある」の直後に挿入されている。この文では、「ある」は時制を支えているとは考えられない。なぜなら、取り立て詞の「は」の介在によって「ある」と「た」が隔てられているからである。この文では「は」の直後に「する」が挿入されており、この要素が時制を支えている。このデータは「ある」が時制を支える要素ではないことを示している。

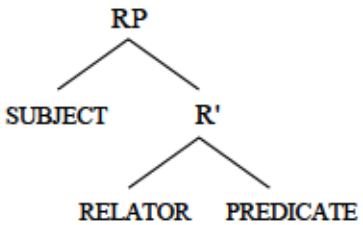
(20) たしかにお金が出てきたのはあそこからでありはする。

本論では、動詞の「ある」は通常の動詞であるとみなし、分離動詞句仮説を採用して(15)の構造を仮定している。

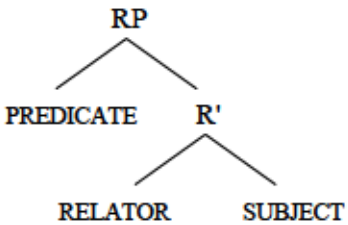
また、日本語の「で」が現れる文では、「で」の補部に述語相当の句が現れるとは限らない。「A は B である」という形式を持つコピュラの叙述文では、B が述部であり、A がその項となる。Bowers (1993) の PrP 仮説に基づくと、A は PrP の指定部、B は補部に起こることになる。他方、「A は B である」という形式を持つ分裂文の場合は、A に変項が含まれ、B はその値に相当する。言い換えると、分裂文においては、A が述部に相当し、B が項に相当する。(コピュラの指定文も分裂文と同じ叙述関係を有する (岸本 (2012))[7]。) そうすると、Bowers (1993) の PrP 分析では、分裂文における叙述関係を捉えることができないと言える (ただし、Tatsumi (2013) も参照)。Bowers (1993) に従うと Pr の補部には述語相当の要素が現れるはずであるが、分裂文では Pr の補部に項相当の要素が現れることになるからである。

叙述に関わる機能範疇としては、PredP・PrP 以外に RP (Relator Phrase) がある[8]。den Dikken (2006) は、Relator という統語範疇を導入している。Relator は、機能範疇であり、主語と述語の叙述を仲介する。(21)に示されているように、Relator が投射する RP の指定部と補部には主語 (subject) と述語 (predicate) が置かれる。ただし、最も重要なのは主語と述語が置かれる構造位置は、予め定まっていないという点である。(21)a では、主語が指定部、述語が補部に置かれる。一方で、(21)b では、述語が指定部、主語が補部に置かれる。

(21) a.



b.



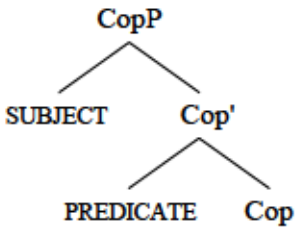
[7] 叙述文と指定文の区別については、Akmajian (1970) や Higgins (1979) を参照。また、日本語のコピュラ文の分析については、長谷川 (1996), 西山 (2003), Niimura (2007), 岸本 (2012) などを参照。

[8] Moro (1997) は、コピュラ文には SC (Small Clause) という投射が含まれるとしている。しかし、SC という投射の性質が不明瞭であることや、外心構造を持つことから、本論では SC 仮説は採用しない。

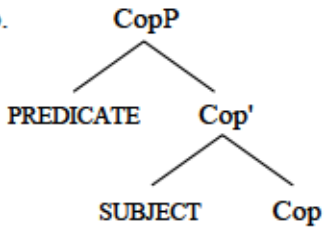
さらに、den Dikken (2006) は、Relator を抽象的な機能範疇（*abstract* functional head）であると仮定している。Bowers (1993) の Pr は、T や C などの他の機能範疇とは異なる独立した機能範疇である。他方、Relator は、T やコピュラ、P、Top など様々な機能範疇が現れるプレースホルダーとしての役割を持つ。RP が抽象的な機能範疇（*abstract* functional head）とされるのはこのためである。

日本語に RP が存在するかどうかについては、より広範に叙述関係を考察する必要がある。少なくとも、「で」の補部には、述部に相当する要素のみならず、分裂文の焦点のように、（述部ではなく）項に相当する要素が現れることができる[9]。このことから、RP と同じように、CopP は叙述の方向性が予め定まっていない句であると規定する。CopP は、(22)における両方の構造を取ることができる。（Harada (2016) は、RP 仮説を採用し、「で」は R 主要部であると想定している。）

(22) a.



b.



Bowers (1993) の PrP では、叙述の方向性がはじめから定まっている。このため、分裂文のように、叙述関係が逆転するようなケースは適切に捉えることができない。CopP は叙述関係に関わる句であるという点では、PrP や PredP と共通しているが、叙述の方向性が決まっていないという点で異なる。

次に、「だ」の構造位置について考察する。Nishiyama (1999) は、「だ」は「である」の縮約形であると分析している。しかしながら、「だ」が「である」の縮約形であるとすると問題が生じる例がある。否定推量の「まい」の接続の可否から「だ」は「である」の縮約形でないことが示唆される。第 2 章の 3.2 節や第 3 章の 4 節で詳しく論じたように、「まい」は動詞の終止形や未然形に接続する。(23)a は、「である」に「まい」が接続できることを示している。「である」に含まれる「ある」は動詞なので、「まい」の接続が可能なのである。

---

[9] ただし、den Dikken (2006: Chapter 4) は、英語の指定文に対して次のような分析を与えている。(ia)は、主語-述部の順に現れる指定文であり、(ib)は、述部-主語の順に現れる指定文である。den Dikken (2006: Chapter 4) によれば、(ib)の指定文は(ia)と同一の基底構造を持つ。

(i) a. John is the best candidate.
b. The best candidate is John.

具体的には、(i)の両文は、(iia)に示されるような RP 構造を有する。主語の John が RP の指定部に現れ、述部の the best candidate が RP の補部に生起する。一方で、いくつかのデータに基づき、(ib)は(iib)の基底構造は持ち得ないとしている。

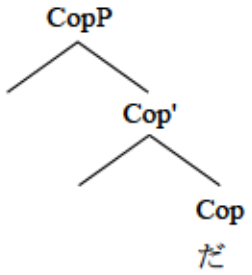
(ii) a. be [$_{RP}$ [$_{DP}$ John] RELATOR [$_{DP}$ the best candidate]]
b. be [$_{RP}$ [$_{DP}$ the best candidate] RELATOR [$_{DP}$ John]]

日本語の指定文の基底構造については、今後の課題とする。

(23) a. お金が出てきたのはあの穴からではあるまい。
b. *お金が出てきたのはあの穴からだまい。

一方で、(23)b のように、「だ」には「まい」は接続できない。Nishiyama (1999) が言うように、「だ」が「である」の縮約形なのであるとすれば、(23)b は容認されるはずである。(23)b の非文法性は、「だ」が動詞の特性を失っていることを示している。「だ」は動詞ではなくなっているため、「まい」の後続を許さないと考えられる。本論では、「だ」は「である」が動詞句を失ったものであると考えて、(24)のような構造を仮定する。CopP の主要部に「だ」が置かれると想定する。

(24)



「である」と「だ」は、異なる構造を持つと考えられるが、TP の下位に生起する点では共通している。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) に端を発する「だ」の FocP 主要部分析は現在も様々な文献で採用されているが、妥当とは言えないことが本節の議論から支持される。

4. 焦点要素の構造位置

本節では、焦点要素の構造位置について議論する。直接移動分析においては、分裂文の焦点要素は FocP の指定部に移動すると仮定されている。しかしながら、未確定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語に関わるデータから、焦点要素は Cop の補部に位置しており、CP の領域に移動していないことが確認できる。

まず、未確定代名詞の束縛のテストに基づいて、焦点要素が Cop の補部に存在することを示す。未確定代名詞とは「誰」や「何」のように、それ自体では意味を持たず、取り立て詞などから束縛されることで意味が決まる代名詞のことである。(25)では、取り立て詞の「も」によって束縛される「誰」が否定極性表現として解釈される。

(25) <u>誰</u>も彼の論文を読まなかった。

未確定代名詞は、束縛子（「も」など）に C 統御されなければならない（Kishimoto (2001); Hiraiwa (2005)）。(26)a では、取り立て詞の「も」が埋め込み節の CP を C 統御しているので、未確定代名詞の束縛が可能である。一方で、(26)b では、未確定代名詞の「誰」が主節の方に現れているので、束縛が不可能となり、非文と判断されている。

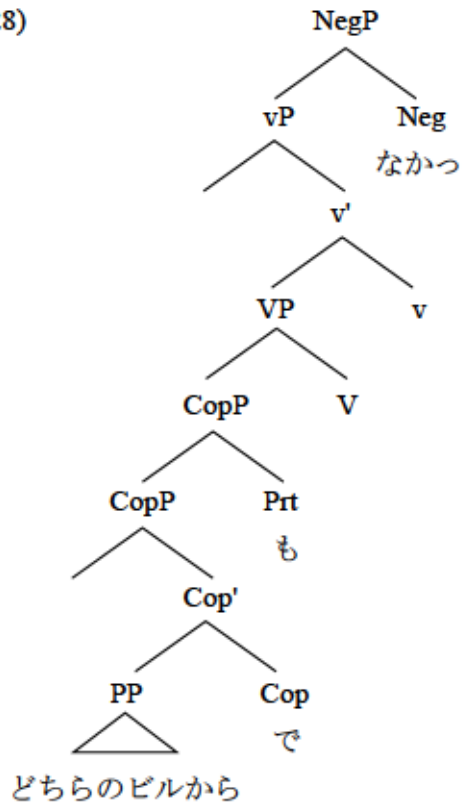
(26) a. 太郎は[誰が来たと]も言わなかった。
b. *誰が[太郎が来たと]も言わなかった。

(27)では、分裂文の焦点位置に未確定代名詞の「どちら」が現れている。この文では、取り立て詞の「も」が Cop 主要部の「で」に付加されている。

(27) 太郎が出てきたのは[どちらのビルからで]もなかった。（別のビルからだった。）

取り立て詞の「も」は「で」に後続しているので、(28)のように、「も」は CopP を C 統御していると考えられる。

(28)



焦点部に未確定代名詞が現れることができるので、焦点要素は少なくとも CopP の下位にあるということができる。本論では、焦点要素は Cop の補部として現れていると仮定する。

FocP の指定部に焦点要素が移動するとする直接移動分析では、焦点要素に含まれる未確定代名詞の束縛は容認されないはずである。(29)に示されるように、FocP は「も」の束縛領域外に投射するからである。このため、未確定代名詞束縛に関する事実は、直接移動分析にとって問題となる。（網掛け部分は「も」の束縛領域である。移動の痕跡が未確定代名詞束縛の対象とならない点については、Kishimoto (2001) を参照されたい。）

(29) [$_{FocP}$ FOCUS [$_{TP}$ [$_{NegP}$ [$_{vP}$ [$_{VP}$ [$_{CopP}$ [$_{CopP}$ [$_{Cop'}$ ~~FOCUS~~ -*de*$_{Cop}$]] -*mo*$_{Prt}$] V] v] *nakat*$_{Neg}$] -*ta*$_{T}$] Foc]

次に、「も」の等位接続のテストから、焦点要素と「で」が構成素をなすことを示す。日本語にはいくつかの等位接続詞が存在する[10]。代表的なものには、(30)に示す連言の「と」・「も」や選言の「か」がある。これらの等位接続詞には第一等位項と第二等位項の両方に現れることができるという特徴がある。連言の「と」は第二等位項の直後に必ずしも現れないのに対し、「も」と「か」は第二等位項の直後に義務的に表出する。

(30) a. [太郎]と[花子]（と）が来た。
b. [太郎]も[次郎]も来なかった。
c. [太郎が来た]か[花子が来た]かだ。

等位接続詞には構成素同士を接続する働きがあり、非構成素は接続できない。(31)では、主語・間接目的語・直接目的語・数量詞が等位接続されているが、いずれも容認されない。これは、主語・間接目的語・直接目的語・数量詞が構成素をなさないことによる。

(31) a. *[太郎が花子に本を三冊]も[次郎が春子に本を三冊]も貸さなかった。
b. *[太郎が花子に本を三冊]か[次郎が春子に本を三冊]か貸した。

Koizumi (1995, 2000) は、等位接続詞の「と」の等位項には構成素をなさない要素同士が現れうることを指摘している。(32)a に例示しているように、構成素をなさないはずの主語・間接目的語・直接目的語・数量詞が等位項として生起している。Koizumi (1995, 2000) によれば、(32)a が容認されるのは、(32)b に示すように、TP 同士が等位接続されているからである。TP は構成素なので、等位接続可能である。動詞と時制要素からなる「借りた」は等位項の外部に現れているが、これは、日本語の動詞が V から C への主要部移動を起こすからであるとしている。

(32) a. [太郎が花子に本を三冊]と[次郎が春子に雑誌を三冊]借りた。
b. [$_{TP}$ 太郎が花子に本を三冊 tv]と[$_{TP}$ 次郎が春子に雑誌を三冊 tv]借りた。

V-T-C 移動

Koizumi (1995, 2000) の分析の妥当性はともかくとして、(32)a において、第二等位項の直後に「と」が現れていないことに注目されたい。(30)a で見たように、「と」は、通常、第二等位項にも表出できる。しかしながら、(33)のように、第二等位項に「と」を付加することはできない。(33)は、(31)が不適格となることと並行的である[11]。

[10] 等位接続詞のバリエーションについては、久野 (1973) も参照。
[11] ただし、(i)に示すように、二つ目の「と」の直後に対格の「を」を付けると容認度が上が

(33) *[太郎が花子に本を三冊]と[次郎が春子に雑誌を三冊]と借りた。

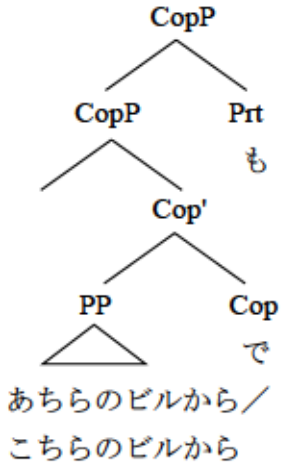
そうすると、日本語では、構成素を認定するテストとして等位接続のテストを用いる場合、第二等位項の直後に等位接続詞が現れるものを使用したほうがよいということができる。

このことを踏まえた上で、次の例を検討する。(34)では、焦点要素と「で」が等位接続詞の「も」によって接続される等位項に現れている[12]。このことは、焦点要素と「で」が構成素をなすことを示している。

(34) 太郎が出てきたのは[あちらのビルからで]も[こちらのビルからで]もない。

(35)に示されるように、焦点要素が Cop の補部に現れる構造を仮定すると、(34)は、構成素である CopP の等位接続であるということができる。一方で、焦点要素の FocP 指定部への移動を仮定する分析では、「ビルから」と「で」は構成素をなさないので、等位接続が不可能であることが誤って予測される。

(35)



一方で、焦点移動分析では、焦点要素は FocP 指定部に位置付けられる。そのような分析では、(36)のように、焦点要素は CopP の外部に位置付けられ、「で」とは構成素をなさないことになるので、(35)の事実に反して、不適格となることが予測される。（片方の等位項のみを表示している。なお、網掛け部分は等位接続を受ける構成素を表す。）

(36) [$_{FocP}$ FOCUS [$_{TP}$ [$_{NegP}$ [$_{vP}$ [$_{VP}$ [$_{CopP}$ [$_{CopP}$ [$_{Cop'}$ ~~FOCUS~~ *-de*$_{Cop}$]] *-mo*$_{Prt}$] V] v] *na*$_{Neg}$] *-i*$_{T}$] Foc]

ると判断する話者も存在する。

(i) %[太郎が花子に本を三冊]と[次郎が春子に雑誌を三冊]とを借りた。

[12] (i)のように、「か」と「と」は「で」の直後に現れることができない。「で」の直後に現れるのは、「も」や「は」のような取り立て詞に限られるからであると考えられる。

(i) a. *太郎が出てきたのは[あちらのビルからで]か[こちらのビルからで]かある。
b. *彼らが出てきたのは[あちらのビルからで]と[こちらのビルからで]とある。

未確定代名詞束縛と等位接続のテストは「である」分裂文には適用できるが、「だ」分裂文には適用できない。このため、「である」分裂文では焦点要素は FocP に移動しないが、「だ」分裂文では FocP に移動するとする分析も考えられる。以下では、「だ」分裂文でも Cop の補部に焦点要素が現れることを示すために、主格主語に関わるデータを提示する。

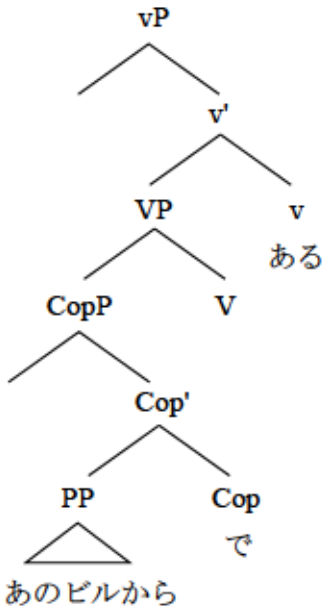
分裂文の前提節は、通常、題目の「は」で標示されるが、主格標示されることも可能である。(37)a のように、連体修飾節に分裂文を埋め込むと前提節を主格で標示しやすくなる。語順に注目すると、主格標示される前提節は焦点要素の「あのビルから」より左側に現れていることがわかる。一般に、主格主語は TP の指定部に移動すると仮定される（Kishimoto (2001) など）。そうすると、焦点要素は、主語の右側に現れなければならないので、TP より下位にあることが示唆される。

(37) a. その有名人が出てきたのがあのビルから｛だっ／であっ｝た可能性
b. *あのビルからその有名人が出てくるのが｛だっ／であっ｝た可能性

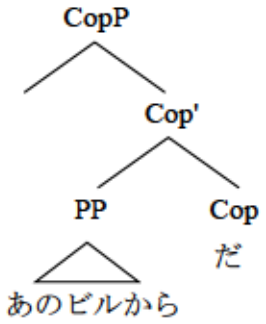
一方で、直接移動分析では、焦点部に置かれる要素は FocP 指定部に移動するので、TP 指定部にある前提節より左側に現れることが予測される。しかしながら、(37)b から明らかなように、焦点要素は主格標示された前提節の左側に現れることはできない。このため、焦点要素は TP より上位の構造位置にあるとは考えられない。

未確定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語に関わるデータは、いずれも、分裂文の焦点要素が CP 領域ではなく、TP の下位にあることを示している。本論では、焦点要素は、(38)に示されるように、Cop の補部に現れると仮定する。(38)a は「である」分裂文、(38)b は「だ」分裂文における焦点要素の構造位置を表している。

(38) a.



b.



本節の議論を終える前に、前提節の主語移動について考察を加える。先述の通り、前提節は主格標示が可能である。統語的には文の主語として機能していると考えられる。生成文法では、主語となる句は、派生の初期段階では、述語が投射する句（vP など）の内部に生起されると仮定されている（Fukui (1986); Kuroda (1988); Sportiche (1988); Koopman and Sportiche (1991); Burton and Grimshaw (1992); McNally (1992); Huang (1993) など）。そうすると、前提節も TP の指定部ではなく、それより低い構造位置に基底生成される証拠があるのかという点が疑問となる。

前提節が TP より下位に基底生成されることは、小節（small clause）の埋め込みから確認できる。(39)に示す「A を B にする」という形式を持つ文において、動詞の「する」は小節を補部に選択する（Kikuchi and Takahashi (1991)）。

(39) 太郎は[$_{SC}$ 花子を担当者に]した。

小節の内部構造を特定することは容易ではないが、副詞の修飾に関する事実から、小節が TP を含まないことが示唆される。(40)に例示するように、時制副詞の「明日」は小節を修飾できない。「明日」のような副詞は時制を修飾するので、TP を修飾すると考えられる。(40)が容認されないことから、小節内には TP は含まれないと仮定する[13]。

(40) *太郎は[花子を明日担当者に]した。

また、(41)のように、小節の主語は主格で標示され得ない。Takezawa (1987) や竹沢・Whitman (1998) が論じているように、主格の認可には TP の主要部が必要であるとすると、(41)が不適格なのは、小節に TP が投射されないからである。

(41) *太郎は[花子が担当者に]した。

さらに付け加えると、小節には動詞句は投射しない。(42)では、「である」の連用形が小節に現れているが、非文である。

(42) *太郎は花子を担当者でありした。

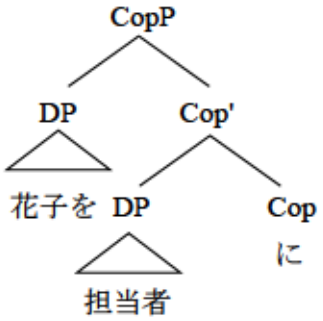
これらの観察に基づき、本論では、小節に現れる「に」はコピュラの「だ」の連用形なので、「A を B にする」の形式を持つ小節は、(43)のように、CopP の構造を持つと想定する[14]（cf. Sode (1999)）。この構造では、対格標示される「花子を」は CopP の指定部に現れ、名

[13] 代案として、小節には非定形の TP が投射している可能性もある（Sode (1999)）。この点については、今後の課題とする。

[14] 奥津 (1978: 91) は、「太郎は花子を担当者にした」のような文は、「太郎は花子を担当者だした」のような文を深層構造として持ち、音韻規則によって「だ」が「に」に変化することで得られると主張している。

詞述語の「担当者」は Cop の補部に現れる。また、「花子を」における対格の「を」は、主節の動詞の「する」によって付与されると考えておく。（CopP 指定部と補部には、項と述語がどの順番で現れても良い。）

(43)



小節の論理主語（「花子を」）が CopP 内に現れていることは、(44)のように、「花子を」と「担当者に」の語順の入れ替えが不可能であることから確認できる。この文が不適格となるのは、「花子を」がかき混ぜによって移動したあとに、さらに CopP に相当する「担当者に」をかき混ぜ移動させることで、適正束縛条件（Proper Binding Condition）に違反してしまうからである（Fiengo (1977)）。「花子を」の痕跡（コピー）を含む CopP が移動すると、「花子を」は痕跡を束縛することができないので、非文となるということができる。

(44) *太郎は[t_i 担当者に]花子を $_i$ した。

論理主語が CopP 内に基底生成されることは、項省略（argument ellipsis）に関するデータからも確認できる（Oku (1998); Kim (1999); Takahashi (2008a, b); Sakamoto (2017, 2019, 2020) など）。Saito (2007) は、一部の構成素が抜き出された句を省略できないことを観察している。(45)では、(b)において、動詞の「言う」の補部にあたる CP が省略されている。

(45) a. 太郎は[花子がその本を読んだと]言った。
b. 次郎も *e* 言った。

一方で、(46)b では、同じく CP 補部が省略されているが、非文である。これは、「あの本を」が CP の内部から移動したあとに、省略が起こっているからである。抜き出し後の省略は不可能なので、(46)b は不適格となる。

(46) a. 太郎はその本を $_i$[花子が t_i 読んだと]言った。
b. *次郎はあの本を *e* 言った。

(47)に示されるように、小節構文においても小節の省略が可能である。この例文では、「花子を担当者に」が省略されている。このことは、小節が主節動詞の「する」の項として現れ

ていることを示している。

(47) a. 太郎は花子を担当者にした。
b. 次郎も *e* した。

一方で、(48)のように、「担当者に」のみを省略することはできない（Sakai et al. (2004)）。小節の論理主語の「春子を」が CopP 指定部に生起していると考えると、(48)b の文を派生するには、「春子を」を CopP から抜き出した後に、CopP を省略する必要がある。抜き出し後の省略は不可能であるから、(48)b は非文となる。

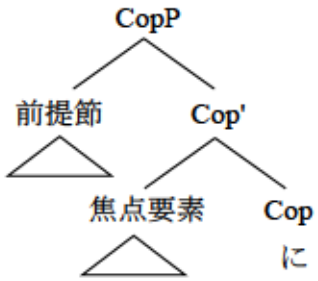
(48) a. 太郎は花子を担当者にした。　　b. *次郎は春子を *e* した。

興味深いことに、小節には分裂文が現れることも可能である。(49)においては、分裂文の前提節の「花子が出てくるの」が対格でマークされている。

(49) 太郎は[花子が出てくるのをあの扉からに]した。

(43)の構造が正しいとすれば、(49)の文は、(50)に示しているように、前提節が CopP の指定部に現れ、焦点要素が Cop の補部に現れる構造を持つということができる。

(50)



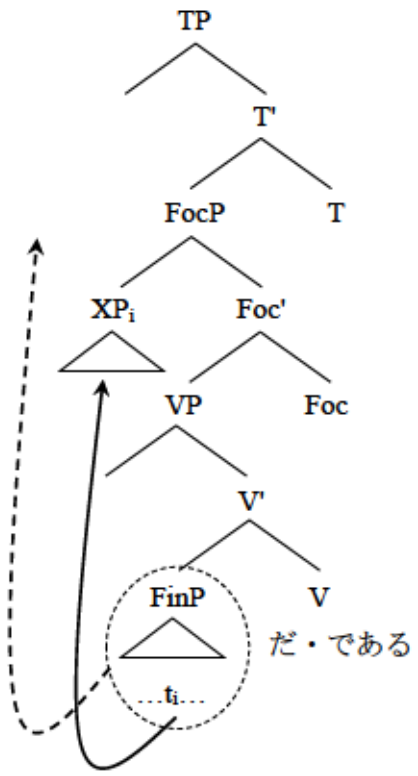
ここで重要なのは、前提節が CopP の内部に含まれている点である。主格主語でマークされる場合は TP の指定部に移動し、また、題目の「は」でマークされる場合は ForceP の指定部に移動すると考えられるが、その移動元は CopP の指定部であると言えるからである。つまり、分裂文の前提節は、CopP の指定部に基底生成されるのである。その後、時制に EPP があるため移動が起こり、CopP より上位の構造位置に移動する。また、題目化が起こる場合は、ForceP 指定部に要素が移動する。（日本語において、題目化が ForceP をターゲットとする点については、第 2 章を参照。）

もちろん、(51)のように、分裂文が埋め込まれる小節においても、「明日」の生起や前提節の主格標示は許されない。この事実は、分裂文が埋め込まれる小節には TP が含まれないことを示している。

(51) a. *太郎は[花子が出てくるのを明日あの扉からに]した。
b. *太郎は[花子が出てくるのがあの扉からに]した。

これらのデータを踏まえ、分裂文においては、直接移動は起こらず、CopP の補部に焦点要素が基底生成されると仮定する。本節の議論を終える前に、Hiraiwa and Ishihara (2012) の代案となりうる他の直接移動分析の可能性について言及する[15]。まず、Yanagida (1996) と Belletti (2004) は、VP と TP の中間に FocP が投射すると論じている。この仮説を分裂文の派生に敷衍すると、(52)のようになる。((52)では、「だ」・「である」に対して、VP を仮定しているが、[vP [VP [CopP …]]] の構造でも同様の派生となる。) 焦点要素が FinP から FocP の指定部に移動した後に、FinP (「の」節) がそれより上位の投射に移動することで、表層の語順が得られる。

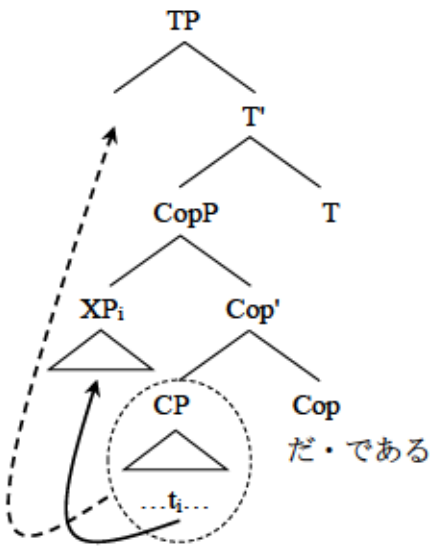
(52)



次に、Park (2021) は韓国語の分裂文を分析しており、(52)に類似した派生を提案している。この分析は日本語でも再現できる。概略、分裂文は(53)のような構造を持つ。焦点要素は、CopP の補部に基底生成される「の」節から抜き出され、CopP の指定部に焦点移動する。Park (2021) の分析では、FocP が仮定されておらず、Cop の主要部が[Foc]素性を担うと想定されている。その後、「の」節が TP 指定部に移動する。(分析の詳細は、Park (2021) を参照されたい。)

[15] この点は、斎藤衛先生、野口雄矢氏、中野晃希氏の指摘による。ここに記して感謝申し上げる。

(53)



(52)と(53)の派生の共通点は、「だ・である」が投射する句の補部にあったものが、外部に移動する点である。しかし、通常、コピュラ文においては、「だ・である」が投射する句の補部に現れる構成素は移動できない。(54)では、それぞれ、かき混ぜ移動と題目化移動が生じている。(52)と(53)における派生のように、CopP の補部からの移動が可能なのであれば、(54)の派生が可能となっても問題ないはずである。

(54) a. *学生$_i$太郎は t_i {だ／である}。
b. *出発地は$_i$東京が t_i である。

(52)と(53)の派生を採用する場合、分裂文において「だ・である」が投射する句の補部からの抜き出しが可能となるのがなぜなのかを説明する必要があるであろう。一方で、本論では、CopP の補部からの移動は仮定していないため、上記の問題は生じない。

本節では、焦点要素の構造位置について論じてきた。未確定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語に関わるデータから、焦点要素は CP の領域ではなく、CopP の補部に生起していると主張した[16]。また、分裂文が小節に埋め込まれたデータから、分裂文の前提節は、TP や CP 領域に基底生成されるのではなく、CopP の指定部に基底生成されると論じた。この主張は、分裂文形成を説明する際にも、動詞句内主語仮説が有効であることを示すものである。

5. 前提節の統語構造

本節では、前提節の構造について考察する。先行研究では、前提節を導入する「の」は TP を補部に取るとされる。しかし、丁寧語の埋め込みに関するデータから、「の」は TP だけでなく AddrP を補部に取れることを示す。(55)に示されるように、前提節には丁寧語の「ます」・

[16] Matsuda (1998) は、焦点要素が IP（TP）の指定部に生じると仮定している。本節で提示したデータは、Matsuda (1998) の分析にとって問題となる。

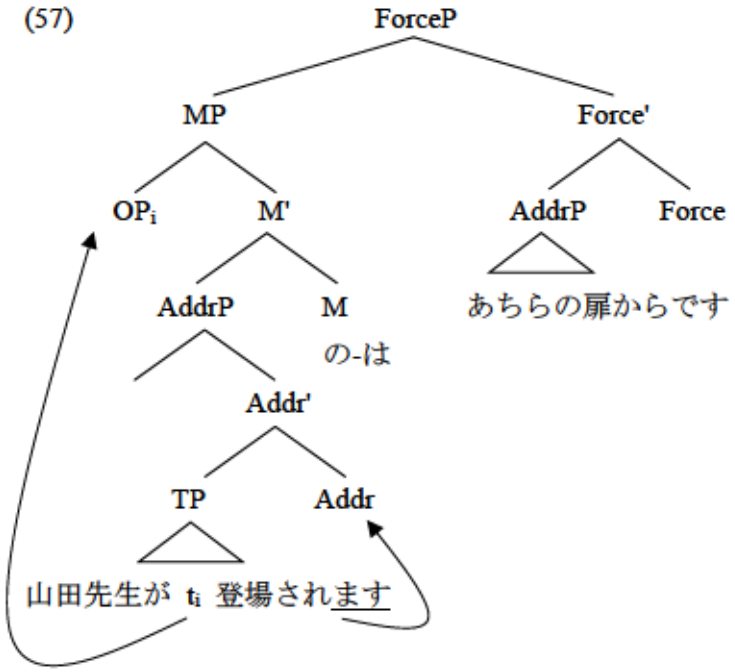
「です」の埋め込みが可能である[17]。一方で、(56)のように、CP 領域に現れる他の要素は埋め込みが不可能である。

(55) a. 山田先生が登場されますのはあちらの扉からです。
b. 私がずっと気がかりでしたのはその件についてです。

(56) a. *太郎が登場するだろうのはあそこからだ。
b. *花子が登場する｛よ／ね／な｝のはあそこからだ。

第 2 章で提案したように、「ます」・「です」は AddrP の主要部に主要部移動を起こす。そうすると、分裂文の前提節には AddrP が投射可能であるということができる。本論では、前提節は(57)の構造を持つと仮定する。

(57)



「の」は MP から SRP までに現れる主要部との共起が不可能なので、MP の主要部であると考えられる。「の」は丁寧語とは共起できるので、補部に AddrP または TP を選択できる。また、前提節においては、空演算子（OP）の移動が関与すると仮定する。OP は TP 内から MP の指定部に移動する[18]。（焦点部を含む完全な構造は、本節の最後に提示する。）

---

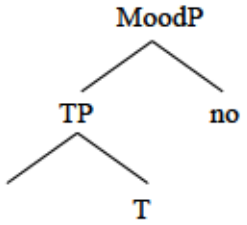
[17] (i)では、名詞文と形容詞文に「です」が現れているが、いずれも不適格である。第 2 章で触れたように、丁寧語の「です」は連体形接続の環境では、そのままの語形では生起できないからである（松村（編）(1971: 522)）。

(i) a. ?*学生ですのは太郎です。
b. *太郎が詳しいですのは言語学にです。

[18] Yoshimoto (2018) は、制限関係節や比較構文の「より」節において丁寧語が現れ得ないという観察に基づいて、空演算子の移動が関与する節においては丁寧語の生起が不可能である

これに関連して、Simpson (2003) は、日本語の「のだ」文に現れる「の」の機能を考察し、「の」を MoodP の主要部であると仮定している。話し手が前提の真理性に関して責任を持っていること（“speaker commitment to the truth of commonly held background presupposition”（Simpson (2003: 140–141)））を「の」が表すことから、MoodP の要素であると仮定されている。(58)に示されるように、「の」が投射する MoodP は TP の上位に存在する。本論で提案している階層構造においては MP に相当する[19]。（本論で言うところの「モダリティ」という概念が形式意味論における「モダリティ」と同義でないことについては、第 1 章の 4 節で既に言及している。）

(58) Japanese



分裂文に対して、「のだ」文では、丁寧語の埋め込みが容認されない。(59)に見られるように、「ます」・「です」は「の」節には生起できない[20]。

(59) a. *山田先生があちらの扉から登場されますのです。
b. *私はその件についてずっと気がかりでしたのです。

この事実は、「のだ」文の「の」は AddrP を補部に取れないことを示している[21]。「のだ」文の「の」は、(60)のように、TP のみを補部に選択すると考えられる[22]。

としている。制限関係節や比較構文の「より」節では、空演算子の移動が起こるため、丁寧語が生起できないという（制限関係節内で空演算子の移動が起こるという見解については Murasugi (1991) を、また「より」節の派生に空演算子移動が関与するという見方については Kikuchi (1989) を参照されたい）。しかしながら、(i)のように、分裂文の「の」節においては丁寧語の表出が可能である。本論で提示しているデータは Yoshimoto (2018) の分析にとって問題となる。また、比較構文であっても、次のようなケースでは丁寧語の表出が可能である。
(i) [我々が想定しておりましたより]はるかに多くの方がご来場くださいました。

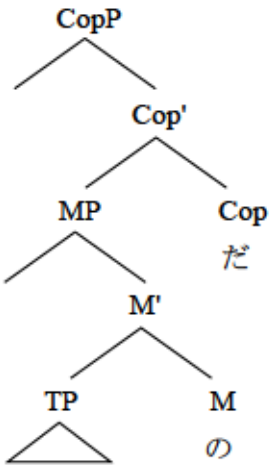
[19] ただし、ここでの論理に従うと、英語の分裂文において前提節を導入する *that* も MP の主要部であるという可能性が生じる。英語の分裂文の統語構造については、本論では深く立ち入らない。

[20] 前田 (1977: 160–161) は、江戸弁において、「のだ」文に丁寧語が埋め込まれた例を報告している。

[21] 「のだ」文の統語分析については、Terada (1993) も参照。また、「のだ」文については、日本語に関する記述的な文法研究の文献でも頻繁に議論されている（三上 (1953); 田野村 (1990); 野田 (1997) など）。

[22] 知覚動詞の補文節を導く「の」も丁寧語の埋め込みを許さない。(i)のように、丁寧語の「ます」は補文に表出できない。この文における「の」は TP のみを補部に選択する M 主要部であると見ることができる。

(60)



山田先生があちらの扉から登場される

Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) の直接移動分析では、分裂文は「のだ」文をもとに派生する。しかし、「のだ」文の「の」は TP を補部に取るのに対し、分裂文の「の」は AddrP または TP を補部に取る。直接移動分析では、「のだ」文の「の」と分裂文の「の」は同一の統語的振る舞いをすることが予測されるが、実際には、「のだ」文と分裂文の「の」は丁寧語の埋め込みに関して相違するので、異なるものである。このことから、「のだ」文を基底構造として分裂文を派生する分析は妥当でないということができる。

さらに付け加えると、「のだ」文から分裂文を派生させる分析が妥当でないことは、形態的観点からも支持される。通常、コピュラの「だ」は、(61)に示されるような活用をする。

(61) 「だ」の系列

基本系語尾	タ系語尾
基本形 'da'	タ形 'datta'
	タ系条件形 'dattara'
基本連用形（連用形）'ni'	タ系連用形（テ形、タリ形）
連体形 'na'	'de', 'dattari'

（益岡・田窪 (1992: 23)）

この活用表に基づいて、分裂文と「のだ」文に現れる「だ」の活用を確認する。まず、(62)は分裂文の「だ」の活用に関わるデータである。基本的には(61)の表と同じ活用をする。活用表と異なっている点は、(62)c である。連体形の「な」は、形容動詞述語が名詞修飾をする際に現れる。分裂文の焦点要素は形容動詞ではないので、「な」ではなく名詞修飾の「の」が現れている。

(62) a. 太郎が出てきたのはあちらのビルからだ。（基本形）

(i) ?*太郎は車が走っていますのを見ました。

b. 花子は太郎が出てくるのをあちらのビルからにした。（基本連用形）
c. 太郎が出てきたのがあちらのビルから｛*な／の｝可能性（連体形・名詞修飾）
d. 太郎が出てきたのはあちらのビルからだった。（タ形）
e. 太郎が出てくるのがあちらのビルからだったら嬉しい。（タ系条件形）
f. 太郎が出てくるのがあちらのビルからで、次郎が出てくるのがこちらのビルからだ。
（タ系連用形（テ形））
g. 太郎が出てくるのはあちらのビルからだったり、こちらのビルからだったりする。
（タ系連用形（タリ形））

一方で、「のだ」文の「だ」の活用を確認すると、(63)に示されるように、「のだ」文は基本連用形・連体形・タ形連用形（テ形）の活用形を持たない。関連する表現に、逆接の「のに」や原因・理由の「ので」のような接続助詞が存在するが、野田 (1997: 147) が論じているように、「のに」・「ので」は、それぞれの意味が特化しており、接続助詞として独立した語になっているので、「のだ」文の一種ではない。

(63) a. 太郎が出てきたのはあちらのビルからだ。（基本形）
b. *花子は太郎をあちらのビルから出てくるのにした。（基本連用形）
c. *太郎があちらのビルから出てきたの｛な／の｝可能性（連体形・名詞修飾）
d. 太郎があちらのビルから出てきたのだった。（タ形）
e. ?太郎があちらのビルから出てくるのだったら嬉しい。（タ系条件形）
f. *太郎があちらのビルから出てくるので、次郎がこちらのビルから出てくるのだ。
（タ系連用形（テ形））
g. ?太郎があちらのビルから出てくるのだったり、花子がこちらのビルから出てくるのだったりする。（タ系連用形（タリ形））

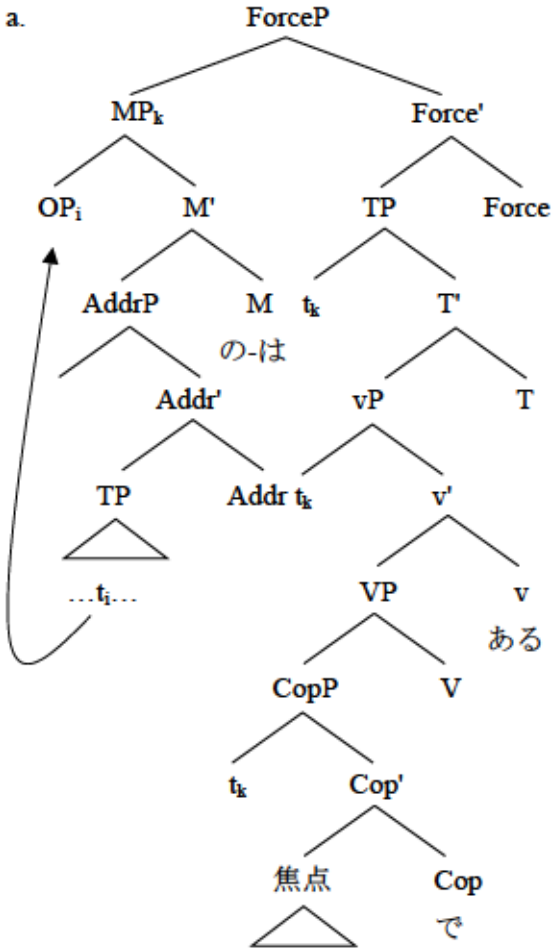
(62)と(63)のデータから分かるように、分裂文の「だ」と「のだ」文の「だ」は異なる活用をする。「のだ」文から分裂文を派生させる分析では、(62)b・(62)c・(62)f が適格になることを説明できないと考えられる。これらの文の基底構造となる(63)b・(63)c・(63)f はいずれも不適格となるからである。このように、「のだ」文と分裂文は活用の観点でも異なる振る舞いをする。

以上、本節では、分裂文の前提節に丁寧語の「ます・です」を生起させることができることから、分裂文の「の」は AddrP または TP を補部に取ることができると主張した。さらに、「のだ」文には丁寧語の生起が不可能であることから、分裂文の「の」と「のだ」文の「の」は異なる補部を選択することを確認した。これらの事実は、分裂文を「のだ」文から派生させる分析の問題点となることを指摘した。

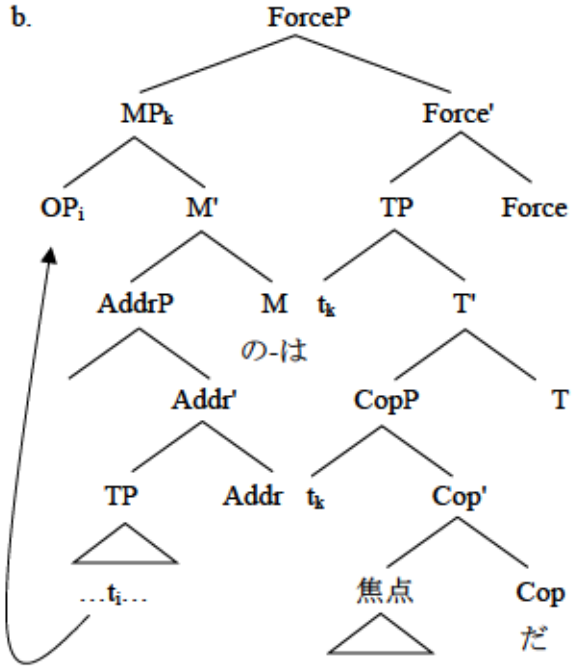
3 節から 5 節までの議論をまとめると、日本語の分裂文は(64)の構造を持つ。「だ」・「である」は CP 領域ではなく、TP の下位に生起する。「である」は Cop-V-v に対応し、「だ」は CopP の主要部である。次に、焦点要素は Cop の補部に生起する。CP 領域への移動は関与

しない。最後に、前提節を形成する「の」は MP の主要部であり、AddrP または TP を補部に取る。また、分裂文の先行研究では、空演算子分析と直接移動分析の対立がある。本論では、時制要素の接続・伝聞の「そうだ」への埋め込み・未確定代名詞の束縛・「も」の等位接続・主格主語との順序関係・前提節への丁寧語の埋め込み・「だ」の活用に関わるデータから、直接移動分析が妥当でないことを指摘した。

(64) a.



b.



6. まとめ

本章では、コピュラの構造位置・焦点要素の構造位置・前提節の統語構造の観点から、分裂文の統語構造について議論した。まず、時制要素の接続と伝聞の「そうだ」の補部位置への埋め込みのテストは、分裂文のコピュラが TP の下位に位置付けられることを示している。さらに、「まい」の接続の可否から、「である」は Cop-V-v に対応する主要部であり、「だ」は Cop 主要部であることを示した。次に、未確定代名詞の束縛・「も」の等位接続・主格主語との順序関係に関わるデータは、焦点要素が CopP の補部位置にあることを示唆する。焦点要素が CP 領域に焦点移動すると考えることはできない。最後に、前提節への丁寧語の埋め込みが可能であることから、「の」は MP の主要部であり、AddrP または TP を補部に選択すると仮定することができる。この事実とともに、分裂文と「のだ」文における「だ」の活用に関わる事実は、「のだ」文を分裂文の基底構造とする分析が妥当でないことを示してい

る。これらの言語事実を考慮に入れると、直接移動分析よりも空演算子分析の方が妥当であると言える。分裂文の先行研究では、これまで主に移動の制約の違反に焦点が当てられてきたが、本論の議論から、分裂文の特性を理解するには、分裂文の全体的な構造を考察の対象とする必要があるということができる。

第 5 章　結　語

本論では、日本語の CP 領域の分離構造を明らかにするために、(1)に再掲する二つの問いを設定して論を展開した。第一に、CP 領域に生起する文末要素を整理した。第二に、日本語における分離 CP 構造を明らかにするために、日本語の言語事実に基づいて文末要素間の階層関係を調べた。以下では、各章で示したこれらの問いに対する本論の主張をまとめる。

(1)　a. CP 領域の要素にはどのようなものがあるか。
　　b. 日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか。

第 2 章では、日本語における分離 CP 構造の解明に向けて、丁寧語・モダリティ要素・終助詞に関わる言語事実を提示し、CP 領域は [SRP [EP [ForceP [MP [Addr …]]]]] の五階建ての階層構造を持つと主張した。AddrP は聞き手に関わる投射であり、CP 領域の最下位に投射する。AddrP の主要部には、形容詞型の活用語が含まれる文に現れる丁寧語 B の「です」が基底生成される。また、時制要素の左隣に現れる「です」と「ます」は、それぞれ CopP・vP の主要部に生起したあと、AddrP への主要部移動を起こす。MP はモダリティに関わる投射であり、主要部には推量辞の「う」や終助詞の「っけ」などが生起する。MP が AddrP に投射するという仮説は丁寧語と「っけ」との共起関係から支持される。ForceP は、節のタイプの指定に関わる投射であり、主要部には疑問を表す助詞の「か」などが現れる。ForceP が MP や AddrP の上に投射する点は、終助詞の「っけ」が「か」と共起したときの線形順序から確かめられる。EP は節全体の意味の強化に関わる投射であり、終助詞の「よ」が主要部に生起できる。SRP は聞き手への応答要求に関する投射である。この投射の主要部には終助詞の「ね」や「な」が現れる。さらに、第 2 章では、[SRP [EP [ForceP [MP [Addr …]]]]] の階層構造を仮定することで、終助詞の「もの（もん）」や「こと（感嘆）」の統語特性を捉えることが可能になることを示した。

第 3 章では、MP の投射に現れる主要部要素として、推量表現や意志・勧誘表現、確認要求表現を取り上げ、それぞれの主要部要素の補部選択を丁寧語との共起関係から明らかにした。TP のみを補部に取る語には「だろう」・「だろ」・「じゃん」があり、TP または AddrP を補部に選択できる語には「でしょう」・「でしょ」・「やん（関西方言）」・「まい」・補文標識の「ように・こと」があることを見た。また、推量辞の「だろう」には、確認要求の用法があり、この場合は、推量辞が MP から SRP に移動すると論じた。さらに、モダリティを表す要素は全てが MP と関係付けられるわけではなく、「じゃない」・「じゃね」・「じゃなか（長崎方言）」のような表現は、複文構造を持ち、TP の下位に生起すると主張した。

第 4 章では、日本語における分裂文の統語構造について議論した。分裂文の派生には移動が関与することが知られており、先行研究では、この特性を捉えるために、空演算子移動分析と直接移動分析が提案されている。第 4 章では、移動以外の統語特性に目を向け、特に、

(i) コピュラの構造位置、(ii) 焦点要素の構造位置、(iii) 前提節の構造について考察を加えた。コピュラの構造位置については、時制要素の接続と伝聞を表す「そうだ」の接続が可能であることから、TP の下位にとどまると論じた。「である」の「で」は CopP の主要部、「ある」は動詞句の主要部であり、「だ」は「である」の縮約形として実現すると仮定した。先行研究では、コピュラの「だ」の FocP 主要部仮説が提案されているが、妥当とは言えない。次に、未確定代名詞束縛・「も」の等位接続・主格主語・小節に関わるデータから、焦点要素は CopP の補部にとどまると論じた。Hiraiwa and Ishihara (2002, 2012) の分析では、焦点要素は FocP の指定部に移動することになるが、本論で示された言語事実は捉えられないと考えられる。最後に、丁寧語の埋め込みが可能であることから、日本語の前提節は AddrP を選択可能であると主張した。「のだ」文から分裂文を派生する分析では、「のだ」文と分裂文における「の」は、同様の統語的振る舞いをすることが予測される。しかしながら、「のだ」文の「の」節では、丁寧語の埋め込みが不可能なので、そのような分析は妥当ではない。分裂文研究では、空演算子移動分析と直接移動分析が提案されているが、本論の議論が正しければ、空演算子移動分析の方が妥当である。

総括すると、各章で取り上げた文末要素のうち、CP 領域の主要部と認定できるのは、(2)に挙げる語である（TP の下位に生起して、CP 領域に移動するものも含まれる）。一方で、CP 領域の主要部ではないと結論付けた表現を(3)にまとめている。これらは「CP 領域の要素にはどのようなものがあるか」という一つ目の問いに対する本論の提案である。

(2) CP 領域の主要部

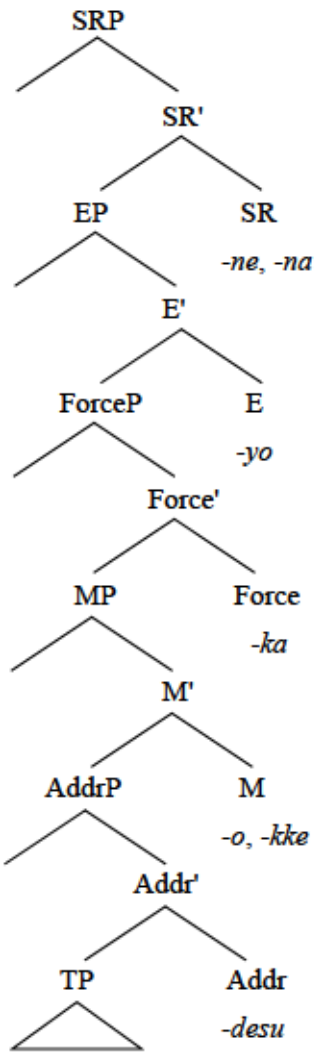
丁寧：です、ます
推量：う、だろう、でしょう、だろ、でしょ、まい…
意志：（よ）う、ましょう
命題確認要求：じゃん、やん（関西方言）
疑問：か
命令：*-e*、ろ、な（禁止）
終助詞：の、っけ、わ、よ、ね、な、もん、こと（感嘆）、ばい（長崎方言）

(3) CP 領域の主要部ではない

疑似モダリティ：かもしれない、にちがいない…
（非）命題確認要求：じゃない、じゃね、じゃなか（長崎方言）

本論では、二つ目の問いとして、「日本語における分離 CP 構造はどのようになっているか」についても検討した。そして、(4)に示される [SRP [EP [ForceP [MP [AddrP …]]]]] の階層構造が日本語の分離 CP 構造としてもっとも妥当であるという結論に至った。

(4)



日本語の CP 研究は、近年、Rizzi (1997) のカートグラフィー研究の枠組みを前提として議論が展開される傾向にある。しかしながら、日本語には潤沢に文末要素が存在するので、日本語の内部で観察される言語事実に裏付けられた分離 CP 構造を立てることは現実的に不可能ではない。本論では、他言語のデータに基づいて提案された分離 CP 仮説からのアナロジーを最小限に留めて、日本語の言語事実に立脚した分離 CP 構造を提出することを試みた。本論の提案はカートグラフィー研究等の分離 CP 仮説に対して新しい知見を提供する可能性がある。CP 研究においては、Rizzi (1997) のカートグラフィーを前提とするのではなく、各言語のデータに動機付けられた分離 CP 構造を立てた後に、各言語の CP 構造を突き合わせて比較・対照することが重要であるように思われる。

本研究の今後の課題としては、三点挙げられる。まず、意味・語用論とのインターフェースに関わる問題である。本論で提案した五階建ての階層構造には、発話行為（speech act）やモダリティ（modality）のような意味論や語用論に関わる階層が含まれる。そうすると、統語論における文末要素の派生がどのような仕方で意味論・語用論における意味解釈のメカニズムに貢献するのかという点が疑問となる。次に、分離 CP 構造と近年のミニマリズムとの接点に関しても問題がある。ミニマリストプログラムの枠組みでは、近年、X'理論等の仮説群

が棄却されており、併合（Merge）などの最小限の原理のみが仮定されている。本論では、X'理論に基づく構造を仮定しているが、最新のミニマリストプログラムの枠組みでどのように捉え直されるべきかという点は今後の大きな課題となる。最後に、言語習得の問題である。本論の議論が正しければ、日本語とイタリア語における節の周縁部は、異なる階層構造を有することになる。つまり、本論で示した日本語の階層構造は、自然言語に普遍的なものではない。そうすると、子供がどのようにして、個別言語の階層構造を習得するかに関して、大きな問いが生じる。これら三つの課題は、本論では十分に扱いきれない問題であり、今後のさらなる検討が必要である。

このように、理論的な課題は残っているものの、どのような理論を採用しようとも、本論で提示しているデータには、理論を構築する上で、無視できないものが数多く含まれているように思われる。CP 領域に関わる研究では、数多くある文末要素の統語特性を最低限の理論的道具立てを用いて説明することが重要となる。本提案は、そうした「理論と記述の緊張関係」の問題に対して、一つの解決案を提示している点において意義を持つ。

参考文献

Abney, Steven. 1987. The English noun phrase and its sentential aspect. Doctoral dissertation, MIT.

秋月高太郎. 2012.「動物キャラクターの言語学」『尚絅学院大学紀要』第 64 号, 43–57. 宮城: 尚絅学院大学.

Akmajian, Adrian. 1970. Aspects of the grammar of focus in English. Doctoral dissertation, MIT.

青木博史. 2020.「第III部 日本語における丁寧語の歴史」小川芳樹・石崎保明・青木博史『文法化・語彙化・構文化』, 211–265. 東京: 開拓社.

Aoun, Joseph and Y.-H. Audry Li. 1993. *Wh*-element in situ: Syntax or LF? *Linguistic Inquiry* 24: 199–238.

Aoyagi, Hiroshi. 1998. Particles as adjunct clitics. *NELS* 28: 17–31.

Aoyagi, Hiroshi and Toru Ishii. 1994. On NPI licensing in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 4: 295–311.

Alok, Deepak. 2021. The morphosyntax of Magahi addressee agreement. *Syntax* 24: 263–296.

Antonov, Anton. 2015. Verbal allocutivity in a crosslinguistic perspective. *Linguistic Typology* 19:55–85.

Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. New York: Oxford University Press.

Authier, Jean-Marc. 1992. Iterated CPs and embedded topicalization. *Linguistic Inquiry* 23: 329–336.

Baker, Mark. 1985. The mirror principle and morphosyntactic explanation. *Linguistic Inquiry* 16: 373–415.

Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago: University of Chicago Press.

Belletti, Adriana. 2004. Aspects of the low IP area. In Luigi Rizzi (ed.) *The Structure of CP and IP*, 16–51. New York: Oxford University Press.

Bobaljik, Jonathan. 1994. What does adjacency do? *MIT Working Papers in Linguistics* 22: 1–32.

Bobaljik, Jonathan. 1995. Morphosyntax: The syntax of verbal inflection. Doctoral dissertation, MIT.

Bošković, Željko. 1994. D-structure, theta-criterion, and movement into theta-positions. *Linguistic Analysis* 24: 247–286.

Bošković, Željko. 2002. A-movement and the EPP. *Syntax* 5: 167–218.

Bowers, John. 1993. The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24: 591–656.

Boyd, Julian and J. P. Thorne. 1969. The semantics of modal verbs. *Journal of Linguistics* 5: 57–74.

Bresnan, Joan. 1970. On complementizers: Toward a syntactic theory of complement types. *Foundations of Language* 6: 297–321.

Burton, Strang and Jane Grimshaw. 1992. Coordination and VP-internal subjects. *Linguistic Inquiry* 23: 305–313.

Butler, Jonny. 2003. A minimalist treatment of modality. *Lingua* 113: 967–996.

Cable, Seth. 2010. *The Grammar of Q: Q-Particles, Wh-Movement, and Pied-Piping*. Oxford: Oxford University Press.

Cheng, Lisa. 1991. On the typology of *wh*-questions. Doctoral dissertation, MIT.

Choe, Jae W. 1987. LF movement and pied-piping. *Linguistic Inquiry* 18: 348–353.

Chomsky, Noam. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.

Chomsky, Noam. 1970. Remarks on nominalization. In R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 184–221. Waltham: Ginn.

Chomsky, Noam. 1977. On *wh*-movement. In Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 71–132. New York: Academic Press.

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding: The Pisa Lectures*. Dordrecht, the Netherlands: Foris.

Chomsky, Noam. 1986a. *Knowledge of Language*. New York: Praeger.

Chomsky, Noam. 1986b. *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 1995. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework. In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89–155. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.

Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford, UK: Oxford University Press.

Cooke, R. Joseph. 1989. *Thai Sentence Particles and Other Topics*. Canberra: Pacific Linguistics.

Culicover, Peter. 1991. Topicalization, inversion, and focus in English. *Proceedings of the 8th Eastern States Conference on Linguistics*: 46–68.

den Dikken, Marcel. 2006. *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*. Cambridge, MA: MIT Press.

Endo, Yoshio. 2007. *Locality and Information Structure: A Cartographic Approach to Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.

遠藤喜雄. 2010.「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子（編）『統語論の新展開と日本語研究—命題を超えて』, 67–94. 東京: 開拓社.

遠藤喜雄. 2014.『日本語カートグラフィー序説』東京: ひつじ書房.

Endo, Yoshio and Liliane Haegeman. 2019. Adverbial clauses and adverbial concord. *Glossa* 4: 48, 1–32.

遠藤喜雄・前田雅子. 2020.『カートグラフィー』東京: 開拓社.

Ernst, Thomas. 2002. *The Syntax of Adjuncts*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fiengo, Robert. 1977. On trace theory. *Linguistic Inquiry* 8: 35–62.

藤井友比呂. 2016.「複文の構造と埋め込み補文の分類」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介（編）『日本語文法ハンドブック：言語理論と言語獲得の観点から』2–37. 東京: 開拓

社.

Fujiwara, Yoshiki. 2020. Licensing of matrix questions in Japanese and its implications. *Proceedings of the Linguistic Society of America* 5: 735–749.

Fukui, Naoki. 1986. A theory of category projection and its applications. Doctoral dissertation, MIT.

Funakoshi, Kenshi. 2016. Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 25: 113–142.

Gazdar, Gerald. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. New York: Academic Press.

Gelderen, Elly van. 2013. *Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hacquard, Valentine. 2006. Aspects of modality. Doctoral dissertation, MIT.

Haddican, Bill. 2018. The syntax of Basque allocutive clitics. *Glossa* 3: 1–31.

Haegeman, Liliane and Virginia Hill. 2013. The syntactization of discourse. In R. Folli, C. Sevdali, and R. Truswell (eds.) *Syntax and Its Limits*, 370–390. Oxford, UK: Oxford University Press.

Hagstrom, Paul Alan. 1998. Decomposing questions. Doctoral dissertation, MIT.

Harada, Masashi. 2016. Japanese pseudoclefts. *Kansan Working Papers in Linguistics* 37, 59–75.

Harada, Masashi. 2018. The existence of pseudoclefts in Japanese. *Buckeye East Asian Linguistics* 3, 43–52.

Harada, S. I. 1971. Where do vocatives come from? *English Linguistics* 5: 2–43.

Harada, S. I. 1976. Honorifics. In Masayoshi Shibatani (ed.) *Syntax and Semantics* 5, 327–372. New York: Academic Press.

Harley, Heidi and Rolf Noyer. 1999. Distributed Morphology. *Glot International* 4.4: 3–9.

Halle, Morris and Alec Marantz. 1993. Distributed Morphology and the pieces of inflection. In Kenneth Hale and S. Jay Keyser (eds.) *The View from Building 20*, 111–176. Cambridge: MIT Press.

Halle, Morris and Alec Marantz. 1994. Some key features of Distributed Morphology. In Andew Carnie and Heidi Harley (eds.) *MITWPL 21: Papers on Phonology and Morphology*, 275–288. Cammbridge: MITWPL.

長谷川信子. 1996. On the word order of copular sentences. 『言語科学研究』Vol 2. 神田外語大学言語科学研究科.

Hasegawa, Nobuko. 1997. A copula-based analysis of Japanese clefts: *Wa*-cleft and *ga*-cleft. In Kazuko Inoue (ed.) *Grant-in-Aid for COE Research Report (1): Researching and Verifying an Advanced Theory of Human Language*, 15–38. Kanda University of International Studies.

Hasegawa, Nobuko. 2011. On the cleft construction: Is it simplex or complex? *Scientific Approaches to Language* 10: 13–32.

Hasegawa, Yoko. 2015. *Japanese: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

蓮沼昭子. 1995.「対話における確認行為—「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法—」仁田義雄（編）『複文の研究　下』, 389–419. 東京: くろしお出版.

林四郎・南不二男. 1974.『敬語講座1 敬語の体系』東京: 明治書院.

Henry, Alison. 1995. *Belfast English and Standard English*. New York: Oxford University Press.

Higgins, Roger Francis. 1979. *The Pseudo-Cleft Construction in English*. New York: Garland.

Hill, Virginia. 2007. Vocatives and the pragmatics-syntax interface. *Lingua* 12: 2077–2105.

Hiraiwa, Ken. 2005. Dimensions of symmetry in syntax: agreement and clausal architecture. Doctoral dissertation, MIT.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2002. Missing links: Cleft, sluicing, and "no da" construction in Japanese. In T. Ionin, H. Ko, and A. Nevins (eds.) *Proceedings of the 2nd HUMIT Student Conference in Language Research*, 35–54. Cambridge, MA: MITWPL.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: Clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15: 142–180.

Hiraiwa, Ken and Yoshiaki Kobayashi. 2019. Countersluicing. *Syntax* 23: 295–312.

Hirayama, Hitomi. 2018. Discourse effects of biased questions in Japanese. In Shin Fukuda, Mary Shin Kim, and Mee-Jeong Park (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 25. CSLI Publications.

Hoekstra, Eric. 1993. Dialectal variation inside CP as parametric variation. *Linguistische Berichte* 5: 161–179.

Hoji, Hajime. 1987. Japanese clefts and reconstruction/chain binding effects. Paper presented at WCCFL 6. [https://www.researchgate.net/publication/333812348_Japanese_Clefts_and_ReconstructionChain_Binding_Effects] （検索日：2021 年 2 月 6 日）

Hoji, Hajime. 1990. Theories of anaphora and aspects of Japanese syntax. Ms., University of Southern California. [https://www.researchgate.net/publication/248070527_Theories_of_Anaphora_and_Aspects_of_Japanese_Syntax] （検索日：2021 年 2 月 6 日）

Huang, C.-T. James. 1982. Logical relations in Chinese and the theory of grammar. Doctoral dissertation, MIT.

Huang, C.-T. James. 1993. Reconstruction and the structure of VP: Some theoretical consequences. *Linguistic Inquiry* 24: 103–138.

井上史雄. 1998.『日本語ウォッチング』東京: 岩波書店.

井上和子. 1976.『変形文法と日本語　上・統語構造を中心に』東京: 大修館書店.

井上和子. 2009.『生成文法と日本語研究―「文文法」と「談話」の接点』東京: 大修館書店.

井上和子. 2011.「モーダルをめぐって」長谷川信子（編）『70年代生成文法再認識』, 1–36. 東京: 開拓社.

Iori, Isao. 2017. The layered structure of the sentence. In Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, Hisashi Noda (eds.) *Handbook of Japanese Syntax*, 157–186. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

Ito, Satoshi, and David Y. Oshima. 2016. On two varieties of negative polar interrogatives in Japanese. In Michael Kenstowicz, Theodore Levin, and Ryo Masuda (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 23. CSLI Publications.

Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom Horie. 2000. Creating speech register in Thai conversation. *Language in Society* 29: 519–554.

Iwasaki, Shoichi and Preeya Ingkaphirom Horie. 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.

Jenks, Peter. 2011. The hidden structure of Thai noun phrases. Doctoral dissertation, Harvard University.

加藤正信. 1973.「全国方言の敬語概観」林四郎・南不二男（編）『敬語講座6 現代の敬語』, 25–83. 東京: 明治書院.

川瀬卓. 2010.「キャラ語尾「です」の特徴と位置付け」『文献探究』48: 138–125.

Kayne, Richard. 1984. *Connectedness and Binary Branching*. Dordrecht, the Netherlands: Foris.

木戸康人. 2013.「福岡方言における「バイ」「タイ」の統語的分布」『日本言語学会第147回大会予稿集』, 254–259.
[https://37c6d1f9-a76c-4551-bec9-5b4afeaf1d30.filesusr.com/ugd/7c6b71_d755630a7ea24134bc72292c86682f49.pdf]
（検索日：2021年4月15日）

Kido, Yasuhito. 2015. On the syntactic structure of *bai* and *tai* in Hichiku dialect.『九州大学言語学論集』35: 173–196.

Kikuchi, Akira. 1989. Comparative deletion in Japanese. Ms., Yamagata University.

Kikuchi, Akira and Daiko Takahashi. 1991. Agreement and small clauses. In Heizo Nakajima and Shigeo Tonoike (eds.) *Topics in Small Clauses*, 75–105. Tokyo: Kurosio Publishers.

菊地康人. 1997.『敬語』東京: 講談社.

菊地康人（編）. 2003.『朝倉日本語講座8　敬語』東京: 朝倉書店.

Kim, Soowon. 1999. Sloppy/strict identity, empty objects, and NP ellipsis. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 255–284.

金水敏. 2003.『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』東京: 岩波書店.

Kishimoto, Hideki. 2000. Indefinite pronouns and overt N-raising. *Linguistic Inquiry* 31: 557–566.

Kishimoto, Hideki. 2001. Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32: 597–633.

岸本秀樹. 2005.『統語構造と文法関係』東京: くろしお出版.

Kishimoto, Hideki. 2005. *Wh*-in-situ and movement in Shinhala questions. *Natural Language & Linguistic Theory* 23: 1–51.

Kishimoto, Hideki. 2006a. Japanese as a topic-movement language. *Scientific Approaches to Language* 5: 85–105.

Kishimoto, Hideki. 2006b. Japanese syntactic nominalization and VP-internal syntax. *Lingua* 116: 771–810.

Kishimoto, Hideki. 2007. Negative scope and head raising in Japanese. *Lingua* 117: 247–288.

Kishimoto, Hideki. 2008a. On the variability of negative scope in Japanese. *Journal of Linguistics* 44: 379–435.

Kishimoto, Hideki. 2008b. On verb raising. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 107–140. New York: Oxford University Press.

Kishimoto, Hideki. 2009. Topic prominency in Japanese. *The Linguistic Review* 26: 465–513.

Kishimoto, Hideki. 2010. Subjects and constituent structure in Japanese. *Linguistics* 48: 629–670.

Kishimoto, Hideki. 2011. Topicalization and coordination in Japanese. In Andrew Simpson (ed.) *Proceedings of 7th Workshop on Altaic Formal Linguistics*, 171–186. Cambridge, MA: MITWPL.

岸本秀樹. 2011.「節の周辺要素—モダリティと題目」 武内道子・佐藤裕美（編）『発話と文のモダリティ—対照研究の視点から—』, 115–137. 東京: ひつじ書房.

Kishimoto, Hideki. 2012. Subject honorification and the position of subjects in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 21: 1–41.

岸本秀樹. 2012.「日本語コピュラ文の意味と構造」影山太郎（編）『属性叙述の世界』, 39–67. くろしお出版.

Kishimoto, Hideki. 2013a. Notes on correlative coordination in Japanese. In Y. Miyamoto, D. Takahashi, H. Maki, M. Ochi, K. Sugisaki, and A. Uchibori (eds.) *Deep Insights, Broad Perspectives: Essays in Honor of Mamoru Saito*, 192–217. Tokyo: Kaitakusha.

Kishimoto, Hideki. 2013b. Coordination and movement of honorific heads in Japanese. *19th ICL Papers*, 7, International Congress of Linguistics, University of Geneva, Switzerland.

Kishimoto, Hideki. 2013c. Verbal complex formation and negation in Japanese. *Lingua* 135: 132–154.

岸本秀樹. 2015.『文法現象から捉える日本語』東京: 開拓社.

岸本秀樹. 2016.「文の構造と格関係」村杉恵子・斎藤衛・宮本陽一・瀧田健介（編）『日本語文法ハンドブック：言語理論と言語獲得の観点から』102–145. 東京: 開拓社.

Kishimoto, Hideki. 2017. Negative polarity, A-movement, and clause structure in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 17: 109–161.

Kishimoto, Hideki. 2018. Negation. In Yoko, Hasegawa (ed.) *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*, 300–331. Cambridge: Cambridge University Press.

Kishimoto, Hideki. 2020. *Analyzing Japanese Syntax: A Generative Perspective*. Tokyo: Hituzi Syobo.

Kishimoto, Hideki. 2021a. On secondary predication in Japanese. *Nanzan Linguistics* 16: 33–66.

Kishimoto, Hideki. 2021b. The syntactic forms of secondary predicates: A view from Japanese. Paper presented at the International Workshop on Secondary Predication 2021, hybrid meeting (online + physical conference at Courtyard by Marriott Tokyo Station, Tokyo), 30 October-31 October, 2021.

岸本秀樹. 2021.「統語論と形態論のインターフェース」中村浩一郎（編）『統語論と言語諸分野とのインターフェース』45–87. 東京: 開拓社.

Kishimoto, Hideki. To appear. The syntactic forms of secondary predicates: A view from Japanese. In Kawashima, Masashi, Hideki Kishimoto, and Kazushige Moriyama (eds.) *Papers from the International Workshop on Secondary Predication 2021*. Department of Linguistics, Graduate School of Humanities, Kobe University.

岸本秀樹・菊池朗. 2008.『叙述と修飾』東京: 研究社.

Kizu, Mika. 2005. *Cleft Constructions in Japanese Syntax*. New York: Palgrave Macmillan.

Koizumi, Masatoshi. 1993. Modal phrase and adjuncts. *Japanese/Korean Linguistics* 2: 409–428.

Koizumi, Masatoshi. 1995. Phrase structure in minimalist syntax. Doctoral dissertation, MIT.

Koizumi, Masatoshi. 2000. String vacuous overt verb raising. *Journal of East Asian Linguistics* 9: 27–285.

Koopman, Hilda and Dominique Sportiche. 1991. The position of subjects. *Lingua* 85: 211–258.

Kratzer, Angelika. 1996. Severing the external argument from its verb. In Johan Rooryck and Laurie Zaring (eds.) *Phrase Structure and the Lexicon*, 109–137. Dordrecht: Kluwer.

久野暲. 1973.『日本文法研究』東京: 大修館書店.

Kuroda, S.-Y. 1965. Generative grammatical studies in the Japanese language. Doctoral dissertation, MIT.

Kuroda, S.-Y. 1988. Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticae Investigations* 12: 1–47.

Kuwabara, Kazuki. 1996. Multiple *wh*-phrases in elliptical clauses and some aspects of clefts with multiple foci. *MIT Working Papers in Linguistics* 29: 97–116.

Kuwabara, Kazuki. 2013. Peripheral effects in Japanese questions and the fine structure of CP. *Lingua* 126: 92–119.

Laka, Itziar. 1990. Negation in syntax: On the nature of functional categories and projections. Doctral dissertation, MIT.

Lakoff, George. 1975. Pragmatics in natural logic. In Edward L. Keenan (ed.), *Formal Semantics of Natural Language*, 253–286. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, Robin. 1969. Some reasons why there can't be any *some-any* rule. *Language* 45: 608–615.

Lasnik, Howard. 1999. *Minimalist Analysis*. Oxford: Blackwell.

Lasnik, Howard and Mamoru Saito. 1992. *Move α*. Cambridge, MA: MIT Press.

Leech, Geoffrey. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Lyons, John. 1977. *Semantics: Volume 2*. Cambridge: Cambridge University Press.

前田勇. 1977.『大阪弁』東京: 朝日新聞社.

Maeda, Masako. 2014. *Derivational Feature-Based Relativized Minimality*. Fukuoka: Kyushu University Press.

Martin, Roger. 1999. Case, the Extended Projection Principle, and minimalism. In S. Epstein and N. Hornstein (eds.), *Working Minimalism*, 1–25. Cambridge, Mass.: MIT Press.

益岡隆志・田窪行則. 1992.『基礎日本語文法—改訂版—』東京: くろしお出版.

Matsuda, Yuki. 1998. A syntactic analysis of focus sentences in Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 31, 291–310.

Matsuda, Yuki. 2000. An asymmetry in copular sentences. *Gengo Kenkyu* 117: 3–26.

松丸真大. 2001.「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』3: 33–48.

松村明. 1957.『江戸語東京語の研究』東京: 東京堂.

松村明（編）. 1971.『日本文法大辞典』東京: 明治書院.

McFadden, Thomas. 2020. The morphosyntax of allocutive agreement in Tamil. In Peter W. Smith, Johannes Mursell and Katharina Hartmann (eds.) *Agree to Agree: Agreement in the Minimalist Programme*, 391–424. Berlin: Language Science Press.

McNally, Louise. 1992. VP coordination and the VP-internal subject hypothesis. *Linguistic Inquiry* 23: 336–341

三上章. 1953.『現代語法序説: シンタクスの試み』東京: 刀江書院.

南不二男. 1974.『現代日本語の構造』東京: 大修館書店.

南不二男. 1993.『現代日本語の輪郭』東京: 大修館書店.

Miyagawa, Shigeru. 1987. LF affix raising in Japanese. *Linguistic Inquiry* 18: 362–367.

Miyagawa, Shigeru. 2001. The EPP, scrambling, and *wh*-in-situ. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 293–338. Cambridge, MA: MIT Press.

Miyagawa, Shigeru. 2012. Agreements that occur mainly in main clauses. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman, and Rachel Nye (eds.) *Main Clause Phenomena: New Horizons*, 79–112. Amsterdam: John Benjamins.

Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement Beyond Phi*. Cambridge, MA: MIT Press.

Miyagawa, Shigeru. In press. Syntax in the treetop. Ms., MIT. [https://static1.squarespace.com/static/5728dfa81bbee0da7943b811/t/60cf4b349f12ce39da749887/1624197942320/Miyagawa_2021_In_Press_MIT_Press.pdf]（検索日：2021年8月24日）

三宅知宏. 1996.「日本語の確認要求的表現の諸相」『日本語教育』89: 111–122.

三宅知宏. 2011.『日本語研究のインターフェース』東京: くろしお出版.

宮崎和人. 2000.「確認要求表現の体系性」『日本語教育』106: 7–16.

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃. 2002.『モダリティ』東京: くろしお出版.

宮地幸一. 1980.『ます源流考』東京: 桜楓社.

宮島達夫・仁田義雄（編）. 1995.『日本語類義表現の文法（上）単文編』東京: くろしお出版.

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩. 2000.『日本語の文法3 モダリティ』東京: 岩波書店.

Moro, Andrea. 1997. *The Raising of Predicate: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

Murasugi, Keiko. 1991. Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition. Doctoral dissertation, University of Connecticut.

中村桃子. 2021.『「自分らしさ」と日本語』東京: 筑摩書房.

長野明子・島田雅晴. 2019.「九州方言文末詞「バイ」と「タイ」の統語と形態について」西原哲雄・都田青子・中村浩一郎・米倉よう子・田中真一（編）『言語におけるインターフェース』東京: 開拓社.

Nakajima, Heizo. 1996. Complementizer selection. *The Linguistic Review* 13: 143–164.

Nakatani, Kentaro. 2013. *Predicate Concatenation: A Study of the V*-te *V Predicate in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.

Nakayama, Mineharu. 1988. Empty copulas. *Mita Working Papers in Psycholinguistics* 1, 121–128.

那須紀夫・依田悠介・秋本隆之. 2021.「日本語右端部に出現する「の」の特性：Saito (2012) 再考」Morphology and Lexicon Forum 2021発表資料.

Newmeyer, Frederick. 1980. *Linguistic Theory in America: The First Quarter-century of Transformational Generative Grammar*. New York: Academic Press.

Niimura, Masato. 2007. A syntactic analysis of copular sentences. *Nanzan Linguistics Special Issue* 3: 203–238.

Nishigauchi, Taisuke. 1990. *Quantification in the Theory of Grammar*. Dordrecht: Kluwer.

西垣内泰介. 2016.「「指定文」および関連する構文の構造と派生」『言語研究』150: 137–171.

日本語記述文法研究会（編）. 2003.『現代日本語文法4 第8部モダリティ』東京: くろしお出版.

日本語記述文法研究会（編）. 2009.『現代日本語文法7 第12部談話 第13部待遇表現』東京: くろしお出版.

日本国語大辞典第2版編集委員会. 2000-2002.『日本国語大辞典第2版』東京: 小学館.

二階堂整. 2009. 「14 映画館でドラえもんがあっている」九州方言研究会（編）『これが九州方言の底力!』, 68–71. 東京: 大修館書店.

Nishiyama, Kunio. 1999. Adjectives and the copulas in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 183–222.

西山國雄. 2021.「日本語丁寧形の異形態、通時、形態素順序、自由変異—形容詞を中心に—」ワークショップ：形容詞が関わる語形成をめぐって. Zoom. 2021年3月7日. 発表資料.

Nishiyama, Kunio, John Whitman, and Eun-Young Yi. 1996. Syntactic movement of overt *wh*-phrases in Japanese and Korean. *Japanese/Korean Linguistics* 5: 337–351.

西山佑司. 2003.『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』東京: ひつじ書房.

仁田義雄. 1991.『日本語のモダリティと人称』東京: ひつじ書房.

野田春美. (1997)『の（だ）の機能』東京: くろしお出版.

Noguchi, Yuya. 2020. On the embeddability of cleft *wh*-questions in Japanese. *Proceedings of the 28th Conference of the Student Organization of Linguistics in Europe*, 100–115.

Noguchi, Yuya. 2021. Clefts, freezing effects, and *wh*-movement in Japanese. Japanese/Koean Linguistics, Vol28 (poster papers).

呉泰均. 2015.「ネオ敬語「（ッ）ス」の語用論的機能」『日本語語用論フォーラム1』, 151–182. 東京: くろしお出版.

大堀壽夫. 2002.『認知言語学』東京: 東京大学出版会.

大堀壽夫. 2004.「文法化の広がりと問題点」『月刊言語』33: 26–33. 東京:大修館書店.

大石初太郎. 1975.『敬語』東京: 筑摩書房.

Oku, Satoshi. 1998. A theory of selection and reconstruction in the minimalist perspective. Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Ono, Hajime. 2006. Investigation of exclamatives in English and Japanese: Syntax and sentence processing. Doctoral dissertation, University of Maryland.

尾上圭介. 2001.『文法と意味I』東京: くろしお出版.

奥津敬一郎. 1978.『「ボクハ ウナギダ」の文法—ダとノ—』東京: くろしお出版.

Otani, Kazuyo and John Whitman. 1991. V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22: 345–358.

Oyharçabal, Beñat. 1993. Verb agreement with non-arguments: On allocutive agreement. In J. I. Hualde.

and J. Ortiz de Urbina (eds.) *Generative Studies in Basque Linguistics*, 89–114. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Park, Dongwoo. 2021. Korean specificational pseudoclefts as caseless focus nominal extraction. *Studia Linguistica* 75: 538–574.

Pollock, Jean-Yves. 1989. Verb movement, Universal Grammar, and the structure of IP. *Linguistic Inquiry* 20: 365–424.

Portner, Paul, Miok Pak, and Raffaella Zanuttini. 2019. The speaker-addressee relation at the syntax-semantics interface. *Language* 95: 1–36.

Rizzi, Luigi. 1997. The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, 281–337. Dordrecht: Kluwer.

Rizzi, Luigi. 2001. On the position interrogative in the left periphery of the clause. In G. Cinque and G. Salvi (eds.) *Current Studies in Italian Syntax: Essays Offered to Lorenzo Renzi*, 70–107. Amsterdam: Elsevier.

Rizzi, Luigi. 2004. Locality and left periphery. In Adriana Belletti (ed.) *The Cartography of Syntactic Structures*, 3, 223–251. New York: Oxford University Press.

Rizzi, Luigi. 2006. On the form of chains: Criterial positions and ECP effects. In Lisa Cheng and Norbert Corver (eds.) *Wh-Movement: Moving On*, 97–133, MIT Press, Cambridge, MA.

Rizzi, Luigi, and Giuliano Bocci. 2017. Left periphery of the clause. In Henk van Riemsdijk and Martin Everaert (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax: Second Edition*, 1–30. Oxford: Blackwell.

Rizzi, Luigi, and Cinque Guglielmo. 2016. Functional categories and syntactic theory. *Annual Review of Linguistics* 2: 139–163.

Rosenbaum, S. Peter. 1967. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, MA: MIT Press.

Ross, John. 1970. On declarative sentences. In R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, 272–277. Boston, MA: Ginn.

Ruanjaroon, Sugunya. 2005. The syntax of *wh*-expressions as variables in Thai. Doctoral dissertation, The University of British Columbia.

定延利之. 2007.「キャラ助詞が現れる環境」金水敏（編）『役割語研究の地平』, 27–48. 東京: くろしお出版.

定延利之. 2011.『日本語社会のぞきキャラくり 顔つき・カラダつき・ことばつき』東京: 三省堂.

定延利之・張麗娜. 2007. 「日本語・中国語におけるキャラ語尾の観察」 彭飛（編）『日中対照言語学研究論文集: 中国語からみた日本語の特徴, 日本語からみた中国語の特徴』, 99-119. 大阪: 和泉書院.

Sadock, Jerrold M. 1974. *Toward a Linguistic Theory of Speech Acts*. New York: Academic Press.

Saito, Mamoru. 1985. Some asymmetries in Japanese and their theoretical implications. Doctoral dissertation, MIT.

Saito, Mamoru. 2007. Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43: 203–227.

Saito, Mamoru. 2015. Cartography and selection: Case studies in Japanese. In Ur Shlonsky (ed.) *Beyond Functional Sequence*, 255–274. New York: Oxford University Press.

Saito, Mamoru. 2020. *Wh*-phrases without quantificational particles. 慶應言語学コロキアムZoom with a minimalist view #1講演資料.

斎藤衛. 2021.「量化小辞を伴わないWh句の分布と解釈」国立国語研究所第118回NINJALコロキウム講演資料.

Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi. 2012. Deriving the cartography of the Japanese right periphery: The case of sentence-final discourse particles. *Iberia* 4: 104–123.

佐治圭三. 1991.『日本語の文法の研究』東京: ひつじ書房.

Sakai, Hiromu. 1998. Feature checking and morphological merger. In Silva, D. (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 8, 189–201. Stanford, CA: CSLI Publications.

Sakai, Hiromu, Adrian Ivana and Chao Zhang. 2004. The role of light verb projection in transitivity alternation. *English Linguistics* 21: 348–375.

Sakamoto, Yuta. 2017. Escape from silent syntax. Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Sakamoto, Yuta. 2019. Overtly empty but covertly complex. *Linguistic Inquiry* 50:105–136.

Sakamoto, Yuta. 2020. *Silently Structured Silent Argument*. Amsterdam: John Benjamins.

澤田治美. 1993.『視点と主観性―日英語助動詞の分析―』東京: ひつじ書房.

Sawada, Osamu. 2013. The meanings of diminutive shifts in Japanese. In Stefan Keine and Shayne Sloggett (eds.) *Proceedings of the 42nd Meeting of the North East Linguistic Society*, 505–518. Amherst, MA: GLSA Publications.

Sawada, Osamu. 2014. On the context-dependent pragmatic strategies of Japanese self-diminutive shift. In Urtzi Etxeberria, Anamaria Fălăuș, Aritz Irurtzun, and Bryan Leferman (eds.) *Proceedings of Sinn und Bedeutung* 18, 377–395.

Sauerland, Uli and Kazuko Yatsushiro. 2017. Remind-me presuppositions and speech-act decomposition: Evidence from particles in questions. *Linguistic Inquiry* 48: 651–77.

Searle, R. John. 1979. *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.

柴谷方良. 1978.『日本語の分析』東京: 大修館書店.

Shimoyama, Junko. 1995. On 'sluicing' in Japanese. Ms., University of Massachusetts, Amherst.

Shimoyama, Junko. 2006. Indeterminate phrase quantification in Japanese. *Natural Language Semantics* 14: 139–173.

Shimoyama, Junko, Daniel Goodhue, and Mako Hirotani. 2018. Embeddability of biased negative polar questions in Japanese, presentation at WAFL 14, MIT. [https://sites.google.com/site/junkoshimoyama/] （検索日：2021年1月30日）

Shlonsky, Ur. 2010. The cartographic enterprise in syntax. *Language and Linguistics Compass* 4/6: 417–429.

Simpson, Andrew. 2003. On the re-analysis of nominalizers in Chinese, Japanese and Korean. In Yen-

hui Audrey Li and Andrew Simpson (eds.) *Functional Structure(s), Form and Interpretation: Perspectives from East Asian Languages*, 131–160. London: Routledge Curzon.

Simpson, Andrew. 2021. Revisiting the structure of nominals in Japanese and Korean: Mixed headedness vs. pure head-finality. *Natural Language & Linguistic Theory*.

Sode, Rumiko. 1999. On the so-called small clause constructions in Japanese. Doctoral dissertation, The Ohio State University.

Speas, Peggy and Carol Tenny. 2003. Configurational properties of point of view roles. In Anna-Maria. Di Sciullo (ed.) *Asymmetry in Grammar* [Linguistik Aktuell/Linguistics Today 57–58], 315–344. Amsterdam: John Benjamins.

Sportiche, Dominique. 1988. A theory of floating quantifiers and its corollaries for constituent structure. *Linguistic Inquiry* 19: 425–449

田川拓海. 2009.『分散形態論による動詞の活用と語形成の研究』 博士論文. 筑波大学.

Takahashi, Daiko. 1993. Movement of *wh*-phrases in Japanese. *Natural Language & Linguistic Theory* 11: 655–678.

Takahashi, Daiko. 2006. Apparent parasitic gaps and null arguments in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 1–35.

Takahashi, Daiko. 2008a. Noun phrase ellipsis. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 394–422. Oxford University Press.

Takahashi, Daiko. 2008b. Quantificational null objects and argument ellipsis. *Linguistic Inquiry* 39: 307–326.

Takahashi, Daiko. 2020. Derivational argument ellipsis. *The Linguistic Review* 37: 47–74.

Takano, Yuji. 2002. Surprising constituents. *Journal of East Asian Linguistics* 11: 243–301.

Takano, Yuji. 2015. Surprising constituents as unlabeled syntactic objects. *Nanzan Linguistics* 10: 55–73.

高野祐二. 2020.「二重側方移動とラベル付け」斎藤衛・高橋大厚・瀧田健介・高橋真彦・村杉恵子（編）『日本語研究から生成文法理論へ』, 19–33. 東京: 開拓社.

高山善行・青木博史（編）2010.『ガイドブック 日本語文法史』東京: ひつじ書房.

Takezawa, Koichi. 1987. A configurational approach to case marking in Japanese. Doctoral dissertation, University of Washington.

竹沢幸一・John Whitman. 1998.『格と語順と統語構造』東京: 研究社出版.

田窪行則. 1987.「統語構造と文脈情報」『日本語学』6: 37–48. 東京: 明治書院.

田窪行則. 2010.『日本語の構造 推論と知識管理』東京: くろしお出版.

Tanaka, Hidekazu. 1999. LF *wh*-islands and the Minimal Scope Principle. *Natural Language & Linguistic Theory* 17: 371–402.

田中秀和. 2020.「感嘆文の統語論」于一楽・江口清子・木戸康人・眞野美穂（編）『統語構造と語彙の多角的研究—岸本秀樹教授還暦記念論文集—』, 133–146. 東京: 開拓社.

田野村忠温. 1988.「否定疑問文小考」『国語学』152: 109–123.

田野村忠温. 1990.『現代日本語の文法I—「のだ」の意味と用法—』大阪: 和泉選書.

Tatsumi, Yuta. 2013. A smuggling approach to Japanese cleft construction. *JELS* 30: 348–354.

Tenny, Carol. 2006. Evidentiality, experiencers, and the syntax of sentience in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 15: 245–288.

Terada, Michiko. 1993. Null-expletive subject in Japanese. *Kansas Working Papers in Linguistics* 18: 91–110.

寺村秀夫. 1991.『日本語のシンタクスと意味III』東京: くろしお出版.

Tsai, W.-T. Dylan. 1999. On lexical courtesy. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 39–73.

坪内佐智世. 2009.「18 ああ、そうタイ! うん、そうバイ!!」九州方言研究会（編）『これが九州方言の底力!』, 88–91. 東京: 大修館書店.

辻村敏樹. 1958.「ことばの使い方—敬語—」『日本語文法講座5・表現文法』東京: 明治書院.

辻村敏樹. 1967.『現代の敬語』東京: 共文社.

辻村敏樹. 1968.『敬語の史的研究』東京: 東京堂出版.

Tsunoda, Tasaku. 2020. Modern standard Japanese. In Tasaku Tsunoda (ed.) *Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction with Biclausal Appearance*, 65–123. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

Travis, Lisa. 1984. Parameters and effects of word order variation. Doctoral dissertation, MIT.

上田由紀子. 2007.「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』, 261–294. 東京: ひつじ書房.

Ueda, Yukiko. 2011. Functions of CP-domains: An interface between information structure and syntactic structure. 武内道子・佐藤裕美（編）『発話と文のモダリティ—対照研究の視点から—』, 139–157. 東京: ひつじ書房.

内堀朝子. 2007.「モダリティ要素による認可の（非）不透明領域」長谷川信子（編）『日本語の主文現象』, 295–330. 東京: ひつじ書房.

Urushibara, Saeko. 2009. A morphosyntactic analysis of the Japanese modal element *-mai*. *Sophia linguistica*, 171–188. Shopia University.

漆原朗子. 2011.「助動詞「まい」の形態統語的分析」長谷川信子（編）『70年代生成文法再認識—日本語研究の地平—』, 319–336. 東京: 開拓社.

Watanabe, Akira. 1992. Subjacency and S-structure movement of *wh*-in-situ. *Journal of East Asian Linguistics* 1: 255–291.

Watanabe, Akira. 2006. Functional projections of nominals in Japanese: Syntax of classifiers. *Natural Language & Linguistic Theory* 24: 241–306.

渡辺明. 2009.『生成文法』東京: 東京大学出版会.

渡辺実. 1971.『国語構文論』東京: 塙書房.

Yamada, Akitaka. 2019. The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers. Doctoral dissertation. Georgetown University.

Yanagida, Yuko. 1996. Syntactic QR in *wh-in-situ* languages. *Lingua* 99: 21–36.

Yoshida, Tomoyuki. 1999. LF subjacency effects revisited. In Vivian Lin, Cornelia Krause, Benjamin Bruening, and Karlos Arregi (eds.) *Papers on Morphology and Syntax, Circle Two*, ed., 1–34.

Cambridge: MIT Working Papers in Linguistics.

Yoshimoto, Keisuke. 2017. On (non-)roothood of the Japanese politensss marker *-mas-*. *Proceedings of the Forty-first Annual Meeting of the Kansai Linguistic Society*: 229–240.

Yoshimoto, Keisuke. 2018. On conditions for the dupulication of the Japanese politenss marker *-mas-*. In Céleste Guillemot, Tomoyuki Yoshida and Seunghun J. Lee (eds.) *Proceedings of the 13th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL13)*, 465–470.